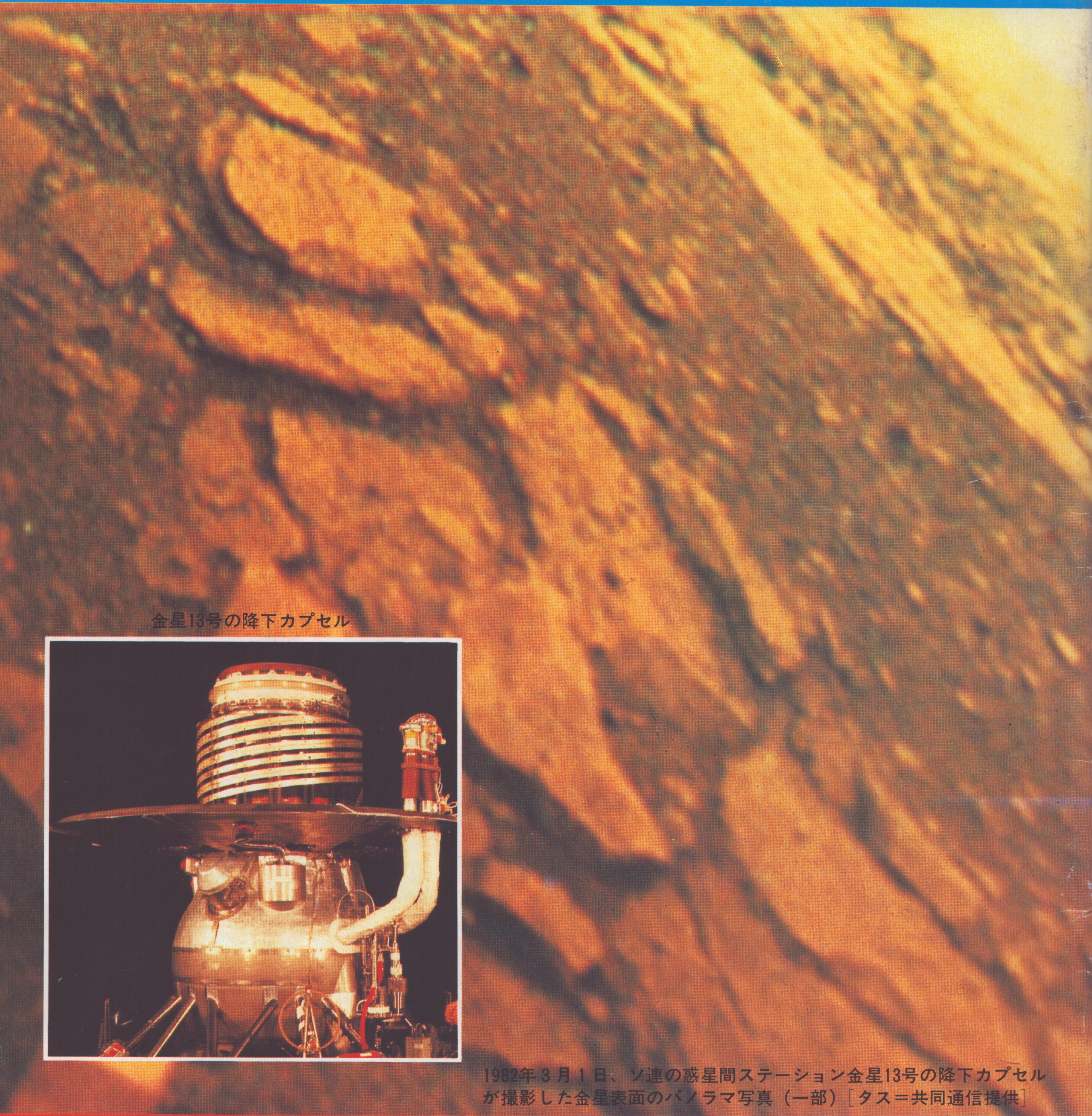
昭和57年4月15日号（毎月2回1日、15日発行）第25巻・第8号　通巻558号　昭和54年6月2日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1982
8
4.15.



金星13号の降下カプセル

1982年3月1日、ソ連の惑星間ステーション金星13号の降下カプセルが撮影した金星表面のパノラマ写真（一部）［タス＝共同通信提供］

第17回ソ連労組大会でのブレジネフ演説
ベロルシア共和国特集

第8号　1982年4月15日発行

本誌の材料はノーボスチ通信社の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

ソビエト社会主義共和国連邦大使館
東京都港区麻布台2—1—1　電話(583)4224
(本誌についてのお問合せは広報部へ)

広報部　東京都品川区東五反田3—9—13
郵便番号141　電話(03)447—3536(代表)
振替口座東京9—122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　東京都千代田区西神田2—7—12　電話03(263)2811　振替口座東京0—13581
(加入者名＝新時代社)

ソ連・ポーランド間の友好強化

3月1日、クレムリンで行われたソ連・ポーランド党・政府代表団の会談



ウォイチエフ・ヤルゼルスキ団長以下のポーランド党・政府代表団が3月1—2日モスクワを公式訪問し、L・I・ブレジネフ団長以下のソ連党・政府代表団と会談、広範囲にわたる両国間の協力の問題と現下の国際情勢の緊要問題を討議した。

3月2日、クレムリンで開かれたレオニード・ブレジネフ・ソ連共産党中央委員会書記長・ソ連最高会議幹部会議長とウォイチエフ・ヤルゼルスキ・ポーランド統一労働者党中央委員会第一書記・ポーランド閣僚会議議長との会談では、ソ連とポーランドの政治、経済、科学技術、文化面の協力の発展、ソ連・ポーランド両国民およびソ連共産党とポーランド統一労働者党との兄弟的友好の強化などの重要問題が討議された。

両国首脳は国際情勢の現状とその発展の見通しの評価で一致した。そのさい、ソ連とポーランド人民共和国は、今後とも社会主義共同体の利益を守り、帝国主義的脅し、圧力、恐喝に反対する諸国民の闘争に貢献するとともに、これまで同様、緊張と対決を、機の熟した国際問題の平和的解決やデタントの政策と良識の勝利に切り替えることに、たえず努力すると強調した。

会談は誠意に満ちた同志的な雰囲気の中で行われ、討議された諸問題について意見の一致が見られた。

ソ連・ポーランド協力の一連の当面の諸問題は、3月2日にクレムリンで開かれたニコライ・チーホノフ・ソ連共産党中央委員会政治局員・ソ連閣僚会議議長とヤルゼルスキ・ポーランド閣僚会議議長との会談で討議された。

双方は、ポーランドの経済生活を健全にし、ポーランドの工業企業の活動を正常化するうえで、両国の協力の役割はますます高まっていると指摘した。

ポーランドは、発展した経済力、技能の高い要員、兄弟的連帯、そしてソ連や他の社会主義共同体諸国からの支

援など、前述の目的を達成するのに必要な長期の条件をそなえている。会議ではその確信が述べられた。

ソ連との友好・同盟は、ポーランドの対外政策の基礎であり、国の独立と国境の安全の保障条件である。ポーランドの党・国家代表団のソ連公式友好訪問の成果にかんするソ連・ポーランド共同コミュニケには、このことがはっきり述べられている。

レオニード・ブレジネフを団長とするソ連代表団とポーランド代表団の間で、一連の広範な両国の協力問題、現代の国際情勢の緊要な問題について話し合いが行われた。

ウォイチエフ・ヤルゼルスキはポーランド情勢を特徴づけ、国内情勢の正常化のために払った努力について語った。

ポーランド代表団は、社会主義体制がポーランド国家の主権、ポーランド国境の不可侵性、近代的な経済力づくりおよび民族文化の発展条件を、保障したと強調した。ポーランドは国際舞台で権威をかちとった。前指導部の誤りと社会主義建設の法則性逸脱を悪用した社会主義の敵の行動は、ポーランド人民のこれらすべての獲得物を脅威にさらした。反革命勢力は帝国主義層の支援に頼り、ポーランド人民が選んだ政治制度、社会・経済制度を覆し、ポーランドを混乱と無政府状態の淵に突き落とそうとした。

戒厳令の施行は、ポーランドの反社会主義的政変を防ぎ、ポーランドを内紛から救った。

ポーランド国民と国家の最高の利益を守り、ポーランドの憲法に完全にのっとったこの措置は、国家権力の最高機関であるポーランド人民共和国国会の承認を得たものである。いま社会主義の敵がかく乱したポーランドの経済・政治・社会生活は次第に改善されつつある。

経済の崩壊、無政府状態、無秩序の復活、社会・政治制度の変更を目的とした行動を再開しようとする試みはすべて、今後とも断固阻止されるだろう。

ポーランド人民共和国は今後とも社会主義共同体の強固な一環であり、ワルシャワ条約と経済相互援助会議の参加国であり続けるだろう。ソ連は、友人であり同盟国である社会主義ポーランドに支援を与えてきたし、今後も与えるだろう。

ソ連とポーランドは、ポーランドの内政に対する米国やその他の資本主義諸国の干渉を断固非難し、退けている。

こうした干渉は、国際法、国連憲章、ヘルシンキ会議最終文書、現行条約・協定の公認の規準を乱暴に踏みにじるものである。ソ連・ポーランド双方は、人民ポーランドとソ連に対する米国とその一部の同盟諸国の差別措置が、露骨な恐喝と圧力であり、平和な国家関係をぐらつかせようとする試みであり、欧州の平和と安全への脅威であると考えている。ポーランドの社会主義の基盤を破壊しようとする試みは、外国からのものも含めてすべて、必ずや失敗するだろう。

ポーランド代表団は、ポーランド人民共和国の困難な時期にソ連が与えた政治的、経済的援助に対し深い感謝の意を表明した。

国際情勢の現状とその発展にかんする意見の交換を通じて、その点にかんするソ連とポーランド人民共和国の見解と立場が、一致していることが確認された。

帝国主義侵略勢力のせいで、国際情勢はひどく悪化している。米国の支配層は軍拡競争をますますあおっている。米国の軍事計画・ドクトリンは核戦争を前提にしている。米国は、軍事的優位をかちとることが政策の目的だと、公然と宣言している。米国は他国の内政に厚かましくも干渉し、圧力と押し付け政策をとって自由と社会的進歩をめざす諸国民の当然の志向を押さえこもうとしている。軍国主義と覇権主義的野望の増大、米国の政策に見られる侵略性、冒険主義の現れの強化は、世界平和を脅威にさらしている。

ソ連とポーランド人民共和国は対決に反対し、緊張と軍拡競争の進展に反対している。両国は軍事的危険の排除、平和の強化、軍備制限と軍縮、ならびに国際情勢の抜本的な健全化を断固求めている。

ソ連、ポーランドは国際緊張の緩和、紛争の解決と防止、諸国民の自由な、独立した発展の権利の保障、諸国の主権と独立の尊重、国際協力の発展をめざす方針をとっているが、会談ではこの方針に立って世界のさまざまな地域の事態について意見の交換が行われた。

ソ連とポーランド人民共和国は、平和と進歩のために、国際舞台で一致団結して行動し続ける確固たる決意を表明した。

第17回ソ連労働組合大会における L・I・ブレジネフの演説

（一九八二年3月16日）

3月16日、モスクワのクレムリン大会宮殿で開かれた第17回ソ連労働組合大会で、L・I・ブレジネフ・ソ連共産党中央委員会書記長・ソ連最高会議幹部会議長が演説した。以下はその全文である。

親愛なる同志の皆さん！

尊敬する外国の来賓の皆さん！

私は、わが党の中央委員会政治局から、ソ連労働組合大会であいさつするよう委任された。責任の重い、名誉な役目だ。労働組合大会は国内政治生活の大きなイベントである。ここには勤労大衆の広範な層の代表者、働く人たちの使者がいる。この人たちの労働――最も完全で最も高潔な意味での労働――がわれわれの祖国の偉大さと力強さの基礎になっている。

労働組合運動が都市とならんで農村を引き入れ、コルホーズを引き入れた今、労働組合は、数量的にも（一億三〇〇〇万人！）質的にも類のない勤労者の組織に変わった。

思想的見地からはこれは、常に労働組合運動の骨格となってきた労働者階級の世界観が、ソ連社会の全階級、および社会的グループの思想的立場を決定していることを、改めて強調していることを意味している。政治的にはこれは、ソビエト権力、われわれの全人民国家の基礎がより堅固に、より確固たるものになったことを意味している。社会的にはこれは、都市と農村の差異の消滅、肉体労働と精神労働の接近がつづいていることを示している。労働者階級、コルホーズ農民、そして勤労知識人の労働組合運動への参加は、ソ連国民の強まる団結、発達した社会主義社会の全面的な進歩の重要な指標である。

親愛なる皆さん、あなたがた、大会代議員の皆さんと、皆さんをこの大会に選出した人たちすべてに、ソ連共産党中央委員会、ソ連最高会議幹部会、ソ連政府からの熱烈な、心からのあいさつをお伝えする。ここに出席しているすべての人に、第17回労働組合大会の開催のお祝いを申し上げる。

皆さん！ 労働組合は社会主義社会の政治制度の中で重要な地位を占めている。労働組合は民主主義を発展させ、勤労者を共産主義建設に引き入れる力強い手段である。ソ連共産党第26回大会においてもまさにこのことが問題になったのである。満足な気持ちで指摘しておきたいが、われわれの戦闘的、ダイナミックな時代が提起する多岐にわたる問題の解決にソ連の労働組合は、大きな役割を演じている。これはほかに代わるもののない役割だと率直に言っていいだろう。そうあるべきなのだ。

全ソ労働組合中央評議会の報告やこの後に控えている討論に決して先んじるわけではないが、私は、労働組合の仕事や労働組合の課題に関連のある考えをいくつか述べたいと思う。

労働組合は管理の学校、経営の学校、共産主義の学校であるとのV・I・レーニンの言葉はみんながよく知っている。非常に正確で、奥行きが深く、古びることのない言葉である。これらの言葉には社会主義の条件下における労働組合運動のレーニン的概念の本質が表わされている。ソビエト権力の時代になってから数世代の勤労者がこれらの学校を通過した。そして世代を経るごとに、社会的生産の増大に対する配慮と、個々の勤労者の労働・生活条件、勤労者の権利の保護、勤労者の福祉の向上に対する配慮とがますます強く、労働組合の実践の中で結びついていったのである。

労働組合活動のこれらの主導的な方向で、多大の活動が行われ、勤労者の創造的積極性を高める貴重な経験が蓄えられた。私がここで言っているのは、働く人各人の声が聴取されるはずである労働者集会と常設生産会議のことであり、また経済成長の強力なテコとなっている社会主義競争のことである。

私がさしているのは、呼応計画、発明者や合理化運動者の運動、先進的経験の導入、労働生産性の向上をめざす創造的イニシアチブと創意、科学技術の最新成果の合理的活用、資源の節約、質の改善のことである。

労働組合が社会進歩、経済の発展、大衆の教育のために利用できる手段は、非常に多く、さまざまであるが、はたしてこれらの手段は十分に、効果的に活用されているかというと、多分ノーと言えよう。労働組合集会、協議会、単産、共和国別の労働組合大会で、このことについて少なからず述べられた。報告・選挙キャンペーンのさいにかなりはっきりと現れた実務的な自己批判的な気持ちが、ソ連労働組合大会でうち固められるだけでなく、さらに新たに拍車をかけられれば、すばらしいし、有益であろう。

今後の課題は、現代の要求に合わせて労働組合組織の活動をより速く、よりエネルギッシュに調整し直すことである。労働組合はもっと大胆に新しい経済・社会問題に取り組み、もっと大大的に科学の成果を取り入れ、組合傘下の活動分子の技能をたえず引き上げなければならない。よく仕事に通じること、新しいものに敏感になること、大衆とのきわめて緊密な結びつき、人人への配慮、人間的な心をわきまえること――およそ現代の労組活動家はこうした資質を持たねばならない。

発展の各段階が、新しい課題を出し、その課題に新しい具体的内容を盛り、課題の解決に新しい態度を要求することは、われわれと皆さんがこれまでに幾度となく胸に刻み込んできたことである。たとえば経済であるが、経済の規模は変わったし、労働の性格も変わった。経済建設の重要方向も変わった。経済を集約的な成長の軌道に乗せ、経済を本当にエコノミックなものにすることこそ、現在の国家機関、経済機関、そしてもちろん労働組合の共通の目標である。

党の経済政策の諸要求を働く人々一人一人に徹底させ、これらの要求を各人の身近な、当然のものにすること、もう一つ、この政策こそが各勤労者の死活の利益に合致し、だから自分のイニシアチブや創造的探求によってこの政策の完全な成功を促進することが各人の責務であることを、納得のいくように示すこと――これが、皆さん、第11次5ヵ年計画における労働組合の最も緊要な問題であると私は言いたい。

それぞれの具体的な部署での仕事を、もっとうまく、もっと効果的に組織するには、どうしたらよいか？ 科学技術進歩の成果をどのようにして生かすか？――それからまたも全般的ではなく、具体的にそれぞれの職場にその成果をどのように取り入れたらよいか？ それぞれの生産の場やそれぞれの業種で、労働生産性を引き上げ、物材や労働資源を非常に厳しく節約するには、何をどのようにやるべきか？ これらの問いに対しては、管理部側だけでなく、労働組合も答えを出さねばならない。

各労働組合、各労組組織は、実際問題における党の方針を実現するに当たり、最大限に具体性と実務的能力を発揮して行動することが、きわめて大切である。われわれはぐずぐずしてはおれない。働かねばならないし、仕事をやらねばならない。

われわれはすでに第11次5ヵ年計画の2年目に入った。ソビエト人は、第26回党大会の決議を自分の身近な、血を分けたものとして受け入れ、確固たる自信を持ち、解決すべき課題のむずかしさや壮大さを十分にわきまえて、前進している。そしてこのことが国の明確な労働のリズムを定め、都市と農村の働き手たちの良心的な仕事を保障しているのである。

自分の義務課題を着実に達成、超過達成し、突撃的に、熱意を込めて働いている企業や組織の労働集団に対して、いまわれわれは心からの感謝を述べる十分な根拠をもっている。皆さん、この壇上から労働組合に対しても感謝の言葉を述べたい。労働組合はわれわれの成功や成果に、最も直接的に、最もじかに関係している。

わが国には幾千人もの先進的労働者がおり、幾千もの先進的企業がある。こうした人々と企業は、たとえるならば、偵察戦を行い、重要拠点を確保した。だが周知のとおり、偵察兵だけでは勝つことはできない。つまり今われわれは全戦線でタガを引き緊め、全般的攻勢に転じなければならないのである。そして労働組合の位置は、攻勢に転じた労働部隊の最前列にある。

皆さん！ 労働組合大会では、すべての勤労者、すべての国民の利害にかかわる重要な、差し迫った問題がいつもとりあげられてきた。今日ではこうした問題の一つに食料問題がある。党と政府は存在する困難をよく知っており、その克服のために可能なかぎりのことをしている。ソ連共産党中央委員会総会では、この問題を根本的に解決する方途を盛りこんだ食料計画の審議が予定されている。だが農業と農業関連工業部門には、食料品の供給改善のためにただちに着手できるし、着手しなければならない、差し迫った、焦眉の問題がたくさんある。

ここには、労働組合がエネルギーを傾注すべき分野がきわめて大きい。その直接の任務は、世論の注意を生産物の保存の改善とロスの防止へ引きつけることだ。ソフホーズとコルホーズの労働組合組織は、現地での生産物の加工の可能性をすべて活用する問題を鋭く提起し、解決しなければならない。

労働組合はまた企業の副業経営、個人副業経営にも関心を向けるべきだ。労働組合は、食料問題に関係のあるすべての機関と従業員の創意と積極性を伸ばすために、具体的な方法を探求する使命をもっている。皆さん、このことを考えていただきたい。

私が触れたいと思うもう一つの問題は、まったく別な分野である。作業班組織と労働の刺激の新しい諸形態がそれだ。新しい形態は、生産の効率を高め、現段階での党の経済戦略に完全に合致している。現行の5ヵ年計画では、この形態は、よく知られているように、きわめて広範囲に普及するはずだ。

統一的指令によって働く総合的作業班では、時間、労働力、物的資源のいちじるしい節約が達成されている。そこでは、規律はいっそう強く、賃金は高くなり、若い労働者はいっそう速く技能を学んでいる。そこでは、当然のことながら、労働生産性も高い。一つの事実だけを挙げよう。第10次5ヵ年計画の末期には請負作業班の建設労働者の労働生産性は、この部門の平均よりも約3割高かった。この差は大きい。

良く組織され、効率的に、いわば賢明に働いている作業班は労働者の管理技能の向上のための真の学校であり、あらゆる創造的イニシアチブのための実験室である。このような作業班のメンバーは、仕事のなかで、毎日の共同作業のなかで、現代に極めて必要な経済的、政治的知識を獲得する。このような作業班のなかでは、自分の工場の経営者であり、国家の主人公であるという感覚が実際に鍛え上げられる。

このような作業班の長所を証明する必要はないだろう。にもかかわらず、作業班請負制の導入が常に首尾一貫しているとは限らない。作業班の解消というケースもある。どこに問題があるのだろうか？

作業班を編成するに当たって先進的労働者たちは、ある労働課題を全体として、全部まとめて、適時に、高い質で遂行する責任を負いたいという希望と用意を表明している。しかし、残念な

がら、すべての経営指導者が仕事に必要な条件を作業班に保障し、いわば、責任を分担する意欲を示しているわけではない。これには生産の組織の欠陥、保守的な思考も影響している。こうしたことはすべて、作業班方式の本質そのもの——その独立採算制という基礎を破壊する。

従って、独立採算の作業班に〝青信号〟を出すためには、経営機構の改編を続け、物質と技術の供給を改善し、仕事の計画と集計における形式主義とたたかう必要がある。労働組合が——それぞれがその産業部門や職場において——労働組織のこの進歩的形態の形成と強化に積極的に、粘り強く参加することを、私は確信している。

経営機構の改善への労働組合の参加という問題は、当然のことながら、作業班にかんする問題の枠を越えている。労働者の個人的利益と企業や社会全体の利益とをうまく結合させるにはどうすればよいか？　手労働を最小限に減らし〝余計な〟人々——といっても、わが国で余っているわけではまったくなく、他の部署でぜひとも必要という意味——を浮かせるには、どうしたらよいか？　いかにして労働と賃金の関係をもっとも直接的で、目に見えるようにするか？　こうした問題に対して回答する使命をもつのは、研究センターや学者だけではない。生産集団や労働者集会は、この問題に大きな貢献をすることができるし、しなければならない。

人生経験に富み、実践的な知恵のある人々から話を聴き、その人たちの意見を汲みとる必要がある。労働組合こそ、その援助をしなければならないのだ。

皆さん！　勤労者の生活向上に対する配慮は、経済発展に対する配慮と分かちがたく結びついている。福祉の向上は、生産の然るべき発展なしには確保することができない。同時に、労働と生活の条件が改善されればされるほど、生産も成功裏に進むのだ。これは、社会主義的生活様式の公理である。そして、われわれの社会が成熟すればするほど、勤労者の日常の必要——住宅、食料、サービス部門、保健、教育といった人間の福祉と気分を規定するすべてのこと——に対していっそう大きな配慮を払うことができるし、また払わなければならないのだ。

すべての国民の利益と意思を表現する勤労者の国家においては、働く者の利益と権利を守るという労組の課題は、すっかり片付いているのではないか——こういった質問が出されるかもしれない。しかし、すっかり片付いてはいないのだ。もちろん、わが国の労働組合は、資本主義諸国のように、国家や経営者から働く者を守っているのではない。労働組合は、ある個人や機関によるソ連の法律の侵害から働く者を守っているのだ。

労働組合は、諸法規や労働法からのあらゆる種類の逸脱に非妥協的でなくてはならない。しかし、それだけでは不十分だ。労働組合の活動は、次のような状況を作り出す使命を持っている。すなわち、労働者の権利が侵害される可能性そのものが除去され、まだ若干の指導者が犯しているうぬぼれや無関心といった現象が考えられなくなるような状況である。

また官僚主義も常に労働組合の砲火にさらされていなくてはならない。皆さん、私がこう述べても怒らないでいただきたいが、若干の労組の役員には、まだこの悪弊が残っているのだ。

もちろん、労働組合は、複雑で多様な課題の解決を使命とする組織であって、相応の機関なしにはやっていけない。同時に明らかなことは、この機関の効率が、たんにその数だけでなく、その構造がよく考えられたものか、その仕事の組織化が正確で、均整のとれたものかということにもかかっていることだ。この点ですべてが順調にいっているとみなすことができるだろうか？　いやできまい。

重要なことは、労組機関の職員が事務作業の時間を減らし、人々の中にいる時間を増やすことだ。また、彼らが労働組合の積極分子や労働組合の創意に満ち、エネルギッシュな一般組合員に一層しっかりと依拠することである。言い替えれば、ここでも官僚主義との闘いにおける最良の薬が、社会主義的民主主義の全面的な発展なのだ。

労働組合は、労働集団全体と同時に個々の特徴や特色をもつ各個人をもその視野の中に置くべきである。また、ソビエト的性格の最良の特徴とソ連人の最良の性質が最も良く現れるような雰囲気。生産における社会的・心理的、精神的気候を創出することに常に配慮すべきである。このことについては、今日この大会で述べるのが最も時宜にかなっているだろう。

労働組合は、わが国のすべての社会団体と同様、あらゆる進歩的なものを全面的に支持し、誠実に働くすべての人々への尊敬の念をはぐくみながら、同時に、大酒飲みや仕事を投げやりにする者、不良品ばかり作る者、国民の財産を横領する者などに対しては非妥協的でなくてはならない。こういった連中は、少数とはいえ、労働者の名誉を傷つけているのだ。彼らを精神的にも物質的にも罰する必要がある。わが国の労働法の仕上げと改善に際しては、この点を考える必要があるだろう。

大会代議員の皆さんにもう一つの考えを伝えたい。ソ連共産党中央委員会あてに、また私の知っている限りでは全ソ中央労評にも、住宅の配分、商業や公共給食の組織、保健の欠陥に関して多くの投書が来ている。この分野の作業をもっと厳格な監督のもとにおくという問題が明らかに日程に上っている。

もちろん、わが国には人民監督があり、社会的監督の委員会やグループがあるではないか、と言う人がいるだろう。まさにそのとおりだ。だが自らにたずねてみよう。わが国の監督員はいつも十分に、有効に監督しているだろうか、と。おそらく、いつもそうだというわけではあるまい。もし監督がゆきとどいていたならば、私があげたような投書はなかったであろう。

従って、監督を、とくに人々の日常の需要に直接関連した分野の監督をもっと実効あるものに、形式的ではなく、公正なものにしなければならない。これは労働組合にとって大きな政治的重要性と深い民主的内容をもつ課題である。

人々の死活的利害にかかわるすべての問題で、労働組合委員会はもっと積極的にソビエト権力機関と協力しなければならない。逆に人民代議員ソビエトとその執行委員会の方も、労働組合と協力しなければ、効果的に機能できない。最高レベルを含むすべてのレベルで相互の協力を強めなければならない。

皆さん！　労働組合の権利と責任が拡大され、その権威が高まり、労働組合と大衆の結びつきが強まることは、社会主義的民主主義発展の重要な方向の一つである。

党はいつも、それぞれの社会団体が、そしてもちろん労働組合が、可能なかぎり十分にその機能を遂行し、レーニンの表現を使えば、大衆がなにに生きがいを感じているか、なにに痛みを感じているか（『レーニン全集』、大月書店版第32巻11ページ）をできるかぎり完全に反映するようになることを支持してきたし、今もしている。なぜなら、そうすることによって党と国家はその政策の中で国民の、わが社会のすべての階層の意思と利益をもっと完全に反映できるからである。

党は労働組合に完全な信頼を抱いて接しており、労働組合が行っている活動を高く評価し、その組織的自主性を尊重している。ソ連社会の指導勢力である党は、その権威によって労働組合の影響の増大を促進している。党機関と労働組合の良好で実務的な協力は、経済や社会問題の場合であれ、文化建設やソ連国民の精神的発展の場合であれ、最も複雑な問題を首尾よく解決するのに役立っている。

ブルジョアジーの御用学者、改良主義者、修正主義者といった社会主義の敵は、以前から労働組合をマルクス・レーニン主義政党から引き離すことをめざし、労働組合の〝中立〟論を執拗に押しつけてきた。だが実際には、こうしたすべてのことの裏には、労働組合をブルジョア的政策の道、労働者階級の利益を裏切る道に引きずりこもうとする企みがかくされているのである。

わが国の党、国家、労働組合はそれぞれが自らの役割をはたしながら、一致協力して活動している。この協力と統一のなかに、共産主義の事業が成功する保証がある。そしてこの統一をゆるがすことは誰にもできない！

皆さん！　わが党と国民はソ連の労働組合の国際活動を高く評価している。勤労者の利益と平和の強化のためのこの活動は、国外のわれわれの階級的兄弟によって正当に評価されている。その一つの証拠が、皆さんの大会に、多くの外国の来賓が出席していることである。来賓の皆さんに心からあいさつをおくり、皆さんが大きな、幾百万の勤労者にとって重大な仕事で成功を収めることを希望したい！

今日ほどあらゆる国の勤労者とその労働組合の統一が必要とされるときはない。共通の関心事は多いし、きわめて多い。その第一は、戦争の脅威をなくし、軍拡競争を停止し、緊張緩和を維持・強化することに対する関心である。世界労働組合大会はこのことを明瞭に示した。大会は統一と階級的、反帝国主義的基礎にもとづく連帯への、また戦争の危険に反対し、平和の強化をめざす闘争で力を合わせることへの高まりつつある志向を表明した。

次に国際情勢全般について。それが複雑で先鋭だと言うだけでは、恐らく不十分だろう。それは国際関係の今後の発展全体に対する不安の念をひき起こすものである。

たとえば、欧州安全協力再検討マドリード会議で何が起こったか、見ていただきたい。

安全と協力の審議を、諸国民はこの会議にゆだねたのである。だが、そのかわりに、米国とその他若干のNATO諸国（明らかにワシントンの圧力を受けている）の政府高官たちは、国際的雰囲気を最大限に毒しようという全く別の意図をもってマドリードにやってきたのである。口実としてポーランド国内の出来事が選ばれた。NATOブロックの代表たちは、ポーランド人民共和国の国会と政府、ポーランド統一労働者党指導部が自国の国内問題をどう解決すべきかを指図し始めた。ソ連その他の社会主義共同体諸国に対する中傷も、なしではすまされなかった。およそ今日の世界に存在する最も血まみれの非人道的な政権を百方手をつくして庇護し、自国内で労組その他の民主団体の活動家を弾圧している政府の代表たちが、臆面もなく、〝人権擁護〟について演説をブッたのである。

繰り返して言うが、ポーランドの事態は口実にすぎなかった。誰もポーランドにおいて社会主義を打倒することはできない。どうやら、ポーランドの反革命派を外国から鼓舞している連中も、このことを理解しているようだ。マドリードでの本当の目的は、全般的な雰囲気をさらに緊迫させ、これによって西欧に対する米国の不吉な計画の実現を容易にするところにあった。西欧を新しい米国のミサイルの発射場に変えようとしているのだ。衝突が起こった場合に報復攻撃を引き受ける避雷針にしようとしている。ついでに西欧と社会主義諸国との正常な経済交流の発展をさらに一層妨害しようとしている。というのも、この交流は明らかにワシントンの気に入らぬものだからである。ワシントンにとって西欧は経済面での主要な競争相手の一人なのだ。

こういった行動は、欧州における——いや、欧州だけに限った話ではないが——デタントと平和的協力の運命について、真剣に考え込ませずにはおかない。

マドリードは、最近の多くの例の一つにすぎない。恐らくは、国際関係全体がいま、はっきり見える分かれ道にさしかかったと言ってよかろう。

一方には、平和を固め、すべての国家間の平和的協力を発展させる道がある。これは、各国の独立、権利と利益の厳格な尊重にもとづく協力であり、内政不干渉、全般的安全と相互信頼を強化するための共同の努力にもとづく協力である。この道は、ヘルシンキ会議の諸決定の中にも、過去10年間のその他多くの国家間文書の中にも明示されている。この道は、この10年間の諸国民、特に欧州諸国民の実地の経験によって確認されている。

他方には、〝冷戦〟と本格的な戦争の瀬戸際での危険な均衡の新たに出現した擁護者たちが人類に執拗に押しつけている道がある。

彼らは、幾世紀もの間に形成された国家間関係の法的、倫理的規範を投げ捨て、諸国家の独立と主権を抹殺することを望んでいる。彼らは、すべての大陸の広大な地域を自己の〝死活の利益〟地帯と宣言し、世界の政治地図を書き替えようとしている。彼らは、ある者に命令し、別の者を裁き、罰する〝権利〟をわがものとしている。好ましくない政府や国家の経済的政治的〝不安定化〟計画をはばかることなく公然と宣言し、実現しようとしている。あれこれの国民が体験している諸困難を、前例のない破廉恥さで喜んでいる。正常な交流や国際貿易を〝制裁〟と封鎖にすり替え、接触や交渉を核兵器使用の脅しまで含めた軍事力行使のたえまなしの脅しにすり替える試みがなされ

ている。

これらすべてを見る時、ただただ驚くばかりである。そして、つぎのような疑問がひとりでに出てくる。このような政策の中でより大きなものは次のどれか、経験不足か、軽率さか、あるいは人類の運命に関わる重大な問題に対する無責任な、はっきり言って冒険主義的な、アプローチか？　このような政策を〝政治的破局への方針〟と名付けたのは、われわれではなく、米国の有力なブルジョア新聞である。この定義の正当性に異論をとなえることは困難だ。

ここで封鎖と〝制裁〟について触れたい。ソ連は大きな国であり、強大な経済と豊かな資源をもっている。社会主義共同体全体となればさらに大きい。だからわれわれは何とかしのいでいけるだろうし、誰にもその点に疑問の余地はない。ところが、ワシントンが同盟国と名指している国々の中でも多くの国は、自国の発展のすべてが対外貿易にはるかに大きく左右されている。だから、国際貿易と正常な経済交流に対するカウボーイばりの奇襲政策が誰の利益により大きな打撃を与えるか、わかったものではない。

客観的に言って、国際的雰囲気のいっそうの緊迫化や軍拡競争の激化、諸国間の正常な交流のぶちこわしをめざす路線は、どの国民にも少しもよいことを約束しない。そこにはもちろん米国民も含まれる。だが、それは全人類に少なからぬ災いをもたらす恐れがある。それゆえわれわれは強く確信している——そうした路線は諸国民の支持を得られないし、この路線に未来はない、と。そしてそのことをこの路線の推進者が悟るのが早ければ早いほど、すべての人にとってますます結構なことになるだろう。

ソ連について言うなら、われわれは恒久平和、社会体制、政治体制にかかわりなくすべての国家間の平和的な互恵協力をめざす路線を断固、一貫して維持している。そしてもちろんわれわれは、マドリード会議参加者が、会議の活動再開のあかつきには今度こそ、会議開催の目的であった欧州における安全と協力の問題へと進むことを望んでいる。そして、われわれの大陸の諸国民がこれほど切実に必要としている欧州軍事デタント・軍縮会議の招集への道が開かれることを望む。

同志の皆さん！　米国の率いるNATOブロックの軍国主義路線と侵略的政策は、国の防衛力をしかるべき水準に維持するための措置をとることを、われわれに余儀なくさせている。これは今日の世界の厳しい必然であり、われわれにはもちろん、われわれの平和建設計画を犠牲にして少なからぬ資金をさくことが要求される。しかし、私がすでに一度ならず語る機会を得てきた通り、われわれは、わが国の国民とその友邦や同盟国の安全を保障するために絶対に必要な額以上には1ルーブルたりともこの目的に費やさないし、費やすつもりはない。われわれは際限のない兵器の山の蓄積計画ではなく、軍事対決のレベルの相互低下に関して相手側と理性的な合意をとりつける計画に未来を見ている。

この点でとくに注目に値するのは、いうまでもなく、欧州の核兵器削減問題である。目下のところこれは世界核ミサイル戦争の高まる脅威を防止する最重要問題であると言うことができる。

同志の皆さん、この問題に関するソ連の具体的な、遠大な提案はみなさんもご存知である。それは、欧州に存在している核兵器と欧州向けに予定されている核兵器を双方が1/3に削減することから、欧州大陸から中距離・戦術核兵器を完全に取りのぞくことまでにいたる諸提案である。これも周知のことだが、米国側は、ソ連の一方的軍縮というバカげた要求を煙幕にして、これらの問題の真剣な審議を、いわんや解決を避けており、ワシントンはまるであざ笑うかのように、この要求を〝ゼロ・オプション〟と名づけている。

しかしわれわれは、平等と双方の同等安全という基盤にもとづく理性的な合意を達成する希望を失っていない。そればかりでなく、われわれは、言葉の上でも行動でも、あらゆる方法でそのために尽力している。

親愛な同志の皆さん、私は皆さんに次のことをお伝えできる。欧州にある双方の核手段の大幅削減に関する公正な協定の達成を容易にするため、よい実例を示すことを願って、**ソ連指導部は、ソ連欧州部における中距離核手段の展開に対するモラトリアムを一方的に実施することを決定した。われわれは、すでにソ連欧州部に配備しているそうした兵器を質量両面で凍結し、SS4、SS5という名称で知られている旧式ミサイルを、新型のSS20に取り替えるのを中止している。**

このモラトリアムは、平等と同等安全にもとづいて欧州向けに予定されている中距離核手段に関する協定が米国との間で達成されるまで、あるいは米国首脳が諸国民の安全を無視し、やはりパーシング2や巡航ミサイルの欧州展開の実際的準備に移行する時まで、効力をもつ。

さらに、われわれはかつて、双方の間で合意したモラトリアムが達成された場合、善意のしるしとして、合意にもとづいて将来削減される分の一部として欧州の自国の核手段の数を一方的に減らす用意のあることをすでに言明してきた。現在われわれはわれわれの平和への意欲と双方に受けいれ可能な協定の可能性への確信を示す新しい一歩を踏みだす決定を採択した。**ソ連は、国際情勢の新たな緊迫化がなければ、すでに今年中に自国の中距離ミサイルの一定量を率先して削減する意向である。**

この決定を発表するにあたって、われわれは、全世界の諸国民がソ連の発揮している平和愛好の精神と善意を評価してくれるものと確信している。さらにわれわれは、西側の交渉相手国も善意の精神でこの建設的措置にこたえることができるだろうと期待している。

それと同時にわれわれは、次の点を明確に警告することを義務と考える。もし米国とそのNATO同盟諸国の政府が諸国民の平和への意欲を踏みにじり、ソ連領内の目標を破壊する能力をもつ米国製新型ミサイル数百基の欧州配備計画を実施するなら、世界に別の戦略情勢が生まれるだろう。わが国と同盟諸国に対する米国側からの現実の追加的脅威が生まれるだろう。**その結果われわれは、直接米国とその領土をも含めて相手側を同様の状態におくような対抗措置をとらざるをえないだろう。このことを忘れてはならない。**

この状況は、**戦略核兵器の制限と削減に関するソ米間の合意の問題**が、平和の運命と世界的な核の戦火の脅威の縮小にとってもつ意義を、改めて思い起こさせる。米国は、周知の通り、一九七九年に調印されたこの点に関する条約の発効を拒否した。ワシントンは、この問題に関する今後の交渉の実施をも、いまにいたるまで望んでいない。

しかしこの問題は、ますます切迫した緊要なものとなっている。

第一に、米国の新型ミサイル欧州配備計画の実現は、現在までに達成された双方の戦略手段の均衡をくつがえす恐れがある。これが今後いかなる結果をもたらすかを予測するのは困難だ。

第二に、双方による新型大量殺りく兵器の開発は、もし条約にもとづいてこれに終止符が打たれない場合、今日まだ可能な制限、削減および監視に関する諸協定を根底からだめにしてしまう恐れがある。

だから、われわれはSALT交渉に人為的障害を設けず、近々のうちにこの交渉に着手することを米国政府に呼びかけている。**交渉再開までの間、双方が軍拡競争の新たな道を開かず、海上および地上発射の遠距離巡航ミサイルを配備しないという義務を互いに引き受けることを、われわれは提案したい。**

一般にわれわれは、世界の情勢は相対立する国家ブロックの双方に対し、その軍事活動における最大限の自制を求めていると考えている。われわれは、たとえば、**艦隊行動の相互制限について**合意する用意がある。**とくに、双方のミサイル搭載潜水艦を現在の広大な戦闘パトロール水域から引き揚げ、その航行を互いに合意する範囲内に制限することについて取り決めることは可能だと、われわれは考えている。われわれにはまた、信頼措置を海洋へ、とくに船舶航行のもっともひんぱんな海域へと拡大する問題を話し合う用意がある。**要するに、われわれは、世界の海洋のできるだけ多くの部分を近い将来に平和の地帯にすることを支持している。

これが軍拡競争の抑止と新たな世界大戦の脅威の防止の問題に関するわれわれの新しい提案である。皆さん、ごらんの通り、わが党とソビエト政府は、国民から受けるナカーズ（要望）を誠実に遂行し、恒久平和と、平和な惑星、地球の上に広がるきれいな空に対するわが国の勤労者や全人類の期待をかなえるためにあらゆる手をつくしている。

皆さん！　私の演説の持ち時間が終わりに近づいている。

最後に二、三申しあげたい。今年はソビエト社会主義共和国連邦結成60周年の年である。

これはわれわれの愛する祖国の大きな祝日であり、諸民族友好の祝日である。

これはレーニンの民族政策の勝利である。それと同時に、これは、これまでの成果を総括し、将来の課題を決定し、明確にする格好の機会である。これらの栄えある記念日を迎える準備をしながら、われわれは再三再四自らの行動をレーニンの新社会建設の綱領と照らし合わせている。

党中央委員会は、党員、非党員、あらゆる世代の人々、すべての勤労者に対し、ソ連共産党第26回大会の歴史的決定の実現での新しい成果をもってソ連邦結成60周年を迎えようと呼びかけている。

ここで労働組合がわれわれの偉大な多民族国家の一層の発展と共産主義建設でますます大きな役割を果たすであろうとの確信を表明させていただきたい。

親愛な友人の皆さん、皆さん全員に、そして皆さんの一人ひとりに仕事や社会活動での大きな成功と幸福を願ってやまない。

チジョフ公使からL・I・ブレジネフの回答の説明を受ける斉藤義雄・日本被団協事務局次長



日本被団協の要請に対するL・I・ブレジネフの回答

3月15日、駐日ソ連大使館でL・チジョフ公使は日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の斉藤義雄事務局次長、東京都原爆被害者団体協議会の岡田芳正常任理事と会見し、次のように伝えた。

L・I・ブレジネフは日本原水爆被害者団体協議会の手紙を注意深く読み、次のことをお伝えするよう依頼した。

ソ連はこの手紙の筆者たちの不安と憂慮をともに分かち合い、核戦争を防止し、広島と長崎の悲劇を繰り返さぬよう、できる限りの努力を払っている。

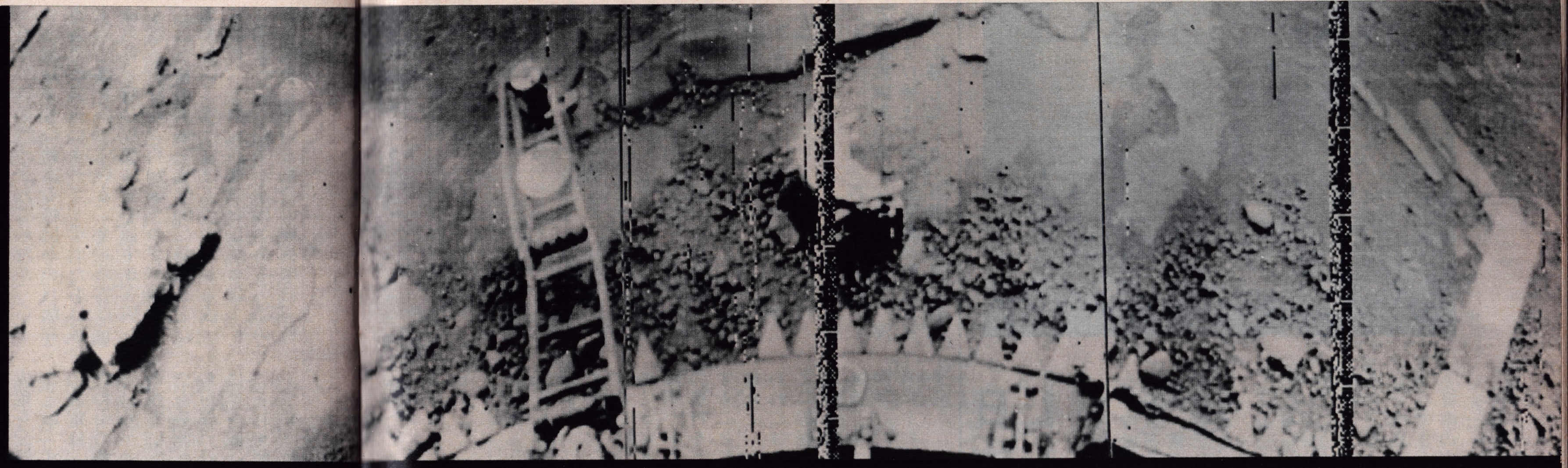
日本の文学者のアピールに対する最近の回答の中でL・I・ブレジネフは、核破局の危険性の排除、軍拡競争の停止、軍縮をめざすソ連の具体的、現実的提案を詳細に述べた。これらの提案は世界の多くの国で反響と広範な支持を見いだした。これを納得のいくように示す例は、核兵器使用を人類に対する最も重い犯罪とする核破局防止宣言が第36回国連総会で国連加盟国の大多数によって採択されたことである。

日本被団協の会員の皆さんが日本の文学者のメッセージに対するL・I・ブレジネフの回答を注意深く検討され、その中に自分たちの手紙で提起されたすべての問題への回答を見いだされるものと確信する。

L・I・ブレジネフは、日本被団協のすべての会員に対し、核破局の脅威の一掃と平和の維持をめざすその立派な活動で成功を収められるようにとの希望をお伝えするよう依頼している。

※　※　※

斉藤日本被団協事務局次長はチジョフ公使の言葉に答え、被団協の手紙へのL・I・ブレジネフの回答に対する心からの感謝をL・I・ブレジネフに伝えるよう依頼した。斉藤氏は、回答の内容は執行委員会の会議で注意深く検討され、審議されたうえ、原爆の悲劇に見舞われた三五万人の日本人全部に伝えられようと確言した。斉藤氏はさらに、被団協の会員たちは、原爆の脅威から身を守るうえで、また、軍事ブロックの撤廃と軍縮をめざすたたかいで、ソ連の協力を期待する、と語った。



一九八二年3月1日、金星13号の降下カプセルが着陸した地点の金星表面の写真。中央下部に見えるのは降下カプセルのランディング・ギアーの一部、その上は跳ねとばされたテレフォトメーター観測窓のふた、右に見えるのはカラー・テスト板、左に見えるのは土壌の物理・力学的性質を調べる装置。ランディング・ギアーにはソ連国章入りの5角のマークが見える。写真に垂直に入っている帯は、観測機器の活動を伝える通信の一部。

金星13号、14号
明けの明星に軟着陸

本誌記者 ミハイル・プホフ

ソ連の惑星間自動ステーション——金星13号と金星14号の飛行、軟着陸と金星上での3時間以上にわたる観測調査について、本誌記者ミハイル・プホフがレポートします。

金星13号は一九八一年10月30日に打ち上げられ、11月一杯と冬中、まる4ヵ月間飛行し、春3月の1日の朝、飛行目標に到達した。モスクワ時間5時55分（日本時間11時55分）、ステーションの降下カプセルは第2宇宙速度で濃密な大気層に突入し、62分後にフェーベ地域東方の南緯7度30分、経度三〇三度の平原に軟着陸した。空気は海面下1kmの水圧に相当する圧力を降下カプセルに加え、また溶解した鉛のようにカプセルを真っ赤に焼いた。空は一面オレンジ色で、遠くには火山が噴火し、チリの雲の中では稲妻が明滅し、雲層では硫酸の雨が降っていた。

設計者たちはカプセルの作業時間を記録的な短時間（30分）と定め、さらに2分追加した。しかしカプセルはその4倍の一二七分間にわたって科学情報を送信したのち沈黙した。

こうして金星13号——もっと正確に言えば、その降下カプセルは飛行の最終段階を終わり、13号本体の方は宇宙はるかを飛びながら、金星表面から送られてくる情報を地球へ中継電送した。

一方、金星14号は一九八一年11月4日に打ち上げられ、その降下カプセルは一九八二年3月5日5時53分（モスクワ時間）金星大気圏に突入し、63分後にフェーベ地域の東方、南緯13度15分、経度三一〇度09分の地点に軟着陸した。さきの金星13号の降下カプセルの着陸点からの距離は一〇〇〇km。作動時間は13号カプセルの半分であった。

金星到達までの4ヵ月

ソ連の科学者は普通対で惑星間探査機を打ち上げている。こうすれば、もし二つのうちの一つに何かあっても、もう一つの方が任務を達成する。それにいつでも打ち上げができるわけではなく、地球に対する目標の惑星の位置が問題であり、打ち上げ時期は限られる。金星への〝窓〟が開くのは約1年半おきであり、こうした〝窓〟に突進した地球最初の使者が、惑星間自動ステーション金星1号であった。1号は一九六一年2月12日ユーリー・ガガーリンが飛行するちょうど2ヵ月前に打ち上げられ、金星から約一八万kmのところを通過した。

21年間に金星周辺の軌道を飛行した地球の探査機は19個で、うち14個がソ連のバイコヌール宇宙基地から打ち上げられた。こうして膨大な量の情報が入手され、〝地球の妹〟というこれまでの通念が完全に覆された。しかしこんどのソ連の二つのステーションは太陽系の地球に最も近い惑星の表面に到達した、最も複雑な宇宙ロボットであった。これらの宇宙ロボットは非常にこみ入ったプログラムを与えられていたが、見事にそれをやってのけた。

そもそも自動ステーションの仕事は、文字通り飛行第1日の、まだ惑星間軌道を飛んでいる時から始まった。ステーションの計器類はX線、惑星間プラズマ、太陽風と宇宙線の特性を測定した。それと同時にソ仏共同研究計画のわく内で銀河ガンマ線源の位置と特性の測定実験が行われた。さらにオーストリアで開発された磁力計による惑星間磁場の観測が行われた。4ヵ月間（普通金星への飛行はこれだけかかる——もっと飛行時間を短縮するとなると、余計に燃料がいるし、有効荷重を減らさねばならなくなる）ずっと科学のためのこういう活動が実施された。しかしその間降下カプセルは、作動の時に備えてじっと待機していた。

自動ステーションは金星到着の約10日前、2回目の最後の軌道修正をして、予定地区への降下を確保した。そして金星まであと数日という距離に近付くと、まずステーションの温度調節装置が作動し、降下カプセルをマイナス10度Cに冷やす。行く手に待っているのは灼熱の大気圏だから、電子装置はたちまちだめになる。そこで冷やして〝熱で死ぬ〟のを先へ延ばすわけである。その後、金星大気圏突入の2昼夜前に半tの降下カプセルはステーションから分離され、金星に突入する。カプセルはマユのような球状の耐熱膜に入っており、〝マユ〟は大気圏から過熱を受けるのを防ぐ。こうしてカプセルはこの段階で大きな隕石に似たものになる。そしてカプセルは隕石のように沈黙を守る。ステーションと無線交信が復活するのは、パラシュート降下のときである。

しかし2日経って勝利の朝が訪れる（金星13号の降下カプセルは3月1日のモスクワ時間5時55分、金星14号のそれは3月5日の5時53分）。金星の大きさと質量は地球とそっくりなので、両惑星にとって第2宇宙速度はほとんど同じである。秒速11・2kmで降下カプセルは、一九六六年3月1日早朝、金星に初めて到達し、金星にソ連国章を描いたペナントを届けた惑星間自動ステーションの場合と同じように、金星の大気圏に突入する。しかしこの16年前の金星3号のときは、金星の大気圏の情報は余り入手できなかった。金星の大気圏を発見したロシアの大学者ミハイル・ロモノーソフ（一七一一—一七六五）の時代から、事態はほとんど進んでおらず、金星の大気圏の主成分が窒素か、それとも炭酸ガスかさえ、専門家たちの論争のタネだった。そして多くの人は窒素が主成分だと見ていた。

一九六七年に直接金星の大気圏で初めて観測、測定を行った金星4号は、センセーショナルなニュースを地球に伝えた。つまり金星の大気の主成分は炭酸ガスが96—97%で、窒素は2—4%とわりに少なく、あとはいろいろなものがまざり合っていた。そして気圧も気温もとても高かった……。

数年が経ち、新しい自動探査機がさらに精密なデータをもたらした。一九七〇年に金星7号が初めて金星表面で測定を行い、その結果金星表面の気圧は90気圧（地球の海洋の深さ1kmの水圧と同じ）、気温は四七五度Cであることがわかった。いまわれわれは金星の大気の組成を正確に知っている。金星には炭酸ガスと窒素のほかに、少量の水蒸気、そして酸素、塩酸、フッ化水素酸、亜硫酸ガス、硫化水素、不活性ガス（アルゴン、ネオン、クリプトン、キセノン）の混和物などがある。

金星の大気圏の質量が地球の地殻に結合した形で存在している炭酸ガスの総質量に近いという事実も興味深い。かつて炭酸ガスは地球の地殻と相互に作用し合って、〝凝化し〟、炭酸を含む岩石層を作った。しかし金星では、おそらく太陽に近いためと初温が地球より高かったために、地球のようなことは起こらなかった。そして炭酸ガスは大気圏内に残り、宇宙に赤外線を放出せず、〝温床効果〟を起こしている。そのため金星はものすごく暑い。

さらにほんの少量の水蒸気は、いぜん解けないナゾである。地球上の水は金星より何千倍も多い。では水蒸気は金星の大気圏からどこへいったのか？きっと非常な高度で太陽紫外線の作用で分解し、そのあと水素が宇宙空間へ飛び去ったに違いない。しかし実際にどうかは、いまのところ誰にも分かっていない。

硫酸の雨をくぐって

いままた新しい地球の探査装置が、基本的にはすでに解明された灼熱の大気圏に突入して行く。大気は荒々しく抵抗する。カプセルの前面で圧縮された〝エア・クッション〟——すなわち衝撃波の温度は一万二〇〇〇度にも達する！これは太陽表面の2倍以上も高い温度である。過荷重が増し、二五〇単位に達する。カプセルの重量はいまや四〇〇〇tもある！だが学者たちは、過荷重さえ有効に利用することを知っていた。過荷重の数値は磁気テープに記録され、あとで地球に電送される。それを分析すれば、上層からの密度の変化が解明できるからだ。

降下カプセルは燃える隕石となって金星の大気の下層へと滑空する。ついでながら、ここでは1日は非常に長く、地球のそれの一一八倍かかる。金星はゆっくり回転するだけでなく、地球とは逆の方向に回っている。だから太陽は西から昇る。この結論もまた、以前の金星探査装置のデータにもとづいて、電波観測によって得られたものだ。かつて、水星は金星の衛星だった可能性がある。水星は金星の回転にブレーキ

をかけ、やがて遠のいて、独自の太陽周回軌道に移ったのだろう。
　降下カプセルは雲層の上面（金星の表面から65—70kmの高さ）に近づく。速度はすでに〝飛行機並み〟の秒速二五〇m（時速九〇〇km）に落ちている。パラシュート格納室の屋根が開いて、初めに小さな補助パラシュートが、つづいてもう少し大きな主パラシュートが飛び出す。パラシュートは降下速度を秒速一五〇mまで落とす。すると耐熱保護カバーの〝赤道〟に沿って走っていた環状の熱反応ワイヤーがはじけて、耐熱保護カバーが二つに割れ、上半分は主パラシュートとともに離れて行った。降下カプセルの上には制動パラシュートが開き、パラシュート格納室の円筒にらせん状に巻きつけられたアンテナが、金星の大気中から直接データを送信し始めた。電波は軌道飛行をつづけているステーションで中継され、ステーションの大型指向性アンテナで地球へ送られた。電波は4分後にはエウパトリア（クリミア）とウスリースク（ソ連極東）の巨大なパラボラアンテナで受信され、地上の通信線を使ってモスクワ近郊の管制センターへ送られた。
　金星の雲の層は、つい最近まではまったくの謎につつまれていたが、いまでは金星9号に始まる何回かの自動探査装置の通過によって、学者たちは多くの知識を持っている。金星の雲は地球の霧と同じ程度に光を通すが、何しろ厚さが厚い（約20km）ので、地球からは金星の表面を光学的に見ることはできない。雲はほぼ三つの層から成っていて、上層（高度58km以上）は1—3ミクロンの粒子が主体である。この層を構成している物質の屈折率は、硫酸と同じ80%。恐らく、この場合も硫酸だろう。
　雲層を先に通過したソ連の自動探査装置金星11号と金星12号は、塩素の存在を記録した。だから雲の中層と下層には硫化物だけでなく、塩化物——塩化水素もあるはずだ。この層の粒子はさらに大きく、10ミクロンほどである。
　ときおり硫酸の雨となって降るこ[illegible]驚くべき雲は、火山に由来するらしい。地球の火山もやはり大気中に同様の組成の化合物をまき散らしている（大気の上層に細かい硫酸の粒がわずかながら集まっているのが発見されたのはそれほど昔のことではない）。だが地球の場合、それは遅かれ早かれ海に溶けてしまう。金星には、周知のように海はないし、あり得ない。面白い内輪話を紹介すれば、15年まえ金星に軟着陸した金星4号には、アンテナのカバーを留める砂糖の錠が取りつけられていた。学者たちは金星の表面は水に覆われていると考えていたので、着陸すれば砂糖が溶けて、アンテナが露出すると計算したのだった……。
　雲を縫っての降下がつづく。カプセルに積まれた計器類は大気と雲の化学組成、同位体組成を調査し、散乱太陽光線のスペクトルを分析し、大気中の放電を記録した。金星で雷が発生することは、すでに知られている。低周波の放電は、火山から噴出されたチリと雲の中の稲妻だろう。稲妻は金星13号と14号が着陸する予定の地点（平原）の西方にあたるフェーベ地域（山地）でも観測されるだろう。ソ連の学者たちが作った放電測定器が、金星の大気に耳を傾けている……。
　そして聞き慣れた音。制動パラシュートが切り離されたのだ。
　制動パラシュートの切り離しは、雲層のすぐ下、高度47kmで行われた。降下速度はすでに急激に落ちており、あたりの気圧は増大している。パラシュートは不要になった。パラシュートをはずさないと、降下に時間がかかりすぎて、非常な高温のために、着陸するまでに計器類がだめになってしまう。重量七五〇kgの降下カプセルは、いまや空気力学的制動装置だけで降下している。カプセルの上部、パラシュート格納室の基底部に取りつけられた扁平な輪がそれだ。カプセルは傘をさしたような格好で、初めは少し速度を増したが、やがて減速しながら降下する。
　計器類は働きつづけている。
　この高度（40km以上）では猛烈な風が吹いている。風速は水平方向では毎秒一〇〇—一四〇mにも達する。幸いなことに、金星表面に近付くにつれて風は次第に弱まり、下方では秒速1mを超えない。これが反対だったら、着陸はおそらくむずかしくなるだろう。
　金星の風については、いまではかなりのことが知られている。たとえば、上層の大気が4昼夜（地球時間）で循環していることが明らかにされている。これは金星の自転と反対向きの強力な流れである。南極の上空につねに大規模な渦が巻いていることも明らかにされている。恐らく北極にも、同様な渦があるだろう。
　降下はつづく。あたりはかなり明るく、地球の中緯度帯の曇った日ぐらいだ。一九七二年に金星8号が軟着陸するまで、学者はだれ一人それを確信していなかった。雲が太陽の光を通さず、あたりは永遠の夜が支配しているのではないかと考えられていたのだ。幸いなことに、そうではなかった。
　降下速度は毎秒8m。大した速さではないと思われるかもしれないが、そう言えるのは宇宙的な規模でだけの話だ。秒速8m、すなわち時速約30kmでカプセルは金星の荒々しい表面にぶつかるのである。降下速度を遅くすることもできるが、そうすれば降下に時間がかかりすぎてしまう。いまや1秒たりとも惜しい。
　着陸のさい計器類を傷つけないために、カプセルの下部には輪形パンのような、薄壁構造の中空の緩衝装置が取りつけられている。金星の表面にぶつかると、この部分がへこんで、カプセルは地面に〝へばりつく〟。一九七五年に今回の着陸地点よりいくらか北のベータ地塊の東斜面に降下して、金星表面の最初のパノラマを送って来た金星9号と10号に始まる第2世代の降下装置はすべて、この方法で着陸している。

いよいよ着陸

　いよいよ待ちに待った瞬間が来た。衝撃とともに、降下カプセルの約1時間にわたる〝空〟の旅は終わった。着陸したのだ。ただちにプログラム装置の指令にしたがって、着陸地域の表面の調査が開始される。
　着陸するまでは、主として大気の調査に力が注がれた。一九八二年3月の時点でも、金星表面のことはまだほとんど何も分かっていなかった。そこには何があるのか？　金星8号、9号、10号が行った岩石の同位体元素——カリウム、ウラン、トリウムの含有量の測定。ベータ高地の東の縁で撮影された最初の何枚かのパノラマ。そしてレーダー測定にもとづく金星の地形図。金星表面の大部分は起伏のある平地で、地球の大陸に相当する山地の割合は、全表面の8％にすぎない。そのうちのいくつかは、地球の火山を想起させる。興味深いことに、まさにこの部分で放電による電磁パルスが記録されているのだ。火山の噴火のさいに発生する稲光りだろう。レーダーは、いくつかの山の頂きに円形のクレーターがあることを示している。一九七五年に電送されて来た最初のパノラマの一つには、最近の地殻活動の明らかな痕跡——山腹の堆石が見られた。
　これが恐らく、一九八二年3月の軟着陸以前に知られていた金星表面のすべてだった。金星13号の計器も電磁パルスをキャッチしたが、その振幅は一九七八年に観測されたものより大きかった。これは放電源が近いことを意味しているのだろう。だが金星13号と14号の降下カプセルには、それ以前のものとは比較にならない装置が積み込まれていた。着陸の直後、テレフォトメーターの観測窓を覆っていた耐熱カバーを吹き飛ばす熱反応爆薬の破裂音が聞こえた。そうでもしなければ、カバーははずれないだろう。何しろ、金星13号のカプセルの外は89気圧、四五七度C、金星14号のカプセルの外は94気圧、四六五度Cもあったのだから。金星表面の温度差は、1昼夜を通じても極めて小さい。カプセル外の気圧と温度の差は、金星13号の着陸地点の方が金星14号のそれより一五〇〇m高いということによって説明できる。

炎熱下での作業

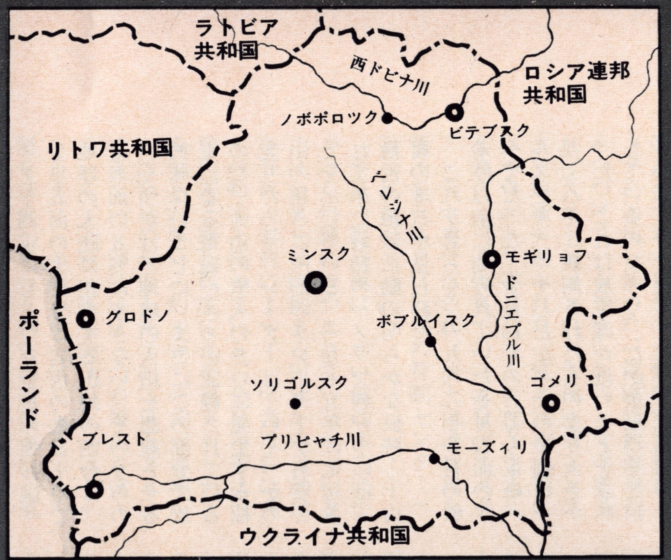
　テレフォトメーターが作動し始める。計器自体は保護コンテナ——特殊な塩がいっぱい詰まった容器の中に深く隠されている。塩が溶けるまで、ここでは常温が保たれる。潜望鏡のように、石英観測窓の方へ鏡だけがつき出ている——鏡は上下に首を振り（その幅は37度）、同時に鏡が固定されているパイプと一緒に回る。一瞬ごとにそれぞれの方向で照度が記録されるが、それはまるでパノラマの各地点の早取り写真のようである。前方一八〇度を全部記録するには14分かかる。着陸装置の設計上の活動寿命は32分だが、カラー映像を合成する——まさにそれが課題だった——には四つの同じパノラマ、しかし無色、赤、青、緑の四つのフィルターを通して連続撮影されたパノラマを入手しなければならない。この作業だけでも約1時間かかる。つまり機器の〝持久力〟がすべてを決定するのだ。
　同時に他の作業も遂行される。カプセルの外に突出した計器が、自然のままの土壌の物理・力学的特性を測定する。これは次のように行われる。ハンマーヘッドが土壌に食い込み、やがて回転する。しかしこんな作業でさえ、金星の極限的条件下ではきわめてむずかしい。平行して土壌の電導率が測定される。だがここの土壌は、わが国の探査機がこれまでに着陸した地点の土壌とは全く違う——モノクロのパノラマでさえ、細かいほこりや砂をかぶった岩石が見える。火山が噴火したのだろうか？
　一方、計器〝グロザー〟のセンサーは土壌のかすかな振動を記録しようとする。これは金星の地震活動を評価するために行われる。計器は非常に感度が良い。地球上の建物の10階に設置された計器は、1階を歩く人の歩行を記録したほどだ。
　しかし作業プログラムで重要な地位を占めているのは、全く新しい課題——金星の岩石の元素組成を明らかにするという課題である。このために土壌のサンプルを採取して、分析のためにカプセル内に取り込み、放射性同位体測定器にかけなければならない。操作は着陸して32秒後にはもう開始された。ボーリング装置の電動機にスイッチが入る。工具は降下装置のカプセルと緩衝器のリングとの間の透き間に下りていく。まず土壌に触れるのはドリルではなくて、中央に穴のある、歯のついた特殊な装置である。この装置はドリルが土壌の上で空回りすることのないようにするために必要なのだ（たとえば、金星13号の降下機器は8度傾斜して着陸した）。スプリングが装置をしっかりと土壌へ押し付け、ドリルが装置の穴の中へ下りる。ドリルは内部に刃を持つ中空のパイプである。原動機によって回転するこのドリルは深さ30mmの穴をあけ、2立方cmの土壌が採取された。今度は土壌を同位体測定器へ送らなければならないが、この装置は水銀柱40—55mm以下の気圧のもとで最も良く作動する。水銀柱二五〇mmの気圧下では、この方法はもう役に立たない。しかしドリルの中はほぼ一〇〇気圧である！　圧力を下げてサンプルを同位体測定器へ送るにはどうすればよいか？
　この複雑な操作のために〝掃除機の原理〟が用いられた。特殊な爆薬が爆発して、それまでわずか1気圧に保たれていた小さな容器の口をふさいでいた隔壁を破る。土壌は容器に〝吸い込まれる〟が、フィルターにかかって、特殊なトラップ＝アンプルに収容される。その後アンプルは降下カプセル内の10リットルの真空室に結合される。圧力が急激に下がって、土壌は分析器の前のシュートに注がれ、分析が始まる。
　サンプルは放射性同位元素——鉄55とプルトニウム二三八で照射される。これによって岩石の組成にかんする情報を持っている螢光X線が励起され、特殊な検波器によって記録される。検波器からの信号は電子装置で分析、記憶、コード化され、テレメーター回線を通して地球に送信される。中間的な分析によると、降下地域は、主に強いアルカリ性の岩石からなっている。そのような岩石は地球では地下80—90kmで層を成しているが、金星では表面にある。恐らくこれらの岩石は火山活動と実際に結びついているのだろう……。
　そうしているうちにカラー・フィルターを通してのパノラマ映像の送信が終わった。金星の上空はオレンジ色、土壌は異様な黄褐色で、ところどころ緑がかった色合いをおびている。これは金星の大気が青い光線を通さないからである。
　だがユニークな科学作業は終わりに近づいている。13号の降下カプセルは金星表面で一二七分間働いたが、14号の降下カプセルの作動時間は57分だった（降下地点の条件がさらに悪かったからだ）。分析に今後何ヵ月間も要するほどの膨大な量の情報が集められた。
　しかしすでに現在はっきりしているのは、一連の自動探査機による金星の調査は地球にかんする科学にとっても重要だということである。その結果は、地球の遠い過去に、地殻と大気の進化に新たな光を投げかけるだろう。

ベロルシア共和国特集

ベロルシアの5年後の輪郭

ベロルシア共和国最高会議幹部会議長
イワン・ポリヤコフ





ベロルシア共和国

ソ連の西部に古いスラブの土地――ベロルシアがある。面積は20万7600平方km、人口は970万人。

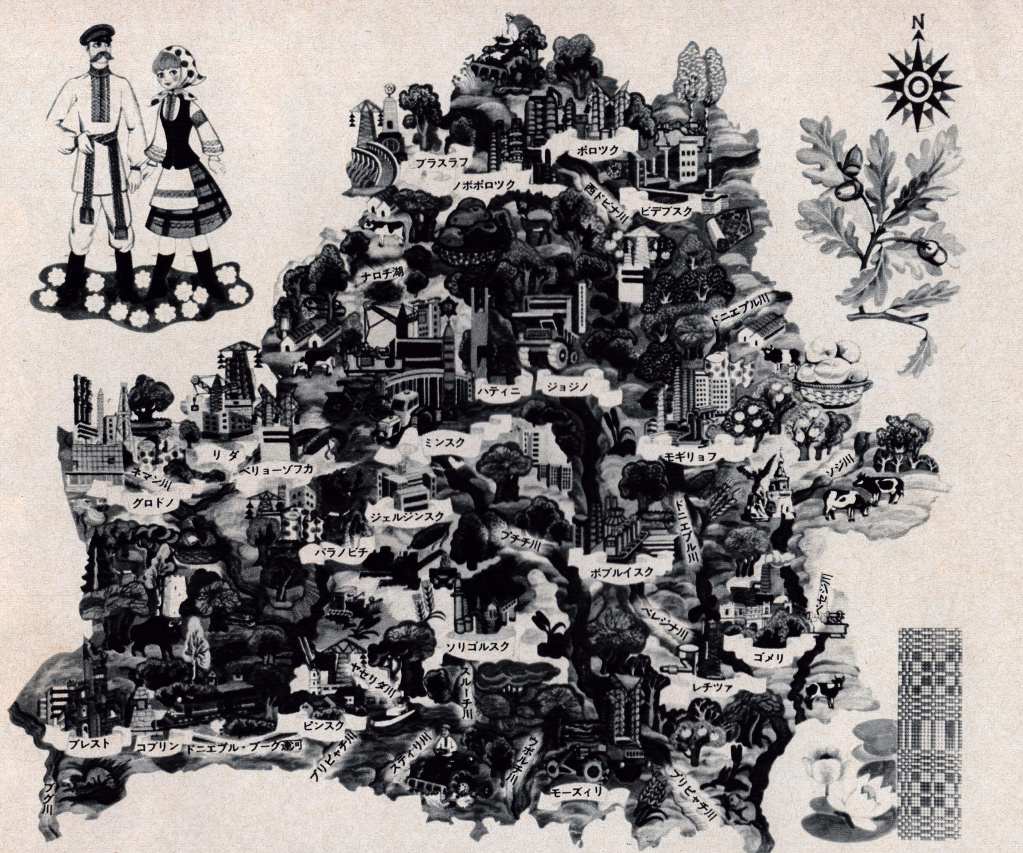
ベロルシアの自然は中部ロシアのそれに近く、平原、低い丘、森と湖があり、沼沢地が多い。沼沢地の例はいま積極的に開拓されているポレシエ地方である。この地方はベロルシア共和国の南のプリピャチ川ぞい450kmにわたって広がっている。

ソビエト政権成立以来今までにベロルシア共和国は、精神面ならびに科学技術、経済面で長足の進歩をとげた。ベロルシアの300の企業は、1000近い種類の製品を世界の98ヵ国に輸出しており、西独、英国、フランス、イタリア、日本などの先進諸国が取引相手である。

第2次世界大戦はベロルシア共和国に恐ろしい爪跡を残した。100万人余りのベロルシア人がソビエト軍の兵士として戦い、また44万人が敵の後方、パルチザン部隊や地下で戦った。戦争で勝利するために、200万人以上のベロルシア共和国の住民が命を犠牲にした。

ベロルシア人はふるさとの土地を復興した。首都ミンスクをはじめ、ドイツ・ファシスト軍が完全に廃虚にした他の町や村も、新しく建設された。国連の設立国の一つであるベロルシア共和国の代表の平和を守る熱烈な声は、国連で鳴り響いている。

本号ではベロルシアの生活のさまざまな面について紹介しよう。



一九八〇年末ベロルシア共和国の最高機関である最高会議の定例会期で、現行第11次5ヵ年計画（一九八一—八五年）中のベロルシアの経済・社会発展の計画が承認された。だからいまからでも、一九八〇年代中ごろのベロルシアの主な特徴はたやすくつかめる。

新5ヵ年計画中にベロルシア工業の伝統産業である電機、電子、計装、機械、工作機械、化学、石油化学の各工業はさらに急ピッチの発展を遂げよう。「ベロルシアはソ連全体に、ソ連全体はベロルシアに」という経済的結びつきの効率を最大限に引き上げるために、ベロルシアの経済構造と生産力配置の改善は、今後も続けられよう。

ベロルシアの工業生産高全体は5年間に26—29％増えることになっているが、第2次世界大戦による人口減を考慮すれば、これは最大の伸び率と言えよう。何分大戦中にベロルシアが失った人命は、人口の1/4に当たる二二三万人にものぼっており、この先5年間の労働資源の伸びはぐんと落ちる。

いまわれわれは何十という大工業企業（例えばジョジノの重鍛造工場、モロデチノの金属粉末製品工場）を新設し、また操業中の企業を改装して生産能力を拡大している。当然追加の労働者要員が必要になるわけだが、その解決策は一つ、集約化の要因をもっとよく、フルに生かすことである。つまり生産設備を更新し、生産の機械化と自動化のレベルを引き上げ、進歩的な製造・加工法を大々的に導入することである。

第11次5ヵ年計画では労働生産性の向上が、わがベロルシア共和国経済の中心課題であり、ベロルシアの工業の労働生産性は22％、農業のそれは25％上昇する。

ロボットの工業への導入はますます進む。たとえばミンスクのプラスチック工場では、マニピュレータが全工程をやってのけている。機械工業では運搬ロボットや溶接ロボットが広く使われている。ベロルシアのトラクターと自動車は広く海外に輸出されている。いまたとえば、最新型の一五〇馬力のトラクターが生産されており、一八〇tダンプトラックや積載量の大きな新型トレーラー付きトラックが試験中である。

ベロルシアの農業は新しく前進する。農業集約化の問題のうちで最も重要な問題は、おそらく土地の肥沃度の向上であろう。ここ15年間に学者や農業技師の努力のおかげで、土地の肥沃度はほぼ倍増した。

われわれは穀物の1ha当たりの平均収量を2・6t以上に引き上げ、穀物の年平均収穫量を七八〇万—八一〇万tにするつもりである。若干の欧州諸国に比べるとこの数字は大して大きくない。しかしベロルシアの土地の大半が沼沢地であり、その上ベロルシアが農業のリスク地帯にあることを考慮する必要がある。

食料問題の解決に大きく貢献しているのは、畜産関係者である。肉の年平均生産高（屠殺重量）は約一〇〇万tに、牛乳は六五〇万—六七〇万tに達するだろう。

ここで述べたのは、主にベロルシアの第11次5ヵ年計画の経済面にすぎない。このほかにわれわれの計画は、ベロルシアの社会、文化生活の発展や全住民層の要求も考慮に入れている。

よみがえった共和国

ベロルシア担当本誌記者
ユーリー・サポジコフ

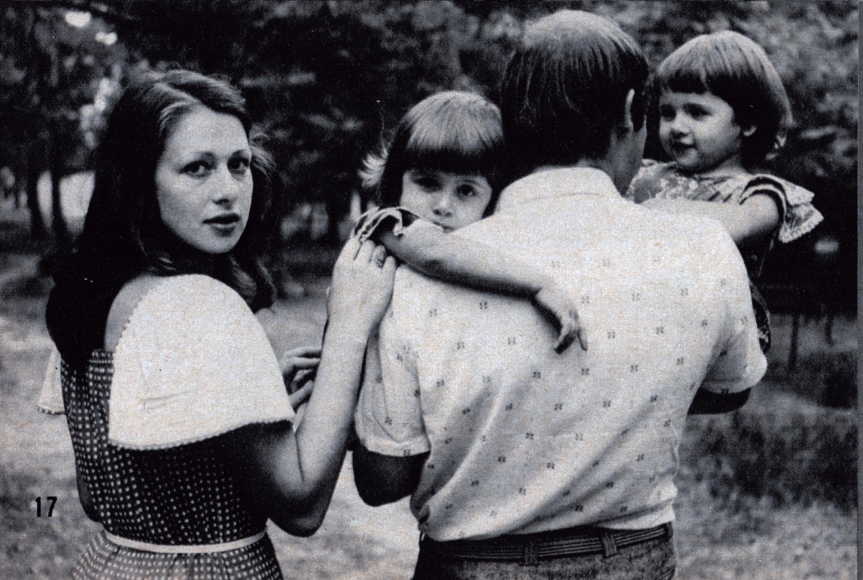




1944年7月3日、ファシスト占領軍から解放された日のミンスク市中心部

▲首都ミンスクの勝利広場

◀静かな公園を散策する一家



歴史的な事情により、ベロルシアは幾世紀ものあいだ国家としての体制を持たず、帝政ロシアの原料生産地程度にしか考えられていなかった。63年前、ロシアで社会主義革命が起きてから1年以上経って、ベロルシア人民は初めて共和国としての独立と地位をかちとった。一九一九年1月1日がこの共和国の誕生日である。

しかしベロルシアは2度生まれた国と呼ばれている。2回目の誕生日は一九四四年7月3日で、一一一〇日のあいだ占領していたドイツ・ファシスト侵略者から共和国を解放した日である。3年間に占領軍は二〇九の都市と地区中心地を廃虚と化し、九二〇〇の農村を焼き払い、約三〇〇万人を家無しにした。一万の工業企業、90％以上の工作機械、生産設備が破壊された。ベロルシアの経済は革命前の一九一三年の水準に逆戻りさせられた。もう一つの恐るべき損失は、何をもってしても測ることができない。ソビエト国民とファシズムの戦争中に共和国の住民のほぼ4人に1人が死んだのだ。

戦後間もなく、戦争で荒廃し、焼き払われたベロルシアの地を訪れた外国人たちは、ドイツ・ファシスト軍が破壊したものすべてを回復するには、少なくとも一〇〇年はかかるだろうと語った。その時から37年経った。現在の共和国の工業は、一九四〇年にはまる1年間かかって生産されたのと同じ量の生産物をわずか10日間で生産しているのだ！

製品の質の良さについては、共和国の約三〇〇の企業が約一〇〇〇種の製品を世界の約一〇〇ヵ国に輸出しているという事実が証明している。住民一人当たりの生産高では、ベロルシアはフランス、英国、西独といった国々に肉迫している。

この20年間、工業生産高は7年ごとに倍増している。第10次5ヵ年計画（一九七六―八〇年）は文字通り躍進の期間だった。一九八〇年の工業生産高は一九七五年の水準を42％上回ったのである。このような成功の原因はどこにあるのか？





右上　アナスタシア・クプリヤノワとその息子たちの記念碑。5人の息子をすべて戦争で失った母親の悲劇をテーマにしたこの記念碑は彼らの郷里のジョジノ市にある。健在の母親（写真の婦人）は息子たちに会うため、しばしばここを訪れる。

右下　ミンスク市の勝利広場で永遠の火へ献花する人々



◀ブレスト英雄要塞の記念碑に花を捧げる少年。祖父はここで戦死した。



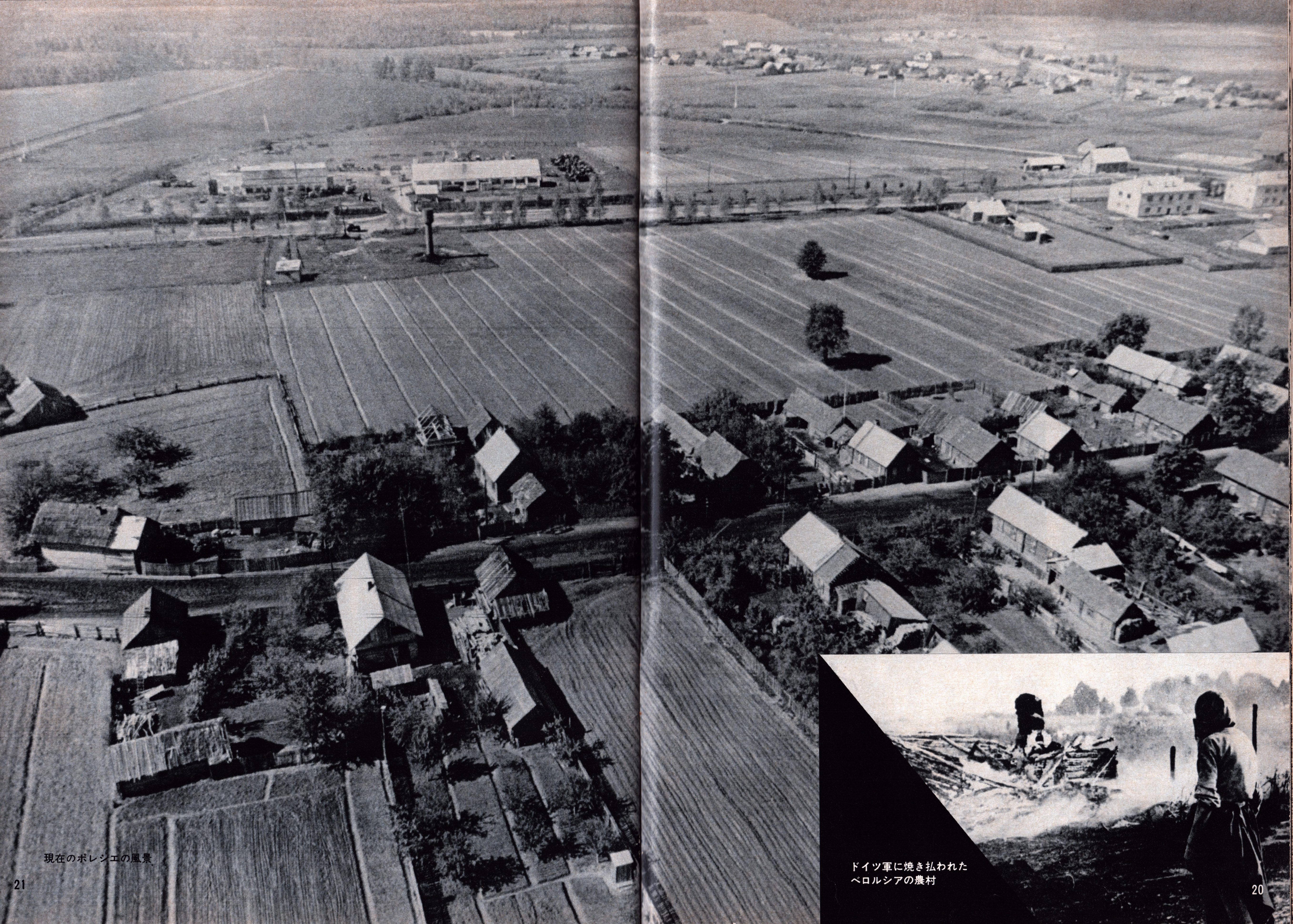
大祖国戦争（1941―45）中の写真。ベルロシアの森林地帯で行動するソ連のパルチザン。



大祖国戦争中の写真。線路上の戦闘。

友人たちに助けられて

一九二〇年代の初め、第1次世界大戦と国内戦によってめちゃめちゃに破壊されたベロルシアが国民経済の復興に取りかかった時、ロシアと他のソビエト諸民族が援助の手を差し伸べた（ソ連はまだなかった。ソ連が結成されたのは一九二二年12月）。一九二〇年12月、ロシア連邦共和国政府はベロルシアに一〇億ルーブルのクレジットを提供し、順番を無視してすべての必要物資をベロルシアに送るよう命じた。一九二一年、同政府はベロルシアの工業用の設備と原料に六〇〇万ルーブル支出した。ロシア科学アカデミー、モスクワ大学、ロシア連邦共和国教育人民委員部は、



現在のポレシエの風景

ドイツ軍に焼き払われた
ベロルシアの農村

ベロルシア共和国最初の大学をミンスクに設置するのを助けるため、一六〇〇万ルーブル以上を乏しい基金から支出した。

専門家たちもロシアからベロルシアへ赴いた。彼らの助けを借りて、のちにベロルシア農業アカデミーに改革された農業大学が復活され、ベロルシア科学アカデミーの前身となったベロルシア文化大学が設立された。モスクワ、ペトログラード（現在のレニングラード）、ハリコフの各大学は実験設備、学術文献を無償で送ってくれた……。

一九二二年12月、ベロルシアは自由意思で他のソビエト諸共和国とともに連邦国家――ソ連に加盟した。この措置は、民族のこれまでの歴史的発展から見れば当然の結果であり、民族の利益に完全に応えるものだった。連邦国家の単一国民経済機構の有機的な一部分として発展することになったベロルシアは、その後20年足らずの間にソ連の工業先進共和国の一つになったのである。

戦争とドイツの占領は共和国に膨大な損害をもたらした。ベロルシアはファシスト軍に激しく、身を挺して抵抗した。占領軍の背後のベロルシアの領土では三七万人の戦士からなる二一三のパルチザン旅団、二五八〇の独立部隊が行動していた。さらに七万人が地下で抗戦していた。一九四三年末までにパルチザンたちはベロルシアの全領土の60％をその支配下に置いた。数千の住民地点がパルチザンによって完全に占領軍から解放された。戦争中にベロルシアのパルチザンと地下活動家たちは五〇万人以上のドイツ軍兵士・将校を死傷させ、一万八〇〇〇台以上の自動車、三〇五機の飛行機、一三五五台の戦車と装甲車を破壊し、一万一一二八両の軍用列車車両、34本の装甲列車を転覆させ、敵の守備隊約一〇〇〇を壊滅させた。

戦争でどの共和国よりも大きな被害を受けたベロルシアに対して、全ソ連が援助の手を差し伸べた。ベロルシア解放後すぐに、ソ連の予算から共和国の復興のために約二〇億ルーブルが支出された。ロシア連邦共和国、ウクライナ、グルジア、カザフ、アゼルバイジャン、その他のソ連の諸共和国からベロルシアへ向けて工場設備、トラクター、コンバイン、金属、建設資材、家畜、種子を積んだ輸送列車が出発した。ベロルシアの国民経済発展のために、戦後最初の5ヵ年計画では、戦前のすべての5ヵ年計画を一緒にした額よりも多くの資金が支出された。

歴史は繰り返されたかのようだった。ソ連全国が最も困窮している共和国を援助したのだ。その結果は世界を驚嘆させた。早くも一九五〇年に共和国は戦前の工業生産高を上回ったのである。

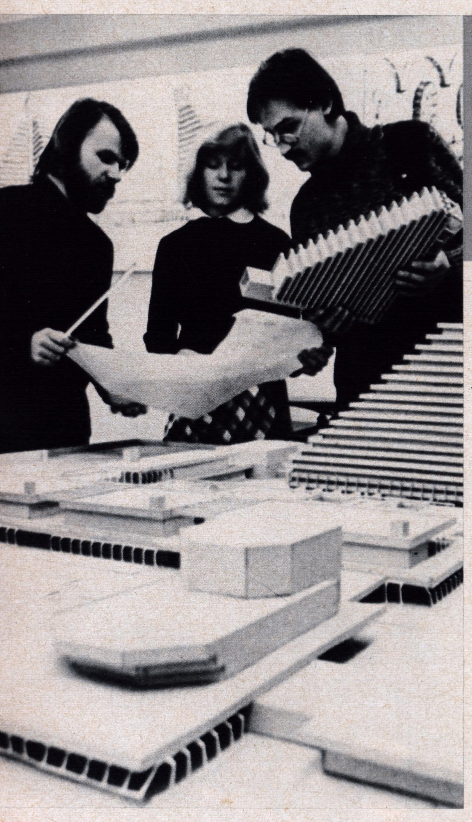
次の課題になったのは、ベロルシアをなるべく速くソ連の先進的な共和国の一つにできるような工業部門を地元に育てることだった。やがてベロルシ

右上　ベロルシア科学アカデミー技術サイバネティクス研究所で開発された産業ロボット。ボール盤とフライス盤を操作する装置の一部になる。

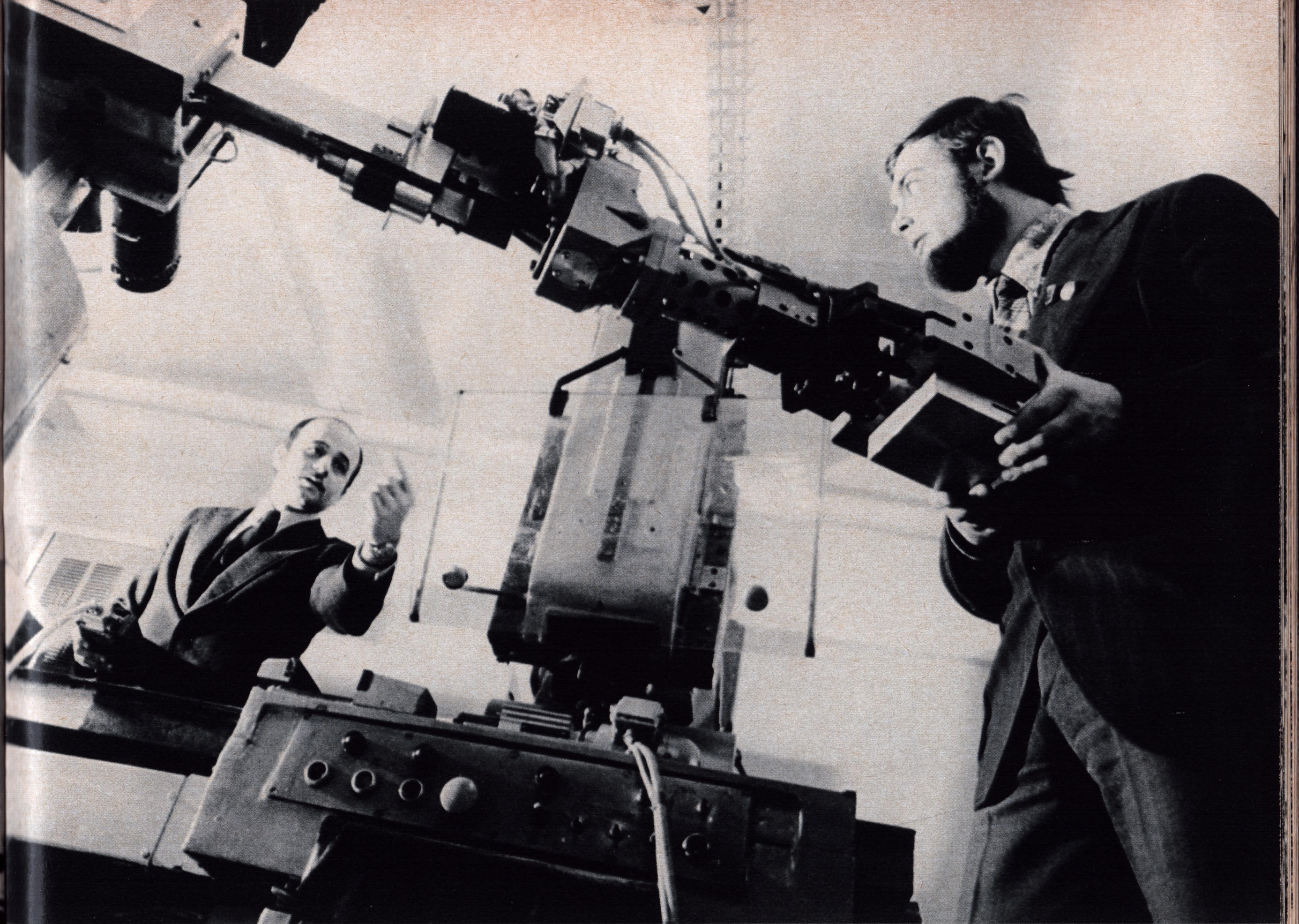
右下　コルホーズ〝ラススベト〟（夜明け）で行われた結婚式

◀ミンスクの都市計画と取り組む若手建築家たち

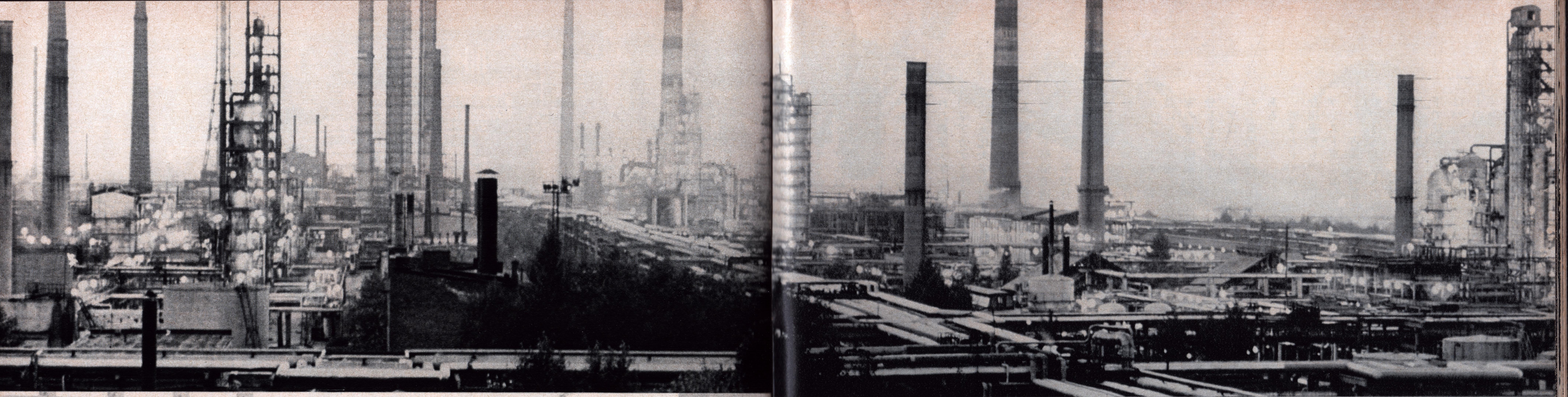
▼ソリゴルスク市の生産合同〝ベラルシカリウム〟では50人以上の鉱員たちが個人の5ヵ年計画の課題を期限前に完遂し、社会主義競争の優勝者になった。













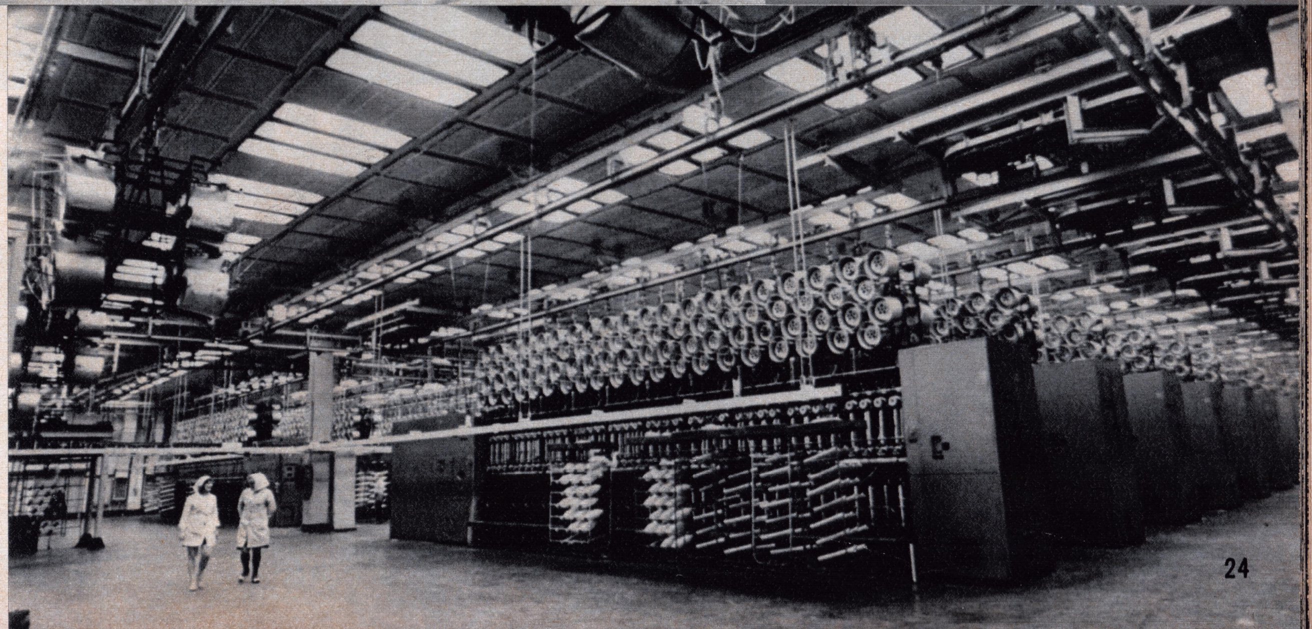


▲ノボポロツク製油コンビナート

◀ミンスク・テレビ工場の優秀配線工の一人エレーナ・メジェビチ

左下　カリ塩鉱山のまちソリゴルスクの団地

▼モギリョフ市のレーニン記念化学繊維生産合同〝ヒムボロクノ〟の第１撚糸・練条工場



アでトラクター、モーター、軸受の生産が開始された。

一九三九年にようやくベロルシア共和国と再統合したベロルシア西部地域の発展には特に注意が払われた。ここには現地の条件に最も適した機械工業、電気工業、化学工業が新しく組織された。再びソ連の他の共和国の自動車工業、トラクター製造部門、石油化学工業、鉱山業の関係者たちが貴重な援助をしてくれた……

カリ肥料とトラクター

ベロルシアの約六〇〇の大企業は95の都市に集中している。その中にはベロルシアの新しい工業部門の発展に伴って成長した若い都市も少なくない。生まれてから23年になるソリゴルスク市もその一つだ。

一九四〇年代の末、ベロルシアで巨大なカリ塩鉱床が発見されたというセンセーショナルなニュースが世界を駆けめぐった。このスタロビン鉱床の埋蔵量は八〇〇億tを上回り、米国、フランス、英国のカリ塩埋蔵量の合計よりもはるかに多かったのだ。ソ連中の二〇〇以上の企業がスタロビン鉱山の開発を支援した。この鉱山とともに生まれたまち——ソリゴルスク市ではソ連産カリ肥料のほぼ半分を供給する生産合同〝ベラルシカリウム〟が操業している。

しかし肥料だけでは足りない。厳しいソ連の自然条件の下で稼働できる沢山の農業機械が必要だ。というわけでソ連製トラクターの5台に1台はミンスク・トラクター工場製だ。欧州には、さまざまな型のトラクターの生産が1個所に集中されているような企業はここ以外にない。しかも、1年間に九万台も生産しているのだ。工場が操業を開始してからまだ30年にしかならないが、より完全なトラクターの開発をめざしてすでに50の型のトラクターが次々と製造された。そのうちの一つ——50馬力の万能耕運トラクター〝ベラルーシ〟は特に好評だ。このMTZ50型トラクターはさまざまな国際展示会で金メダル3個、銀メダル1個を獲得した。ミンスク製トラクターのすぐれた性能は、70ヵ国以上で販路を開拓している。

最近、このトラクターのライバルとして、同じ工場で開発されたMTZ一四二型が登場した。一五〇馬力で比較的軽量（7t）のこのトラクターは、現在世界市場で大きなシェアを持つ外国製の同じ馬力のトラクター——〝ジョン・ディア四六三〇〟、〝ルノー一四五一〟、〝ケイス一三七〇〟に比べると、重量では約2/3にすぎない。MTZ一四二のエネルギー装備率、つまり重量1t当たりの馬力が大きいことが、何よりもミンスク製トラクターの技術水準の高さを証明している。



▶ベロルシアの民族楽器（写真の人たちはジノビチ記念ベロルシア共和国民族楽器オーケストラのメンバー）



▲ミンスク市の新しい区の一つ——ウォストーク一号区



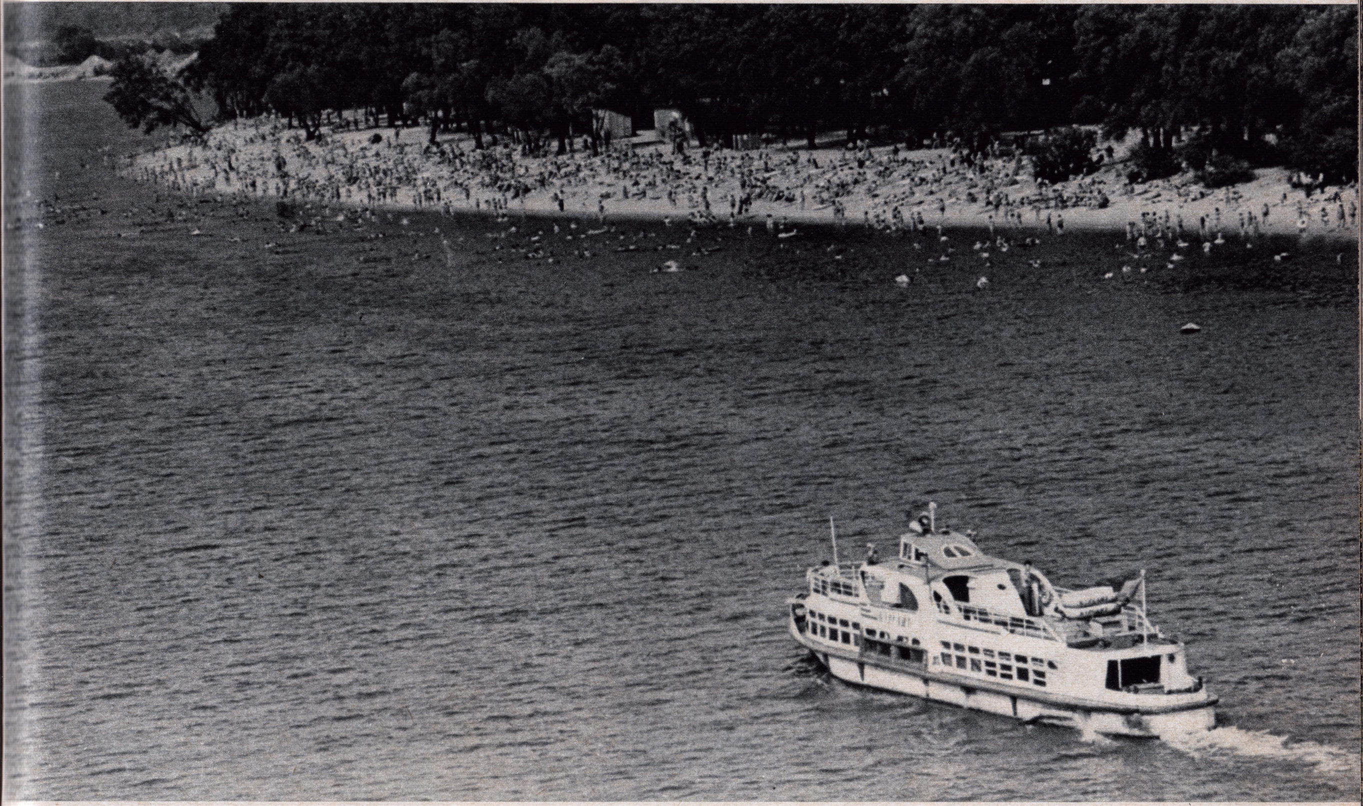
◀ミンスク市にあるグリンカ記念音楽学校

農村の変貌

ベロルシアの農民は昔から重労働を強いられてきた。共和国の土地はやせていて、おまけに1/3は沼沢地だからだ。ソビエト政権は農民の労働の性格そのものを次第に変えていった。農業を振興するための投資は年ごとに増えた。機械装備率が高まり、コルホーズとソフホーズのエネルギー充足度が増大した。これによって、個々の重労働の機械化から総合的機械化の導入へ移ることが可能になった。いまベロルシアの農業では働き手一人当たりの各種機械の出力は20馬力以上である。戦前に比べて農業総生産高は2倍に、ha当たり穀物収穫量は4倍になった。

同じ専門のコルホーズとソフホーズ(全部で二七〇〇)は資金を統合し、共同出資の企業(合同)を設立している(出資比率は参加している経営によって異なる)。それぞれの経営は以前と同様、組織上、財政上、法律上の独立を維持しながら、合同が取り組む課題の一部分だけを遂行する。このような協業形態により、重要な生産問題の解決に力を入れることができるようになる。この協業はまた、農工業統合のための前提となっている。共和国ではすでにジャガイモ、野菜、果実、亜麻、その他の製品を加工する数十のソフホーズ＝工場が操業している。

農村の工業化は農村の労働者職種の構成に変化をもたらした。建設関係の



職種が、穀物栽培要員や機械取扱要員とならんで、農村では特に重要な職業となっている。大きな村には文化会館、競技場、生活サービス施設が現れた。

たとえば、ブレスト州のコルホーズ〝ソビエツカヤ・ベロルシコ〟の中央居住区は、将来のベロルシア農村の良いモデルになろう。森林と畑の間に都会風の設備の完備したコッテージ、文化センター、スポーツ施設があり、道路はアスファルト舗装がしてある。

ウラジーミル・ベドゥーリャ同コルホーズ議長は語る。「われわれのコルホーズは経営内容が良好なので、いいものを沢山建設することができる。穀物、ビート、ジャガイモ、牛乳と肉を国に売って、われわれは毎年約五〇〇万ルーブルの収入を得ているが、そのうちの約二〇〇万ルーブルが純益だ。コルホーズ員たちの労働報酬は月平均二二〇ルーブル。そのほか各家族には住宅付属農地がある。しかしよく言われるように、人間はパンのみで生きるのではない。文化会館は一五〇万ルーブルかけて建設された。商業センター、児童音楽学校、レストランもある。さらに、三つの陸上競技施設から成る総合体育施設と農民生活博物館を建設する予定だ。この博物館は歴史の生きた説明になり、ソビエト政権時代になってからベロルシアの農民と共和国全体がどんな道を歩んだかを物語ってくれよう」



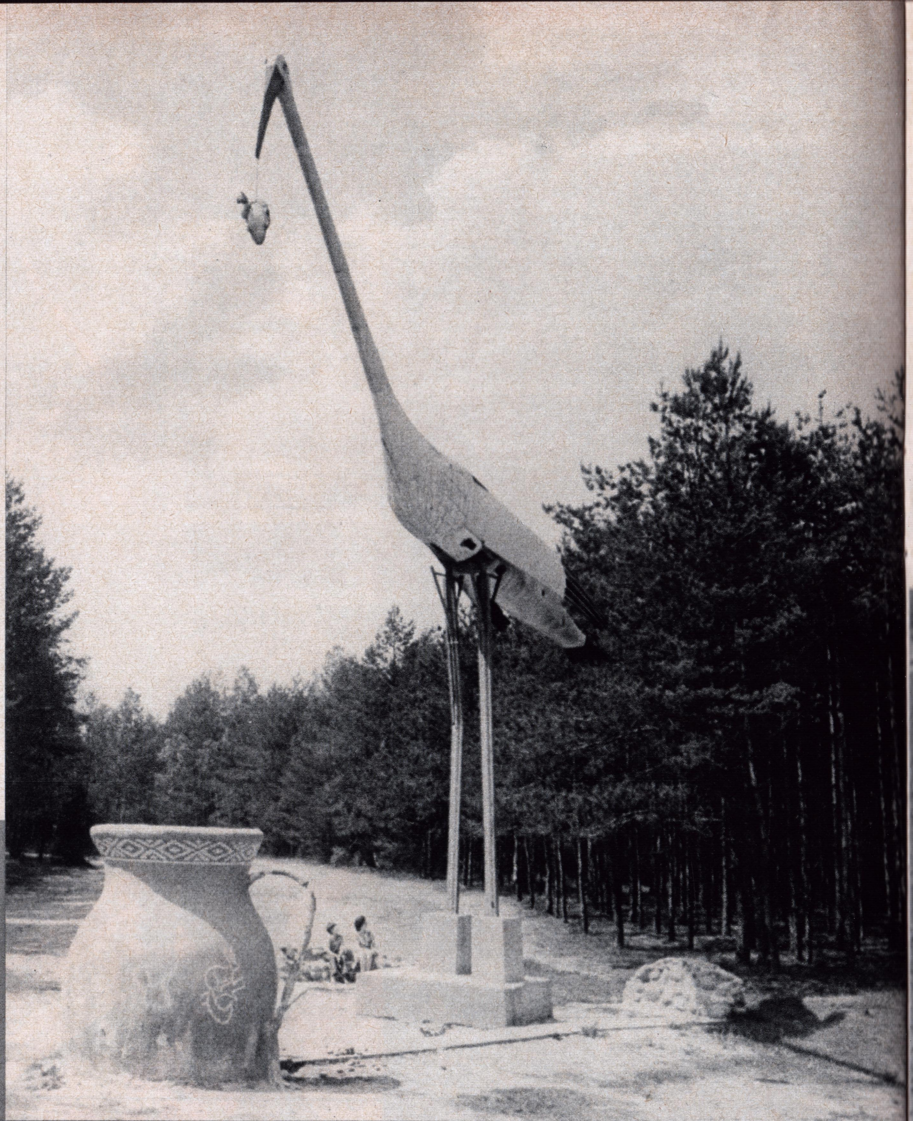
▲ノボポロツク市のモロジョージナヤ通り



▼麦わら細工はベロルシアの伝統工芸

▶ゴメリ市のソジ川

▲巨大なツルの模型はポレシエ地方のシンボル。ルジャヌイ＝ブルジャヌイ間自動車道路のそばに立っている。



文化と芸術の記念日





上段右の小型シートはスペインの大画家ピカソの生誕100年を記念して発行された。ピカソは平和運動にも積極的に参加し、世界平和評議会の会員で、国際レーニン平和賞の受賞者でもあった。シートには平和のシンボルとなったピカソの白いハト（1949年作、石版画）と「生誕100周年」の文字、切手にはピカソの肖像と「パブロ・ピカソ 1881—1973」の文字がある。額面は50K（コペイカ）。図案A・スミルノフ。オフセット印刷、目打12×12.5。シートには通し番号が打たれている。

上段左の4K切手はソ連の彫刻家セルゲイ・メルクロフの生誕100年を記念したもの。メルクロフはドイツとフランスで学び、オーギュスト・ロダンの強い影響を受けた。メルクロフはレーニン、トルストイ、ドストエフスキーなどの優れた彫刻で知られ、特にレーニン、マヤコフスキーなどのデスマスクは歴史的な価値を持っている。切手には金の縁取りの中にメルクロフの肖像が描かれ、「ソ連の彫刻家 S・D・メルクロフ 1881—1952」の文字が入っている。図案A・コティリョフ。グラビアと金属版による印刷。目打11.5。





下段の封筒はタジク共和国の作家・詩人ミルゾ・トゥルスン＝ザデの生誕70年を記念して発行されたもの。トゥルスン＝ザデは社会主義労働英雄、レーニン賞とソ連国家賞の受賞者で、世界平和評議会幹部会員、ソ連アジア・アフリカ連帯委員会議長でもあった。封筒の切手の部分には開かれた本とリボンが描かれ、本の右ページには社会主義労働英雄に授与される金メダル『鎌とハンマー』、左ページには「生誕70周年」の文字、リボンには「タジキスタンの人民詩人ミルゾ・トゥルスン＝ザデ」の文字がある。封筒の左部分には肖像と、ロシア語とタジク語で書かれた詩人の名前と生没年がある。額面は4K。図案I・コズロフ。封筒には記念スタンプが押されている。

中段の封筒はモスクワの有名な中央人形劇場の創立50周年を記念したもの。切手の部分には劇場の人気〝俳優〟たちを背景に指人形をシンボライズした50周年のマークが描かれ、封筒の左部分には劇場の正面にある人形が飛び出す時計が描かれている。図案M・グリンベルグ。やはり記念スタンプが押されている。



5月9日、戦勝記念日のブレスト・メモリアルセンター

剛勇と友好のシンボル

西部国境のまちブレスト

ナタリア・ブルディク　カメラ　E・コクティシ他

ソ連人にとってベロルシアの都市ブレストは、剛勇のシンボルである。毎日何千という人々が、ブレスト要塞を訪ねるために、このまちに来る。一九四一年6月、この要塞にたてこもった少数の守備隊は、ソ連を不法攻撃したドイツ・ファシスト軍部隊に激しく抵抗し、前進を阻止した。

ソ連・ポーランド国境の西ブーグ川右岸のこのまちは、古くから欧州に通じる"門"と言われてきており、いまでも約1時間ごとに国際旅客列車が通っているし、この輸送路を通って貨物がポーランド、チェコスロバキア、ドイツ民主共和国、多くの西欧諸国に輸出され、また逆に外国からの商品が輸入されている。

ブレストは一〇〇〇年近く重要な通商路の中心にあって、栄えてきた。

ブレストは街路の数が三一二、人口は一九万四〇〇〇人。現在の規模から見ると、そう大きくない州の中心地であるが、ほかでは見られないこのまち独特の魅力がある……

広い大通りぞいに高層アパートや官庁が並んでいる。それに続く静かな狭い小路には、2—3階建てのアパートや多くの小さい商店や出店、キヅタがぎっしりからんだ正立方体のコッテージ群が並び、50年ばかり前に敷石で舗装された歩道が美しい幾何学模様を描いている。この模様は、灰色一色のアスファルトを見てきた目にとくに心地よい。

ブレストは温暖なまちである。ベロルシアの他の地区よりも2週間ばかり春の訪れが早く、秋と冬の来るのが遅い。だから緑と花が、このまちを訪れた人々の印象に強く残るのも当然だ。ましてやブレストの通りにはドロヤナギ、クリ、シダレヤナギ、シラカバ、クワが多いからなおさらだ。ここの公園の総面積は四一五ha近い。

しかしおそらくこのまちの主な特徴は、多くの訪問客が感じる暖かいもてなしぶりと親切であろう。ブレスト経由でソ連に入国する大半の外国観光客にとって、ブレストはソ連の最初の都市なので、市民は観光客にできるだけ心をくばっている。

客を厚くもてなす市民の姿勢の根元は、一〇〇〇年も昔にさかのぼって求めなければならない。そもそもブレストが誕生したのは、貿易のおかげである。一〇〇〇年前ムハベツ川が西ブーグ川に注ぐ土地に、今のブレストの始まりといえる部落がつくられた。この土地は、東欧諸国とキエフ・ルーシ、沿黒海地方、近東諸国を結ぶ通商路の交差点に当たっており、ロシアの商人はブレストを経て、ポーランドや欧州の他の国々に蠟、蜜、毛皮、木製品を運び、また逆に装飾品と織物をロシアに持ち込んだ。



◀ブレスト市の商業センター



▼弾痕が今も生々しいブレスト要塞の中央門



現在のブレストはソ連の貿易の重要な輸送中心地であり、ここには鉄道と自動車道路が集中し、河港と空港があり、ボルガ川流域地方やベロルシアの石油を欧州の社会主義諸国に運ぶ送油管「ドルージバ」（友好）がこのまちを通っている。

しかし何と言っても、最大量の貨物を運んでいるのは鉄道である。モスクワ＝ブレスト線は、ソ連とポーランド、ドイツ民主共和国、その他の国々とを結ぶ最短路線であり、ベルリン、ワルシャワ、パリ行きの直通列車が往来している。ソ連や外国向けの貨物を積んだ貨物列車の通行本数は多い。たとえばブレストを経てドイツ民主共和国へ鋼板、船用計器、造船用設備、パルプ原料、綿花、テレビ、冷蔵庫、腕時計、自動車が運ばれ、逆にドイツ民主共和国からは各種工場用設備、油田・ガス田開発用機械、天井クレーン、自走クレーン、消費品が運ばれている。

いまソ連からブレスト経由でポーランドへ運ばれる貨物は、とくに多い。各種の原料や商品は、ふつう予定納期よりも早く、契約や協定以上に多く納入されている。ソ連は危機を脱出しようとしている兄弟国ポーランドに緊急の援助措置をとっており、毎日石炭や金属を積んだ追加の貨車が、ソ連からポーランドに送られている。ブレストの鉄道員たちは、分刻みの運行ダイヤのもとで、ポーランド向けの貨物、とくにポーランド政府が要請している食料品の輸送をスピードアップするために、ブレスト駅の受け入れ能力を増やした。ポーランドのゼノン・コメンデル商業・サービス相は「一九八一年12月にわれわれは、ソ連から計画量以上の食肉が供給されたおかげで助かった」と強調した……。



▶ブレストのメモリアル・センター構内で開かれたドイツの対ソ攻撃40周年記念集会に出席したかつてのブレスト要塞守備隊員の一人オレグ・クリゴロビチ（中央）

◀一九八一年6月22日のソ独戦開戦40周年にブレスト・メモリアル・センターの永遠の火に献花する世界各国の大戦参加者たち

西欧の観光客を乗せたバスやソ連のトレーラー付きトラックが往来する最重要高速道路の一つも、ブレストを通っている。国際貨物輸送の機動化を促進するために、数年前ブレストに自動車輸送・出荷コンビナートが設けられ、いまブレストの運転手自身が欧州社会主義諸国や西独に貨物の一部を運んでいる。

国境のまちブレストでは"友好"という言葉がとてもポピュラーである。

ソ連と西欧の鉄道連絡地点ブーグ門



ここには外国観光客がまちに入るときに渡る友好の橋があり、郊外のソフホーズ（ここにはポーランドの育種家たちから贈られたりんごの木がある）には〝友好〟という名の果樹園がある。

党ブレスト市委員会のアンドレイ・ルディチ書記は「ブレストが国際通商路の交差点であるだけでなく、さらに観光コースの交差点でもあるのは、われわれの誇りである」と胸を張る。「たとえば一九八〇年にブレストを訪れた外国人客は三五万人以上にのぼった。だからブレストに着いたときから居心地がよいと思ってもらえるよう全力を尽くし、ソ連やソビエト人をもっとよく知ってもらうようにしている」

モスクワ＝ブレスト高速道路はブレスト市内に入ると、モスクワ通りになる。「ブレスト英雄要塞」メモリアル・センターに通じる矢のように真っすぐな通りを通らない客は、おそらくいないだろう。このセンターはヒトラー侵略者の攻撃を真っ先に受けたソ連の少数守備隊を記念するために建てられたものである。

……一九四一年6月22日未明、ドイツ・ファシスト軍は宣戦布告もなくソ連領に侵入してきた。砲火と爆撃でブレスト全市が燃え上がった。最初の混乱から立ち直った部隊は、必死に抵抗したが、敵は圧倒的に優勢で、正午ごろ敵はまちを占領し、要塞をぎっしり包囲した。

ブレスト要塞の守備隊は戦い続けた。川に通じる道を塞がれ、一口の水を運ぶのに多くの犠牲者を出し、水もなく、ほとんど食もなく、薬品もなく、ソビエト軍の主力の位置もわからず、将兵は28日のあいだ敵の攻撃を撃退し続けた。敵の兵力は守備隊の10倍にのぼった。

ソ連軍将兵の敢闘精神には敵さえ驚いた。ドイツ第4軍の元参謀長ブリューメントリト将軍は回想録の中で「度重なる爆撃や大口径砲の砲撃にもかかわらず、最後の一兵になるまで、守備隊将兵は守った。こうしてわれわれはロシア式の戦闘が、どんなものかを知った」と書いている。

守備隊員がほとんど全員戦死してはじめて、ドイツ軍はブレスト要塞を占領した……

元の要塞跡の、手がつけられないままに残っている廃虚の間にメモリアル・センターが建てられた。博物館には、要塞守備隊員の写真、証明書類や兵器、煙で黒ずんだ古い壁の石や煉瓦が集められている。その幾つかには、銃剣の先で引っかいたでこぼこの次のような文字が残っている。

「死んでも降伏しない。さよなら祖国……」、「味方はいま5人……」、「死んでも後退しない……」

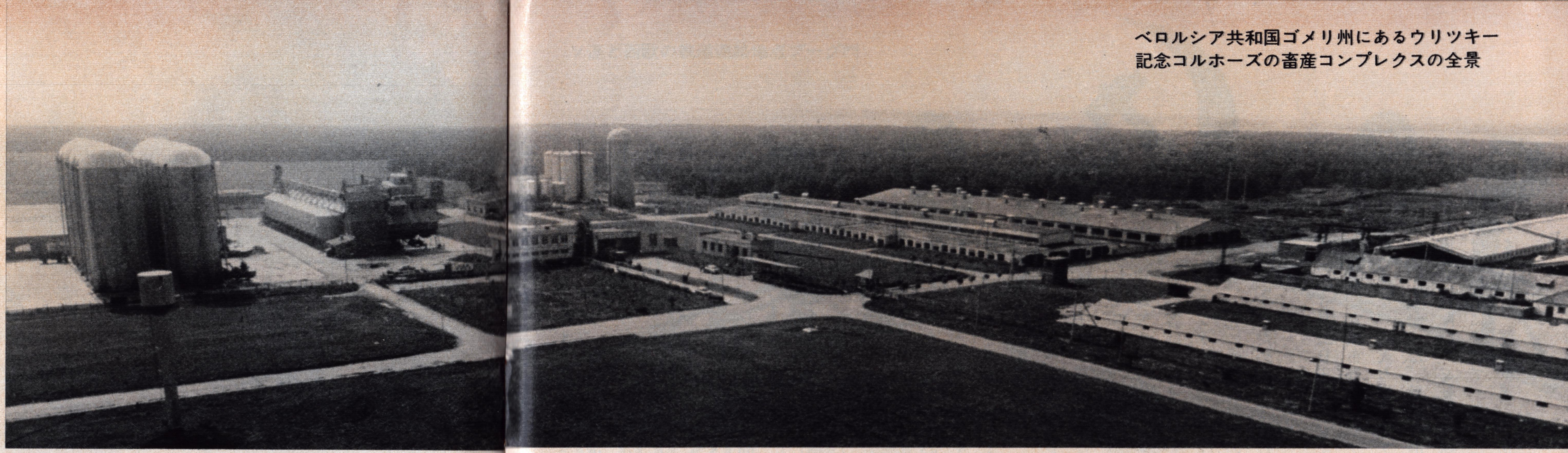
この場所は、記念の土地であるだけでなく、新しい世界大戦を起こそうと望んでいる人々への警告でもある。米国のフリニガン教授は博物館の感想帳に「もしソ連国民がファシズムに対してかくも英雄的に戦わなかったら、いまわれわれの住む世界は全く違ったものになっていたろう。われわれはブレスト要塞の守備隊員や他の戦線で献身的に戦った人々を忘れてはならない。われわれはソ連国民に満腔の感謝を捧げる。平和と文明を守ることは、われわれらの義務である」と書いた。

一九八一年夏、第2次大戦に参加した各国の元兵士たちが、このブレストに集まったのは偶然ではない。ほかならぬこの地から彼らの平和を守る声が響き渡ったのである。現在のブレストは、何百万tもの貨物とともに、世界の人々がとても必要としている友好、相互理解、信頼が通過する国境の門である。





▼ブイソコ・リトフスク駅でのポーランド向けの貨物コンテナの積み込み
◀ブレスト＝エルフルト線急行列車の車掌たち



ベロルシア共和国ゴメリ州にあるウリツキー記念コルホーズの畜産コンプレクスの全景

畜産のモデル・コルホーズ

エレーナ・ゾーニナ　カメラ　S・ソロビヨフ



子牛を飼育している畜産コンプレクスを見回るポタシキン議長



コルホーズの理事会で取り入れの進行状況を報告するマトベイ・ペースニヤ農業技師長(立っている人)

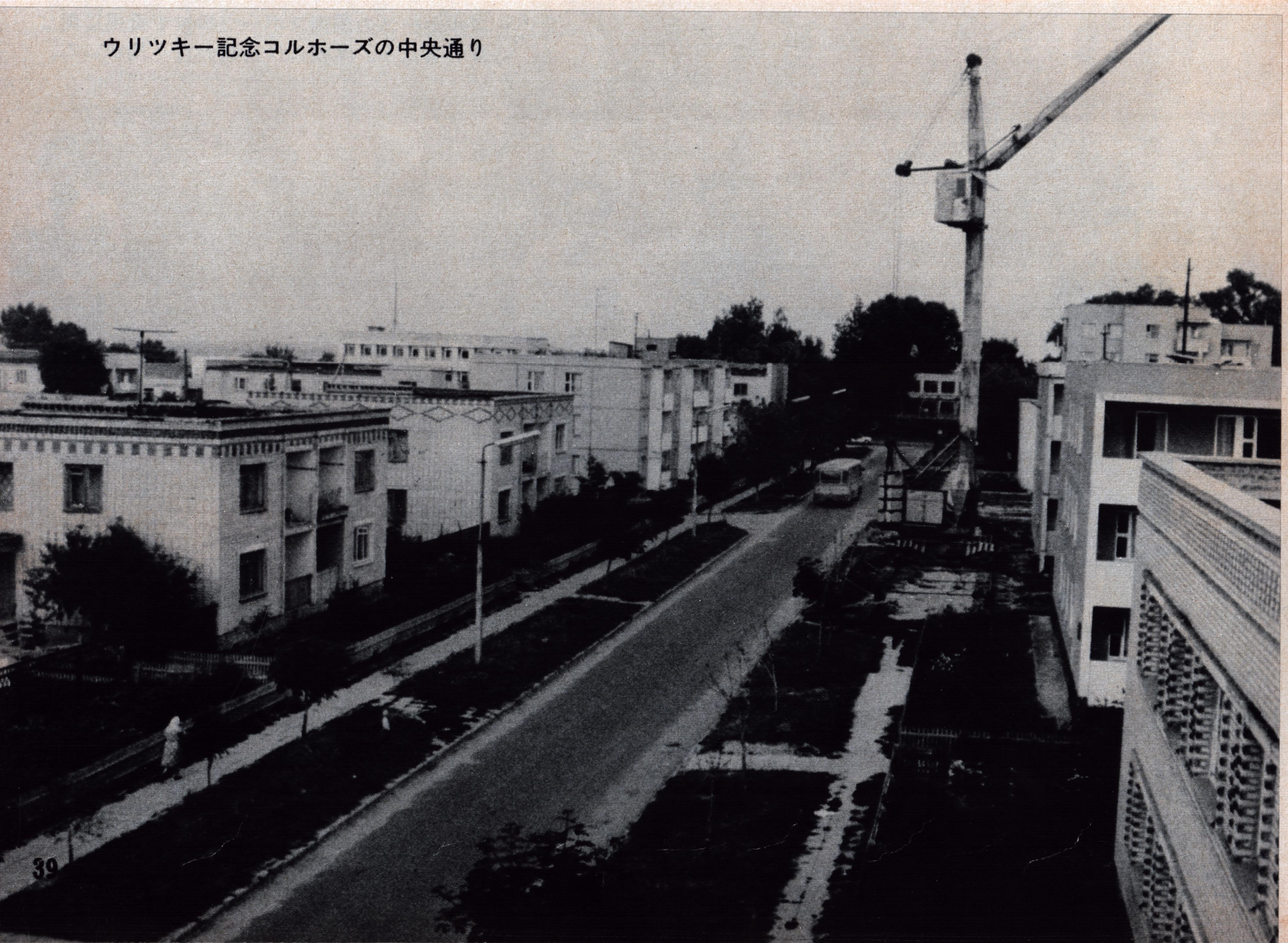
ベロルシア共和国ゴメリ州のウリツキー記念コルホーズは、自分のところでつくった飼料を使って牛を飼育している専門経営で、ベロルシアのモデル経営と言われている。

コルホーズの農地の面積は四〇〇〇ha以上、機械保有台数は約二〇〇台だが、ここの経営の土台は、畜産場と飼料工場を含む畜産コンプレクスである。畜産コンプレクスの工費七五〇万ルーブルは、2年以内で償却された。ほとんど手労働を使わないこの畜産コンプレクスは、科学的に均衡のとれた飼料の割当量、ベロルシア一の採算性、最低コストの肉など、注目すべき成果を挙げている。この4年間にコルホーズは一万t以上の牛肉を国に売り渡し、一三〇〇万ルーブルの純益をあげた。

昨年の夏はひどい干ばつで、土地がすっかり干上がり、コルホーズの苦労は並大抵ではなかった。しかしそれでも1ha当たり3t(豊作の年は5・8tにも達する)の小麦を収穫し、一万三〇〇〇頭近い雄の子牛を1頭たりとも死なせなかった(これらの牛には一日一〇〇t以上の飼料が必要である)。いまベロルシアの各地から1年間に約三〇〇〇人の畜産関係者がここに来て、経験を学んでいる。アルカジー・ポタシキン・コルホーズ議長(56歳)は、コルホーズ外でも広く知られており、ベロルシア共和国最高会議代議員、レーニン勲章受章者で、ソ連共産党第26回大会の代議員にも選ばれた。

コルホーズ議長

ポタシキンも初めのころはウリツキ



ウリツキー記念コルホーズの中央通り



コルホーズの養蜂場で



コルホーズの馬術スポーツ学校で乗馬に興じる若者たち。学校には26頭のだく馬がいる。

ー（村の名そのものもウリツキー）でいろいろな困難にぶつかった。

18年前彼が妻と3人の息子をつれてコルホーズに来たころ、このコルホーズは地区のどん尻クラスであえいでいた。なにしろ収穫量は播種量をほんのわずか上回っていただけだった。村全体の農家はわずかに2戸がスレートぶきで、残りは全部わらぶきだった。コルホーズ員は20km離れた州中心地のゴメリへ出稼ぎに出ていた。

都会出身のアルカジー・ポタシキンは一九五五年にこの弱体コルホーズの議長に選出されたあと、農村の生活とがっぷり四つに取り組み、数年間でコルホーズを豊かな経営に仕立て上げた。それ以前ポタシキンは数年間ゴメリの劇団の俳優をしていた。この劇団が戦争孤児の収容施設で芝居をした日に、彼の生活は一変した。「この前の戦争で家や家族、親の愛情を奪われた子供たちを、まともに見ることはできなかった……」と彼は語った。ポタシキンはこの収容施設で初めは指導員として働き、のちにここの所長になった。そのころはまだ苦しく食料も少なかった。子供たちに腹一杯食べさせてやりたかった。そこで所長は大副業経営をつくった。ポタシキンの組織者としての手腕と物事を進んでやる積極性が認められ、やがてはそれがポタシキンをコルホーズ議長にまでする。こうしてアルカジーは農村の住民となった。

ウリツキー村の最初の建物の一つになったのがクラブ（公民館のような文化施設）である。ポタシキンは建築家と設計を協議し、見積もりを照合し、工事主任を援助した。彼は高層アパートの並ぶ広い通りや緑の果樹園が描かれ、「わがコルホーズの将来」という題銘が記された画をロビーに飾った。かなり前のある集会で彼は「われわれは何でも持つようになり、住宅も都会のものよりもよくなる。暮らしは豊かになり、やがてコルホーズ員が都会に出るのでなく、都会の人がわれわれの所へ働きに来たいと言うようになる」と語った。

この信念には裏付けがあった。一九六五年に国は抜本的な農業振興措置をとって、穀物と肉の買い入れ価格を大きく引き上げ、計画以上の生産物の引き渡し分の割り増し価格を定め、経済的に弱体なコルホーズを借金から救い、経営指導者たちに大きな権限を与えた。

ポタシキンは知識や科学的な態度がなくては、仕事がはかどらないことを理解した。だから懸命に本を読んだ。働きながら通信教育制の農業中等専門学校も終えた。彼の提唱でコルホーズに、半ば忘れかけられていた伝統的なベロルシアの飼料作物が作られるようになった。これらの作物はマイナス10度の寒さに耐えた。つまり11月中ごろまで新鮮な飼料が手に入った。ローム質や砂質の土壌に必要な有機肥料や化学肥料の量は正確に計算された。畜舎の床には格子が取り付けてあって、いつも清潔になっており、また畜舎から引かれたパイプで肥料がじかに畑に運ばれている。

つながっている容器の原理をとった〝ポタシキンの水飲み装置〟や飼料を与える機械装置―― 〝ポタシキンのコンベヤー〟などポタシキンの創意工夫は大したものであり、その工夫したものはベロルシア全土に知れ渡っている。

年とともに機械化が進み、技術も変わった。こうして労働生産性は向上し、収穫量も増えた。コルホーズの収入が増えたので、大がかりな建設工事を進めることができるようになった。コルホーズ員は月に約三〇〇ルーブルも稼げるようになり、ボーナスも出ている（時には年に5回も出る）。いまコルホーズの人々は、議長の言行がみごとに一致したと見ている。

都会から逆に農村へ

いまウリツキー村には生活サービスの家、商店、ホテル（都会のホテルに劣らぬサービスをする）、10年制の学校、保育所＝幼稚園（村民の半数以上は30歳以下なので、子供が多く生まれる）、音楽学校、馬術スポーツ学校、博物館、大きな文化会館がある。

ガスが引かれ、大ボイラー設備がつくられたし、5階建てアパートが3棟建てられている。便利な見晴らし台や小倉庫、居住者が塩漬けやジャムを保存しておく共同の穴ぐらなどのついた、3―4階建てのアパートがぎっしり立ち並ぶ通りもある。

いま八五〇人が設備の整ったフラットに住んでいるが、多くの人は自分の家をぜひ持ちたいと思っている。そしてすでにりんご園のなかにベランダ、地下ガレージ付きの20戸の小住宅がつくられた。新しく世帯を持った者（年間約40組の結婚式がある）には、すぐに住宅と広い宅地付属地が与えられている。

ウリツキーには大学出の専門家が約50人いる。コルホーズから奨学金をもらって大学を出た者たちは、コルホーズに帰っている。昨年秋には、議長の息子のアレクセイもミンスクの農業大学を終え、機械技師となって両親のもとへ帰ってきた。

協業の経済的メリット

ポタシキンがすでに7年間指導してきたのは、ウリツキー村のコルホーズだけではない。一九七五年にコルホーズ合同の指導を引き受けてほしいと言われた。つまり地区最強のウリツキー記念コルホーズが合計17のコルホーズの統合体の指導格になり、ポタシキンに総支配人をやってほしいというわけだった。彼はいろいろ考えたすえ引き受けた。

こうしてベロルシア最初のコルホーズの協業が始まった。ウリツキー記念コルホーズの牛の数は七〇〇〇頭から一万三〇〇〇頭に増えた。ウリツキー・コルホーズは飼料の調達、生産を引き受けるほか、他の出資コルホーズから生まれて2、3週の子牛を買い取り、コンプレクスで育てて、16―18ヵ月後重さ半tになったものを国に売り渡す。他の出資コルホーズは穀物、じゃがいも、牛乳を供給する。収益は一定の比率でコルホーズ間で分配される。このように協業は、合同参加の全コルホーズにとって経済的にメリットがある。

超大型トラックの製造工場

カメラ　V・ドラチェフ



自動車工場のあるジョジノ市内（ベロルシア共和国ミンスク州）で

ベロルシア共和国にあるソ連の大手自動車企業の一つ「ベルアフトマズ」生産合同は、ミンスク、ジョジノ、モギリョフの三つの自動車工場からなる。生産合同という大組織のおかげで、二つの重要課題が解決された。その課題の一つは新しい自動車製造技術を開発する共通の路線をまとめ上げることができたことであり、第二は自分たちの企業の科学技術力を強化できたことである。ミンスク自動車工場には12の研究室、5つの設計・技術組織と二つの実験職場から成る科学セクションがつくられているが、このことだけでも科学と生産の統合規模がわかろう。

このフォト・ルポルタージュはミンスク北東50kmのジョジノ工場（「ベラズ」型自動車を製造）を紹介するもの。ここの最新型トラックは一八〇tダンプトラックで、高さ5m、長さ15mと超大型であるが、時速は60kmと速い。さきごろ北方地方でのテストを終えた。またこのトラックのシリーズ組み立てができる工場の第2期工事分が完成し、操業を開始した。

「ベラズ」型の自動車は約30種にのぼるが、国際展で金メダルを一度ならず受けた30t、40tダンプトラックは、とくに好評である。

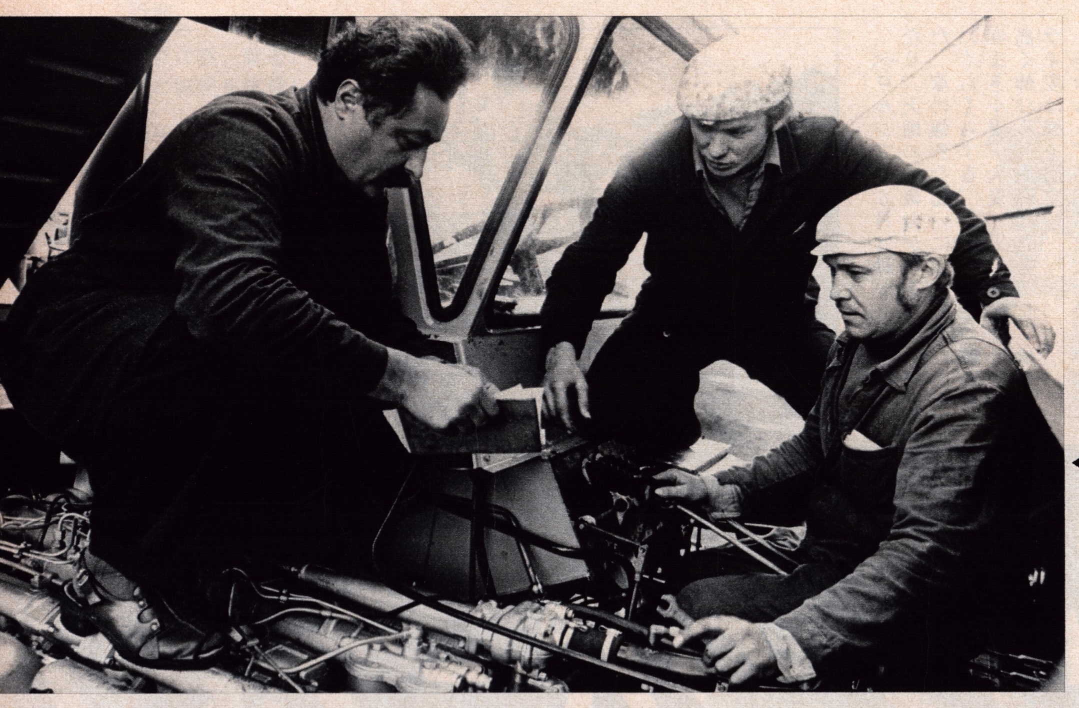
現在ジョジノ工場で製造されている75tダンプトラックをベースにして、露天掘り場用の石炭運搬トレーラー付きトラックが開発された。このトラックは大型鉄道客・貨車を2両積むことができ、しかも数秒で荷下ろしできる。すでに設計陣は三〇〇tの超重型トラックを思いえがいているという……。

超大型トラックを見ていると、こんな車を運転できるのは、よほどの体力の持ち主でなければ、と思うのも無理はない。しかし長年「ベラズ」を売ってきている英国のユモ・プラント会社の専門家たちが、いみじくも述べたように「バレリーナでもたやすく運転できる」のである。運転の力のいる仕事は全部油圧装置がやってくれる。「ベラズ」はいずれも4輪駆動で、4輪にそれぞれ直流電動機が備えてある。

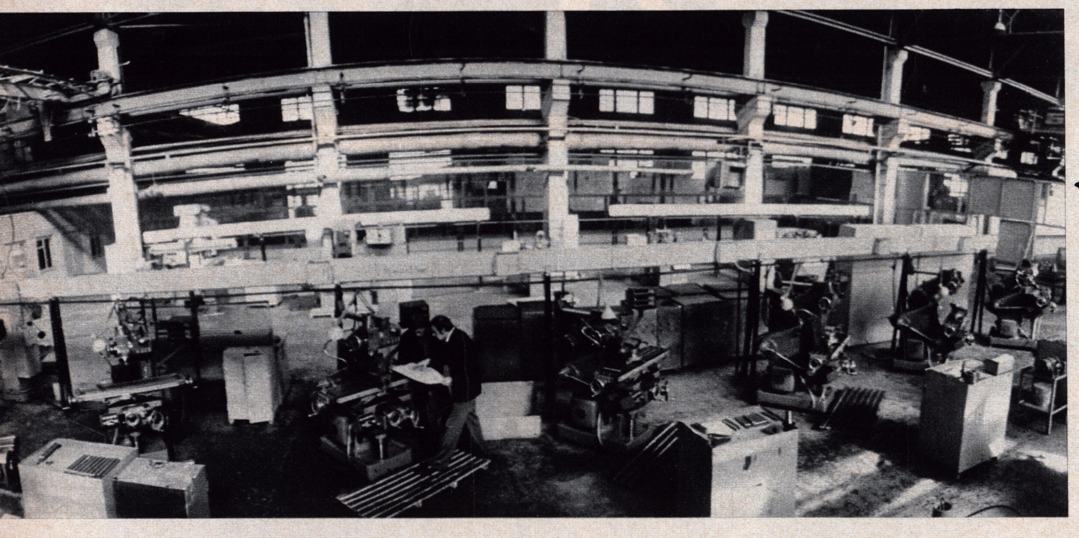
ジョジノ工場製の自動車は、北方やシベリアのきびしい気候のなかでもよく真価を発揮しており、第11次5ヵ年計画の主要施設——バム鉄道、サヤン・シューシェンスコエ水力発電所、新設ガス・石油パイプライン、送電線——の建設場で活躍している。



▶ベラズ工場のメーン・コンベヤ



▶組立て・テスト分工場で製品を検査する（左から）イワン・セメンチク技師とテストドライバーのセルゲイ・ヤロシェビチとアナトリー・ハンドジコ。



▶バイトを数値制御式工作機で製造する工具分工場

ベロルシアの初夏を彩る

イワン・クパーラ祭り

アナトリー・ストウク　カメラ V・ドラチェフ

ベロルシアの6月は緑がぐんと濃くなり、大地の生命力が燃え上がる季節だ。草の強烈な匂いに頭が酔ったようにくらくらする。野は一面緑に覆われ、春まき小麦、大麦、えん麦が分けつし、高く伸びる。亜麻は力を増し、秋まきライ麦は穂を出す。

ベロルシアの風景に欠かせない森は、遠くから見ると、難攻不落の緑の城壁のようだ。夜中にさっと降った通り雨のあとのやわらかな日ざしが、森の上にかかる明け方、白カバの枝葉の茂った頂は、無数の宝石をちりばめたようにきらきら輝く。

1



2



3



1　イワン・クパーラ祭りのにぎやかな行列

2　祭りの夜、若者たちはみな自分の勇気と腕前を披露しようとする。

3　静かな夜の川面に娘たちは花輪を流す。この花輪は未来の花婿のもとへ流れ着くという。

農民にとって6月は、春の張りつめた野良仕事のあとちょっとひと息入れる時期だ。だからこの時期に農民は、最も古い農耕の祭りの一つで、欧州の多くの諸国民にいろいろな名で知られているイワン・クパーラ祭り（イワン・クパーラは聖ヨハネのこと）を祝う。

古くからのしきたりでベロルシアのイワン・クパーラ祭りは、6月23日の夜から24日にかけて行われる。昔から6月23日の午後、女たちは森か野原に出かけていって薬草を採取し、その薬効が消えないようにするために歌をうたったものだ。夕闇が下りると、あらかじめ目星をつけておいた所——森の入口とか、がけのそばの高い木の下とか、川の切りたった岸辺などで焚き火をし、樹脂を浸み込ませた車輪に火をつけて竿で高くつり上げる。輪舞が始まり、火を跳び越える。娘たちは未来の夫を占い、森や野原の花を編んだ花輪を川に流す。老人たちはこわい話や迷信を物語る。

この祭りの伝説の一つにシダの伝説がある。祭りの前夜シダに「小さい花が咲く」という言い伝えがあり、この花を見つけた者に幸せがくるという。祭りの前夜はそもそも奇跡の夜なのだ……

学者の説によると、イワン・クパーラ祭りは偶像崇拝の時代に始まるという。春の野良仕事のあと収穫を待つだけで、あとはただ人間にはどうしようもない自然の力にすがるよりほかにないという時期に、農耕者たちはこの祭りを祝った。この宗教的儀式は神話的な色彩が濃いが、この祭日を祝う趣旨は農耕者の生活と結びついている。いまに伝わる歌もこのことを証明しており、ごく初期の歌は、農耕者たちの切実な苦労を物語っている。後世に入ると、歌はさまざまな性質をもつようになり、軽はずみな愛に走った若者を笑いのめし、コミカルな状況をつくり出すこっけいな歌が現れた。

このページで紹介されているのは、ミンスクにほど近いザスラブリ市のイワン・クパーラ祭りで、主催は現地の人民芸術博物館。祭りには期待どおり、ベロルシア各地からも見物人が押しかけた。

この日ザスラブリのまちは早朝から歌声で包まれ、日暮れごろには全住民が街頭に出て、楽しく行列をつくってまちを練り歩いた。にわか雨が降ったが、かえって皆元気づき、はしゃいだ。

夜明けまでずっと歌声やお祭り気分は続いた。この祭りに参加した人は皆、焚き火、歌声、ゲーム、静かな夜の川面にただよう色鮮やかな花束を、いつまでも忘れないだろう……



4　輪舞が始まった…



5　踊りのない祭りはないが、輪舞のないイワン・クパーラ祭りも考えられない。



6　野の花をつんで作った冠を愛しい人に…



9

7 老人は怖い話をして娘たちをからかう。

8 イワン・クパーラ祭りの主役の一人〝クパーリンカ〟

9 イワン・クパーラ祭りには何回出たか分からないが，いつも最初の時のように装いをこらす。

10 キリスト教伝来以前のこの祭りの面影を伝えるたいまつ行列



8



10



7

数字から見たベロルシア共和国

ベロルシアは大型トラック、サイレージ収穫用コンバインの生産高で全国第1位、化学繊維、オートバイの生産高で全国第2位、金属切削機械、トラクター、自転車、窓ガラス、製材、革靴、毛織物、麻製品、バター、菓子類、テレビ、冷蔵庫、家具などの生産高で全国第3位。

ベロルシアの1日の生産高の主なものを挙げると——

電力——九二八〇万KW時、化学肥料——四万三〇〇t、トラクター——二四五台、トラック——一一〇台、金属切削機械——八四・三台、オートバイ——五九六台、自転車——一九一四台、腕時計——一万九八〇〇個、ラジオ受信機——一四〇一台、テレビ——一五九四台、家庭用冷蔵庫——一七二四・五台、革靴——一一万五〇〇〇足。

ベロルシア共和国では毎日居住面積一万一六〇〇平方mの住宅が建てられており、一〇〇〇人近い人が新居に入っている。

ベロルシアの一九七六—八〇年の国民所得のうち、住民の民生向上費は五七〇億ルーブルで、前の5カ年計画期より一二〇億ルーブル多い。

一九八〇年の労働者、職員の月平均賃金は、対一九七五年比20%増。

しかし労働報酬は人間の生活福祉の状況を示す万能の指標ではない。ほかに社会的消費基金からの給付と特典もある。この基金は個人の物質的、文化的欲求を満たすために、住民に提供される国民所得の一部である。一九七六—八〇年中にこの基金から一七八億ルーブルが支払われた。無料の教育、技能資格の向上、医療サービスやサナトリウム、休息の家、ピオネール・キャンプの無料の利用券の支払いなどは、この資金でまかなわれた。一九八一—八五年にこの基金は24%増える。

一九八一—八五年中にベロルシアの国民所得は22—24%増え、人口一人当たりの実質所得は15—17%増える。労働者・職員の月平均賃金は14—16%上がり、共同経営からのコルホーズ員の収入は19—21%増える。従来と同じく、子供服などの若干の商品の小売り価格は、原価を下回る。

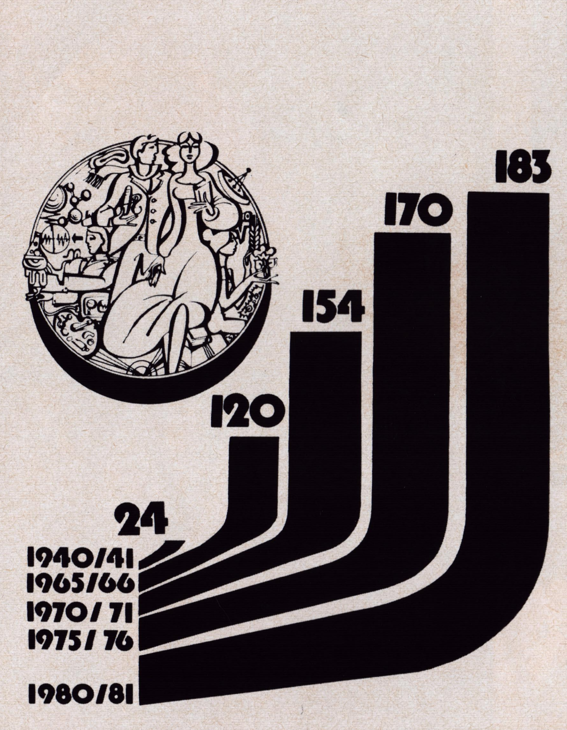
新5カ年計画中にベロルシアの住宅フォンドは、居住面積にして二二〇〇万平方m増えよう。人口九七〇万余りの共和国にとって、この数字は大きい。以前からベロルシアの住宅建設テンポは速かった。

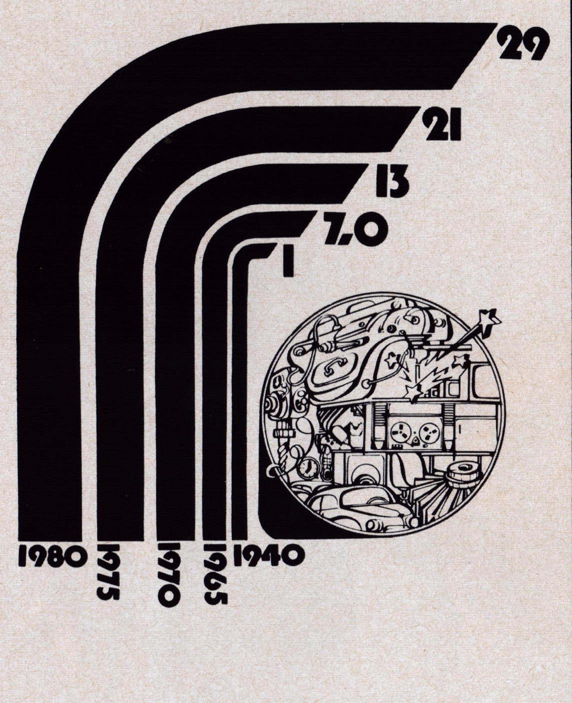
ベロルシアには一〇〇万人の大学出の専門家がいるので、国民経済のあらゆる部門の複雑な問題を解決することができる。ベロルシアには70以上の研究所を含む一六〇の学術機関がある。32のアカデミー機関からなるベロルシア科学アカデミーは、部門別の科学と大学の学術研究を指導している。またベロルシア科学アカデミーは、現代の学術思想の若干の方向の研究で、ソ連だけでなく、世界でも、主導的地位を占めている。

ベロルシア科学アカデミーは、ソ連全体の規模の研究を他の共和国のアカデミーと分担してやっているが、もちろんベロルシアの国民経済や文化の必要も忘れてはいない。ソ連の若干の地区は、行政上の境界を超えた単一の自然・経済コンプレクスをつくっていて、研究の一部は、他の共和国（ウクライナ、モルダビア、リトワ、ラトビア、タジク）のアカデミーと共同で進めている。ベロルシアの学者は、世界39ヵ国の四八〇の欧州、世界の学術センターがやっている研究に参加している。

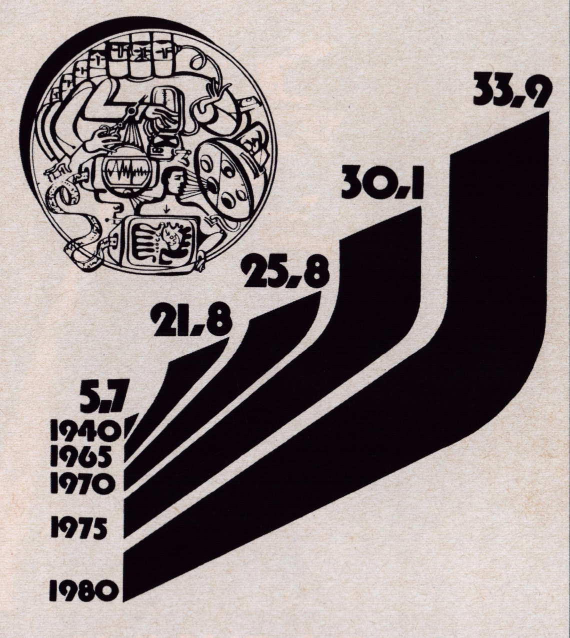
毎年約七五〇万人が劇場やコンサートを、四五〇万人が博物館を訪れている。ベロルシアでは一〇〇〇万人以上が企業、機関、コルホーズやソフホーズの自立芸術サークルや集団に参加している。

人口1万人当たりの学生数



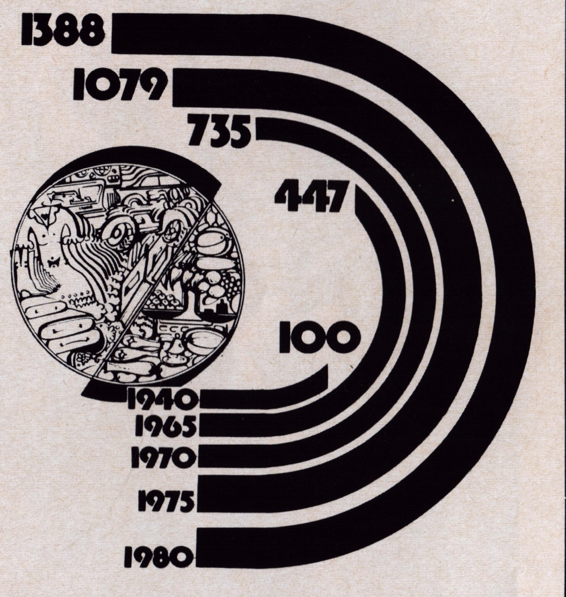


工業生産高の伸び（1940＝1）



人口1万人当たりの医師数

国営、協同組合商業の小売り商品売上高（公共給食を含む）の伸び（1940＝100）





ユニークな動植物相

ベレジナ自然保護区

グリゴリー・コロボフ
カメラ Y・ソモイロフ他



ベロルシアの子どもたちは学校林で森林の科学を勉強し、自分たちの"緑の友だち"を守っている。

目にとび込んで来たのはベニヤ板の立て札が2枚。一枚の立て札には、原人ピテカントロプスの絵に×印、それに「原始人の入場を禁ずる」の文句。もう一枚の立て札にはイラストはなく、「皆さん！ 落雷や泥炭の自然発火が起こす森林火災は全体の10％で、あとの90％は皆さんの火の不始末が原因です」の注意書きだけ。

私が立て札に気を取られているのを見て森林監視員が説明してくれたのだが、ここは自然保護区なのに、森の中にふらりと入ってくる観光客が時々いる。そこでユーモアたっぷりの立て札を立てたという。アイデアを出したのは、自然保護区の学術部次長ミハイル・クージンとのことだ。

クージンはベロルシア国立大学を卒業後10年間、ここベレジナ自然保護区に住み、働いている。博士候補（日本流に言えば博士号）の学位を持ち、現在はその上の学位（博士号）をとるための研究をしている。ミンスクの単科大学の講座主任（一講座に複数の教授・助教授がいる）に招請されたが応じなかった。相変わらず保護区に住み、ここを離れる気持ちはぜんぜんないらしい。

ソ連国内には数多くの自然保護区があるが（ベロルシア共和国内だけでも3カ所）、一番ユニークなのはここ、ベレジナ保護区だとクージンは思っている。干拓されていない広大な沼（複数）が元のままの姿で保存されている中欧でただ一つの場所だ。国内有数の生物圏保護区としてベレジナ保護区は、最近、国際自然保護連合（ＩＵＣＮ）学術センターの地位を獲得した。

この保護区のもう一つの特徴は湖が多いことで、無数の青々とした水があちこち

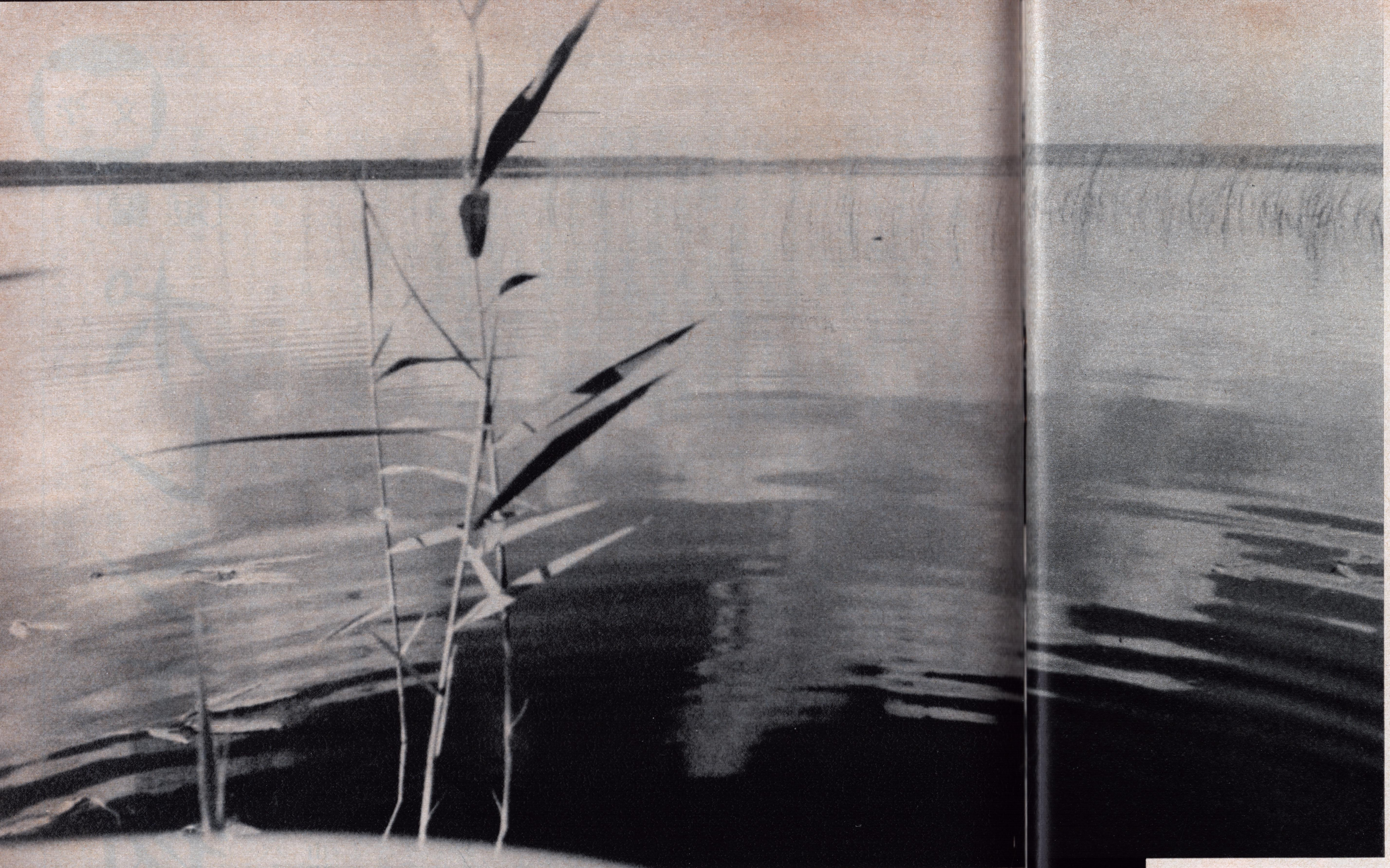


ベレジナ自然保護区の職員たちの宿舎

下 マンモスと同じ時代に生きていた動物――ヨーロッパ・バイソン

自然保護区を訪れる人たちが泊まる森のホテル







ここに生息するヘラジカやノロなどは人を少しも恐れない。
上 ベレジナ自然保護区にはベロルシアでも指折りの豊かな自然がある。森、沼、湖がどこまでも続いている……

に散らばっている。ベレジナ川（ドニエプル川の支流）や沼沢とともに、これらの湖がこのあたり一帯の水源となっており、大量の水のストックのおかげで、暑い時季でもこの一帯の気候は温暖である。湖沼のそばにある泥炭層の厚さは場所によっては最高7mにも達する。この種の土壌は学者にとって絶好の研究対象である。

土壌の比較、各地の土壌構造の研究は、平穏な生物圏を破壊する災いがどこから人間にもたらされるかという問いに答えてくれる。ロシアの有名な学者V・ドクチャエフが、この種の土壌を自然の魔法の鏡と呼んだのも当然だ。この鏡は現在だけでなく、すべての過去の姿を大切に内に秘めている。

「ある小さな出来事からこの保護区の歴史が始まった」とクージンはベレジナ自然保護区創設のいきさつを語ってくれた。「50年以上も昔、ベロルシアの学者アレクサンドル・フェジューシンが生き残りのビーバー20匹をベレジナの草原で発見した。当時ビーバーは大変珍しく、ビーバーの家族が発見された場合、すべて登録されていた。ビーバーたちには〃家〃を建てるための場所として、ベレジナ川の両岸の広大な土地が提供された。一九二五年に国はこの一帯を自然保護区に指定した。やがてビーバーは徐々に保護区外に移住しはじめ、ベレジナ川水域だけでなく、西ドビナ川水域の川や湖ぞいに散らばっていった。しかも、ベレジナ水域のビーバーはソ連欧州部、シベリア、極東の各地へと移住させられ、繁殖し、数々のビーバー生息地を築き上げた。ビーバーはすっかり風土に慣れ、繁殖し、国が捕獲を許可するまでになった……」

もちろん、自然保護区創設を決めたのは、ビーバーの生息のための条件づくりよりもっと遠大な目的があったためだ。もうその当時からこの一帯は他に類を見ないほど多様な動植物相を持っていた。ベロルシアの自然のこのユニークな一角を保存しようとする配慮が、自然保護区指定にこめられていたのである。ここの植物相は七〇〇種を数え、川や湖の岸、ひっそりした汚れなき自然の懐には二〇〇種の鳥が生息しており、その中には珍しい保護鳥ナベコウもいる。その他、47種の哺乳類、爬虫類5種、両生類が8種。湖には30種以上の魚類が生息し、森にはヨーロッパ・バイソン、アカシカ、ヒグマ、ヘラジカ、ノロなどが住んでいる。

これに、氾濫原に広がる大広葉樹林（カシワが主）、欧州有数の規模のハンノキ属の原生林、氷河期後の遺物で島状に点在する矮性シラカバの林を付け加えれば、ベレジナ自然保護区創設という国の決定がいかに将来を見通したものであり、時宜にかなったものであったか分かろうというものだ。

現在、自然保護区では大勢の人が働いている。研究部門は30人以上のスタッフを、現業部門は技師、技手、狩猟員、森林監視員など二〇〇人を抱えている。ここでの研究の成果は、ベロルシアだけでなく、ロシア連邦、ウクライナ、バルト海沿岸諸国の自然保護区、保護林区、狩猟経営の学術研究員の仕事に役立っている。

とりわけ、オオライチョウの檻の中での繁殖・飼育にかんするベレジナ自然保護区の実験は大変貴重なものだ。

ミハイル・クージンはオオライチョウの飼育について次のように語った。

「現在すでに4世代のヒナが育っている。自由を愛する鳥は自由を奪われて育っても少しも野生の特徴を失っていない。動物を自然保護区で繁殖させることには問題はないが動物の数の調整、特に有蹄類の数の調整が非常にやっかいである。有蹄類の頭数の増え方にエサの補給が追いつかないのだ。ヘラジカ一五〇〇頭、野生のイノシシがほぼ同数、ビーバー一〇〇〇家族、各種のシカ多数――これだけの動物をいま養うのは大変である。ヨーロッパ・バイソンの小群がここに移住してきたのもそれほど前のことではないが、その食欲たるや相当なものである。解決策はただ一つ、動物を別の場所に移すことである……」

現在、この自然保護区は改組中だ。（学術研究の目的と課題に応じて）保護区域は四つのゾーンに分けられている。第1ゾーンは〃ベレジナ動植物保護指定地〃。ここは絶対保護区に指定されており、ここの森林面積はこの10年間に一万二〇〇〇haから三万haに増えた。ほとんどすべての自然の複合体が、原始のままの形でここに集中している。

第2ゾーン（予備ゾーン）の総面積は二万ha。やがてこれも〃ベレジナ動植物保護指定地〃になる予定だ。面白いのは第3ゾーン（一万七〇〇〇ha）で、自然保護区の北部を占め、人間の活動による被害が一番大きいところである。この独特の実験基地を得て、学術研究員たちは以前に消滅してしまった自然の姿（複合体）をよみがえらせ、自分たちの研究の成果を実地に生かすチャンスをつかんでいる。

そして、最後の第4ゾーンは自然公園的性格をもった休息とハイキングの場所である。

〔短編〕

ポレシエ物語

パーベル・ミシコ
山田 はじめ 訳

作者紹介

パーベル・ミシコ(51歳)はベロルシアの散文作家。一九五五年にミンスクの国立ベロルシア大学ジャーナリスト科を卒業。長編『ヘロドトスの海』その他多数のベロルシア語で書かれた作品で知られる。本号に紹介する短編『ポレシエ物語』は、ベロルシア南部のポレシエ地域に住む人々を扱ったもの。ポレシエは面積の1/3を森が占め、無数の湖や沼が森を取り囲んでいる。

ユリアン・イワノビチは、目を覚まそうとしても覚めない、甘いまどろみの中にいた。からだはぐったりしていて、不思議な光景が脳裏にちらつく。

彼には、自分が陽光に満ちた、果てしない氾濫の波に優しくもてあそばれており、からだが意のままになるように思われた。彼はクロール、平泳ぎ、バタフライで、自由に、軽々と泳いでいた。実際には泳ぎは上手ではなく、ただ一つ――〝犬かき〟しか知らなかったのだが。彼はこのオレンジ色の暖かい流れの中で、舞い、潜り、水の中で目を開けた。子どものときもそうだったが、水の奥深くが黄色がかった緑色ではなくて、オレンジ色がかったバラ色をしていたことにも、少しも驚かなかった。

彼は深みからゆっくり、綿毛のようにゆっくり、かげろうと波のきらめきのあいだを通って浮かび上がり、話し声のようなものを耳にした。

「眠ってるのかな?」と男の声が聞いて、自分で答えた――「まあ、少し寝かせておこう……」

「私の子ネコちゃんはもう起きているわ」と女の声がささやいた。

「ああ……うう……」赤ん坊が呼び声に応えた。

ユリアン・イワノビチはあたりを眺めた。この声はどこから? 見ると、かたわらを水路標識守りが、漁師の小舟に乗って流れて行く。けさ彼を見つけたあの水路標識守りだった。標識守りは小舟の上にモニュメントのように立っていた。小舟は流れているのではなくて、果てしない氾濫の広がりの上で、バラ色のもやの中にかかっているように見えた。標識守りのかたわらには娘が立っていて、刺しゅうのついた毛布を両手に抱えていた。どこからか、かん高い鐘の音が聞こえて来た。

〈ああ、けさ私が顔を洗うのを手伝ってくれた女性だ……でも、なぜ子どもの声が聞こえるんだろう? どうして川の中に、氾濫の中に子どもが? 子どもが……〉

不安がユリアン・イワノビチを捉えた。彼は身ぶるいすると、最終的に目が覚めた。

彼の寝椅子はドアの後ろの、台所の壁ぎわにあった。陽光がまっすぐ目を射た。春らしい、明るい、まぶしい光だった。窓の外ではスズメがさえずっていた。こっそり忍び込んで、ひそかに動きまわっているにちがいない。小さな音でラジオが鳴っていた。

ユリアン・イワノビチはクッションの方へからだをずり上げて、太陽が顔にあたるのから逃れた。全身が不明瞭にうずくのを感じると、昨夜のことを思い出した。

白っぽい壁には、写真の入ったたくさんの額がかかっており、かつては聖像画がかかっていたと思われる一隅では、ガガーリンの肖像がほほえんでいた。部屋は大きくなかったが、そのうえさらに、二つの戸棚と花模様の窓掛けで仕切られていた。戸棚の向こうは寝室のはずで、そこには窓があって、陽光が差し込んでいた。その陽光を浴びて、恐らく戸棚と窓掛けのあいだで、あの娘がベッドに座っているのだ。彼女の両腕の中には、オムツをあてた乳飲み子がいる。

赤ん坊は貪るように、むせびながら乳を吸っている。

「小さなお馬鹿さん、私はどこへも行かないわよ」と若い女が小さな声で言った。「ああ、すっかりおなかを空かせちゃったわね、かわいそうに! 悪いママ。仕事に夢中になってしまって、お乳の時間だってことを忘れてたわ。お飲み!……」

彼女は刺しゅうの入った、袖に大きな花模様のある白い上衣のボタンをもう一つはずした。乳を飲ませやすくするためだった。

〈子どもを抱いたマドンナ……ポレシエの聖母……〉ユリアン・イワノビチは歓喜してつぶやき、彼がもう眠っていないこと、こんなにも直接的な内密な行為を偶然にのぞき見していることを窓掛けの向こう側に気取られないよう、息を殺した。

黄色がかった赤褐色の、女の濃い髪は後ろに梳かれ、大きな房に結われており、額はふんわりした奔放な巻き毛でふちどられていた。太陽がその巻き毛の中で炎熱の金色に輝き、丸くて、張りのある、まだ小娘のような頬や、小さな、まっすぐな鼻のソバカスの一つ一つを照らし出していた。

彼女は相変わらず赤ん坊に話しかけていた。

「まあ、私たちはきょう、まだ顔を洗ってなかったわね! 少し休憩しましょう。私の子ウサギちゃんを洗ってあげるわね……」

ユリアン・イワノビチは寝椅子から起き上がろうとしたが、あちこち見まわして、ふたたび頭をクッションに沈めた。服がどこにも見あたらなかったからだ。靴もなかった。昨夜はどこで服をぬいだのだろう? 思い出せない。

若い母親は歌うように何か優しい言葉を言い、歌詞は歌わずにメロディーだけを口ずさんで、赤ん坊の目を綿片で拭い、顔をふいた。ユリアン・イワノビチは横になったまま、歌詞のない歌を聞いていたが、ふたたびまどろみ始めた。まどろみの中でとつぜん、昨夜彼の身に起こったことがすべて、はっきりと思い出された。

編集部ではだれも、もうポレシエには雪は跡形もなく、あたり一面の水で、氾濫が荒れ狂っていることを知らなかった。もちろん地区の中心までは、彼は何事もなく、列車で行くことができた。すでに途中で、地区の中心からザレチャヌイまでならランチで行けることが分かった。プリピャチ川では航路が再開されてもう丸一週間にもなるのだった。だが、彼が行かなければならなかったのはザレチャヌイではなく、もうちょっと先、ザレチャヌイから2kmほど向こうだった。どうやって行ったらいいのか? 小舟しかないという話だった。ザレチャヌイにランチが着くと、周辺の村々から小舟がやって来て、それで必要なところまで行くのだ。徒歩や車で行くことなど、〝もってのほか〟だと言われた。

そしてすべては、言われたとおりだった。汽船もあって、午後3時ごろ、モーズィリから最後の便が出た。汽船が来るまでに、ユリアン・イワノビチは腹ごしらえをすることができた。彼は埠頭のビュッフェでビールを一杯飲み、トーストを食べた。ザレチャヌイの埠頭には小舟があった。小舟は着いたばかりだったが、ユリアン・イワノビチが行かなければならない村からではなく、別の、対岸の森の向こうの村から来たものだった。ユリアン・イワノビチと同じ汽船で地区の中心地からもどって来た女教師を迎えに来たのだ。

ユリアン・イワノビチがそれを知ったのは、ぐらぐら揺れるタラップを軽率にも駆け降りて、岸で小舟の漕ぎ手と言葉を交わしてからだった。そうこうするうちに、汽船はタラップを引き揚げ、エンジンを唸らせると、あとずさりして岸を離れ、向きを変えて、速度をあげ始めた。

「私たちと行きませんか?」女教師が遠くからユリアン・イワノビチに声をかけた。「写真なら私たちのコルホーズでも撮れますわ……」

「ありがとう。しばらく待ちましょう」

彼はこの結構な申し出を断わった。

彼はそのあと何回この初老の女教師を思い出し、何回自分をこっぴどく罵ったことか! 女教師に、彼が行こうとしているコルホーズへ電話をかけてもらい、迎えに来るよう伝えてもらえばよかったのに。だが、なぜかそんなことは思いつかなかった。

彼は何本かの柳の低木と背の低い松が生えた三角形の島に一人残った。何百mか先で、島の尖った一角が水中に没していた。そこは草原か沼だったところで、やっと見分けられるような去年の小道が、その方角に通じていた。そこには新しい足跡は一つもなかった。きっと今年になってからは、まだだれもこの道を歩いたことがないのだろう。道はもやのかかった氾濫のかなたへと向かっていたが、その氾濫の向こうのどこかに、ユリアン・イワノビチがカメラ取材のために派遣されたコルホーズがあるのだ。

島は静かで、すでに薄闇が垂れ込めていた。ユリアン・イワノビチは急に疲労を感じ、機材の詰まったカバンを砂の上に置いた。電池も肩から降ろした。バンドはすでに肩に食い込んでいた。荷物を持たずに島を探険することにした。

砂と濡れた裸の低木、何本かの背の低い松。これでは火を焚くこともできない。

川からはますます霧が湧き起こり、沈みかかった太陽がその中に溶けて消えた。寒く、湿っぽく、じめじめしてきた。それでも彼はまだ、自分を元気づけ、島を歩きまわりながら、いまにも小舟が見えるのではないかと期待していた。足もとの砂は水を吸って湿っており、やがて彼の冬用の靴の中も濡れて、ぴちゃぴちゃ音を立て始めた。足が凍えて、かじかんできた。寒さがますますからだの上の方へ登り、ふるえが止まらなくなった。

彼は不意に理解した。ここではだれかを待っても無駄だ。小舟など来ない。なぜなら朝にならなければ、汽船はザレチャヌイへもどって来ないからだ。夜になるというのに、だれが小舟で川へ漕ぎ出すだろうか? 何のために?

彼は2度、水につかった草原を渡ろうと試みた。初めは靴をぬいだだけだったが、次にはズボンをぬいで、それを肩にかついだ。

全身をふるわせ、氷のように冷たい水に心臓がしびれるのを感じながら、竹馬にでも乗ったように、そろりそろりと歩いて行った。ときおり、つるつるした氷で足の裏が焼けるように痛んだ。ユリアン・イワノビチは、こんな経験がいまだかつてなかったことを考えていた。人に話しても、信じてもらえないだろう。やがて、すべての思考と感覚は一つのことだけに集中した――とにかく冷たい……

　彼は水の中の坂を下っていたが、足をすべらせて、もう少しで倒れるところだった。あわててカバンから解放されている方の手をついたが、外套の袖が肩まで濡れてしまった。ズボンが水の上に落ちた。彼から2歩ほどのところに強い流れがあって、その表面で渦が巻いていた。ユリアン・イワノビチはやっとのことで、大切なズボンをつかまえることができた。膝の上まである水の中に立ちながら、彼はこんなことをしても何にもならないことを理解した。すっかり暗くなってしまわないうちに、島まで引き返す必要があった。ひょっとして、火を焚くことができるかもしれない。

　だが、マッチは濡れていた。濡れていなかったとしても彼は、岸に打ち上げられた水でふやけた木っ端や濡れた枯れ草、湿った低木の枝に火をつけることはできなかっただろう。それでも、島のそばの水の上にベニヤ板の柱が立っていて、その上で火がぼんやりと輝いているのを見ると、ユリアン・イワノビチは、あれは石油ランプだ、と思った。むかし、水路標識守りがあんなランプに火をつけていたことがあった。こんなところへ標識守りがやって来るはずがないことを、彼は思いつかなかった。オールが水を掻く音も、人の足音も聞こえなかった。水に入って柱に近づいて見ると、中でともっているのは電灯だった。電灯は暗くなると自動的について、電池を電源にして光るのだった。

　やっとのことで彼は濡れたズボンと靴をはき、からだを暖めるために、くたくたになるまで島の上を走った。だが、ちょっと休むと、湿気と寒さで彼はふたたびふるえ出し、またもや飛んだり、跳ねたり、しゃがんだり、腕をふりまわしたり、ボクシングのまねをしたりしなければならなかった。朝になると、彼は寒さのあまり感覚を失い、すっかり衰弱して、酔っ払いのようにふらふら歩いていた。思考はもつれ、やがて停止した。彼は一つのことだけを、寒いということだけを意識し、感じていた……

　明け方、オールの音が聞こえたような気がした。彼は霧に向かって、荒々しいしゃがれ声で叫んだ。このリズミカルな旋律的な音がどっちから聞こえて来るのかすぐには分かりかねたのであっちこっちに向かって叫んだ。ようやく、自分の声が相手に届いたこと、オールの音がいっそうはっきりして来たことを確信した。こちらに向かって漕いでいるのだ！

　小舟は音もなく岸に近づいた。小舟には水路標識守りが幻のように立っていた。背が低く、人参色のあごひげを生やし、子どものように赤い頬をしていた。彼はびっくりして、目をぱちくりさせながら、ユリアン・イワノビチの半狂乱の叫びを聞いていた。彼はとつぜん気がつくと、驚きの声をあげ、あわてて船べりをつかんで、ユリアン・イワノビチの方へ漕ぎ寄せた。

　ユリアン・イワノビチは自力で小舟にたどりつくだけの力がなかった。水路標識守りは抱きかかえて、船べりをまたぐのを手伝った……

　……小舟がとつぜん足もとで揺れたような気がして、ユリアン・イワノビチはバランスを失うまいと手をふり、何かにつかまろうとして、寝椅子のわきにあった椅子の背に肘を強くぶつけた。

　たちまち窓掛けが左右に開いて、寝室から若い女の顔がのぞいた。緑色がかった目が微笑に輝いた。

「まあ、もう目を覚ましたの」と言って、彼女は全身を現わした。「あなたの服を持って来るのを忘れてたわ。いま持って来ます！」

　彼女は台所へ駆け出して行った。台所で彼女がペチカのそばに椅子を置き、素足でそれに登って、やがて床に跳び下りる音が聞こえた。

「はい……」彼女はいくらか息を切らせていた。「あなたのズボンと、背広と、ワイシャツと、ネクタイ。それに靴下……」

　彼女は服を椅子に置くと、なぜか笑いをやっとのことでこらえていた。ユリアン・イワノビチは思わず微笑した。

「ありがとう、ありがとう！……ぼくのために、すっかり面倒をかけちゃって……」

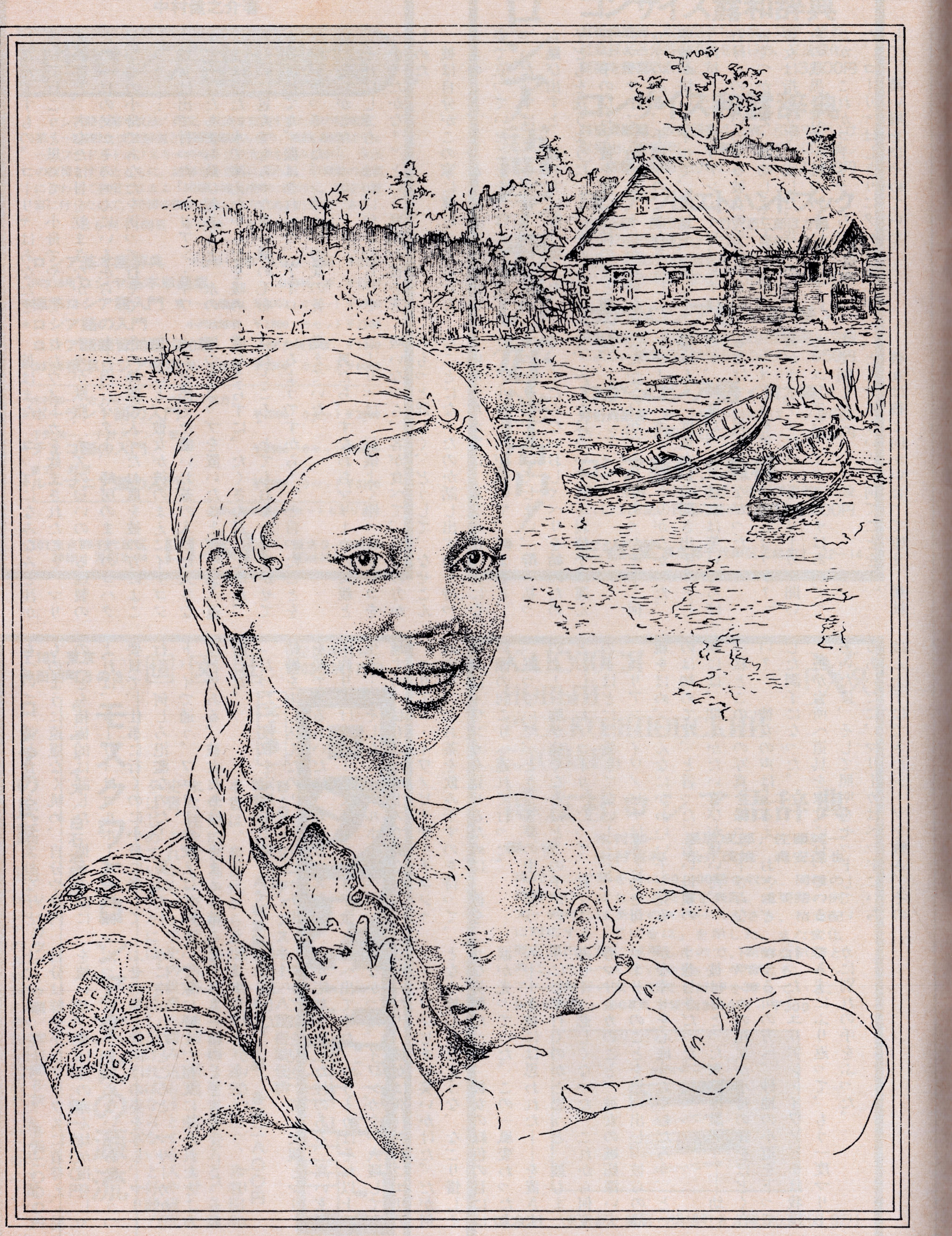
「ええ、大変な面倒をね！　ほっ、ほっ、ほ……朝のあなたったら、こっけいだったわ……私に結婚なんか申し込んで……」

「さあて？」彼は毛布でからだを隠しながら、寝椅子の上に座った。そして自分でも笑い出した。この娘はすでに母親でありながら、その直截さと誠実さで彼をとまどわせた。いたずらをほめられた幼児のように、彼女は声高く、うれしそうに笑い出した。彼女の目は、陽光を浴びた森の中の空き地のように輝いていた。

「マリーカ、きみに結婚を申し込みに来た、なんて言って、私の手に接吻したのよ！　私のコーリャが怒り出したわ……嫉妬深いんだから……」

「ほかに何かやらかさなかったかい？　すぐ酔ってしまったものだから……」ユリアン・イワノビチは顔に火がついたような思いをした。

「いいえ……」彼女は鼻を鳴らして、顔から蚊でも追い払うかのように手をふった。たちまち真顔になって――「あなたは服を着なくちゃ。私はあなたに食べる物を……あなたは昼食も寝すご



したんですもの。コーリャはあなたを連れて行こうと思って、小舟でやって来たけど、あなたは目を覚まさなかったの。私の父がそのへんにいるから、父が別の小舟であなたを送って行くでしょう……」

彼女は出て行った。ユリアン・イワノビチはたちまち跳び起きると、氷のように冷たい水で凍えたからだを暖めるために包んでもらった重い綿の毛布を投げ捨てた。服はきれいで、アイロンがかかっていた。シラカバの炭の乾いた匂いがした。

〈それにしても、ほかに何かやらかさなかったかな?〉という疑問が彼を苦しめた。

彼は自分がこの家に連れて来られたときのこと、すっかり凍えて、哀れな姿で立っていたことを、ぼんやり覚えていた。すばしこいマリーカは部屋から跳び出すと、彼の方に駆け寄った。子どもを洗うように、しっかりした冷たい手のひらで彼を洗い、彼の手と顔をマッサージし始めた。それから刺しゅうのある、手織りの、ざらざらした感触が快いタオルで、優しく、楽しそうに拭った。ユリアン・イワノビチは石けんの匂いのする彼女の手のひらを唇でつかまえ、接吻しようとしたが、彼女は指を立てて威した。背の高い、色の浅黒い若者が机のわきに座っていたが、これがコーリャにちがいなかった。コーリャはしきりにタバコをふかして、濃い眉をひそめていた。

彼はまた、コップになみなみと注がれたウォトカを飲まされたこと、マリーカが獣脂、ネズの匂いのする燻製のもも肉、バター、蜂房のままのコハク色の蜂蜜の入ったお皿を彼の方によこしたこと、彼女が彼のまえにイチゴジャムを添えた濃いお茶の入った大きな柄つきコップを置いたこと、たえず〝遠慮なさらずに、たくさん召し上がれ。見たところ、とてもおなかを空かせているようですから!〟と言ったことを覚えていた。

男たち、すなわちマリーカの父親とコーリャは、行儀よく座ってタバコを吸いながら、客が食べて、自分の方からもっと詳しく、どうして、なぜこんなことになったのか話し出すのを待っていた。だが客は、おなかが一杯になり、アルコールが入って、暖まると、すっかり力が抜けてしまい、酔っ払って、くだらないおしゃべりを始めたので、みんなは急いで客を寝椅子に運んだ。

〈だが、ほかにも何かあったぞ……何かが!〉考えればきりがなかった。彼はもう一度彼女から聞き出そうとしたが、無駄だった。彼女は笑いころげるだけで、何も言わなかった。

「ウォトカを差し上げましょうか?」彼がテーブルにつくとマリーカが聞いた。ユリアン・イワノビチはあわてて手で制した。

「とんでもない! 何てことを!」

彼女は彼と向かい合って座り、頬杖をついて、彼が食べるのを素朴な子どものように遠慮なく眺め、自分や身内のことを積極的に話した。彼女の話によれば、コーリャはコルホーズの機械要員で、仕事に行くのに小舟に乗って行く。何しろ氾濫なのだ! 夏はオートバイで通う。フェリーを使えば10kmほどである。彼女たちは一年まえに結婚した。

「たった一度私を定期市で見かけて、結婚を申し込んだの! プリピャチ川を船で来るあいだに、カワカマスを2匹釣り上げたわ! 父はもうじき年金生活……そしたら、コルホーズへ引っ越すの。私もコルホーズで働くから」

ユリアン・イワノビチがイチゴジャムの入ったお茶を飲み干すのを待って、彼女はイワンカを見せるために、彼を戸棚の向こうへ連れて行った。

「眠っていて、ときどき夢の中で笑うのよ! 胸が痛くなるほどこの子がいとおしいわ。コーリャだって、私、この子ほどには愛してない!……」

ユリアン・イワノビチは赤ん坊と母親をほめ、こんなにかわいい子を見るのは初めてだ、と言った。若い母親の顔には、抑えがたい喜びが輝いた。

「私とこの子の写真を撮って下さらない?」彼女の声はふるえ、おどおどした調子になった。

彼が台所へ道具を取りに行っているあいだに、そして照明をセットしているあいだに、マリーカはベッドにいちばん上手にできたシーツを敷き、その上にオムツをはずした赤ん坊を置いて、自分は鮮やかなブラウスに着替え、髪を梳いた。彼は裸の赤ん坊が指をしゃぶって居眠りを始めないうちに、うつぶせの姿と仰向けの姿を写し、マリーカに抱かれたところと、マリーカが急いで家に呼んだ祖父に抱かれたところと、3人一緒のところを写した。〈ああ、コーリャがいない!〉マリーカは落胆した。

やがて彼を見送って、父親とマリーカが彫刻を施した柱のある、高い玄関口へ出て来た。マリーカはそれ以上は来なかった。イワンカを一人残しているからだ! 彼女は別れぎわにユリアン・イワノビチに笑いかけた。だが何となく放心したような、なごり惜しそうな笑顔だった。彼女の緑色の目には涙が光っていた。この一風変わった人人——と彼には思われた——を置き去りにして行くのかと思うと、彼もまた淋しく、悲しくなった。これから何度もマリーカのこと、彼女の嫉妬深い夫コーリャのことを思い出し、彼らの静かな幸せを心底うらやむだろう、という悲しさだった。

彼は年とった水路標識守り——幼いイワンカの祖父が小舟の鎖をほどく音がする川の方へ、砂地の小道を下って行った。ユリアン・イワノビチは我慢できずにふり返って、もう一度マリーカに別れの手をふった。

チャイコフスキー音楽コンクールの審査委員、声楽家の

小野光子さんにインタビュー



6月10日からモスクワで第7回チャイコフスキー記念国際音楽コンクールが開かれる。このコンクールに声楽部門の審査委員として出席するソプラノ歌手の小野光子さん（東京芸術大学講師）にインタビューした（聞き手　S・ニコラエフ本誌記者）。

――小野さんの母上（一九五二年から勤労者の民主的な芸術運動「日本のうたごえ」の指導者で、国際レーニン平和賞の受賞者）関　鑑子さんの名前は、今でもソ連人によく知られ、記憶されています。音楽的な家庭に生まれた小野さんは、多分、子どもの頃から声楽家になろうと夢見ていらっしゃったのでは？

小さい時からピアノをやり、13歳の時から声楽をやっています。しかし、私が夢見ていたのは別のことで、考古学者になりたかったのです。まだ、ほんの少女の頃から、働いてお金をつくったら、中央アジアに発掘調査に行こうと思っていました。これは結局夢に終わりました（？）が、音楽の上で苦しい時、この夢が私の心の支えになってくれたと思います。十代の頃から母を手伝って、うたごえの合唱団の人たちに楽譜の読み方や歌唱技術を教え、東京芸術大学音楽学部を卒業しました。

私がソ連に行って、自分の目でこの国を見、世界中に知れ渡っているソ連の音楽家たちの演奏に接したいと思ったのは、戦争前からの親たちの夢――の影響でしょう。しかし、私にはそれを実現する機会が与えられました。母の受賞の際、今から25年前、モスクワ国立音楽院の最初の日本人学生となれたからです。私は今も当時のモスクワ音楽院長A・スベシニコフさんに感謝していますが、それは彼が私にニーナ・ドルリアク教授の下で学ぶ機会を与えて下さったからです。ドルリアク教授は私の一生でめぐり会った人々のうちで最も魅力的な、心の温かい方で、繊細な感覚をもった教養の高い音楽家です。教授との初対面を前にしたあの日、私は非常に興奮しました。恐る恐る部屋のドアを開けると、美しい婦人が一人ピアノの傍らに座っていました。当時はドルリアク教授は英語をほとんど話せませんでしたし、私の英語の力も大したことはなかったのですが、意思の疎通はすぐに出来たように思います。教授のレッスンは本当にすばらしいものでした。

――ソ連の教授陣だけでなく、演奏家のレベルについてどう思いますか？

非常に高いと思います。ソ連人は極めて才能に恵まれた、音楽的な国民です。言うまでもなく、豊かな文化的遺産や、文化教育制度全体の成果の影響もあるでしょう。チャイコフスキー・コンクールをはじめとする各コンクールには、才能のある若い人たちがますます多くソ連から出場するようになっています。もちろん、これらの人たちには、将来、ソビエト芸術の栄誉を担い、オイストラフ、コーガン、リヒテル、シャフラン、その他の先輩たちの跡を継ぐ芸術家として大成するという大事業が課せられていますが。

――小野さんが初めてチャイコフスキー・コンクールと〝知り合った〟のはいつですか？

ご存知のように、チャイコフスキー・コンクールは一九五八年から行われています。私は音楽院の学生でしたが、コンクールでの演奏を聴こうと苦心して毎日会場に忍び込んだものです。モスクワ中の人がつめかけるので、なかなか切符が手に入りませんから。この時ピアノの松浦豊明さんが入賞しています。

このコンクールのことが広く知られるようになったのは、一九六六年のコンクールで何人も入賞してからでしょうか。この年、バイオリン部門で潮田益子さんと佐藤陽子さんがそれぞれ2位、3位に、チェロ部門で安田謙一郎さんが3位に入賞しました。前回の時から、私は審査員の一人としてお招きを受けています。とても名誉なことですね。

――今回のコンクールには小野さんのお弟子さんも出場しますか？

はい。いまミラノで勉強している国立音大卒・芸大大学院修了・毎日新聞NHK音楽コンクール二位入賞・二期会会員のソプラノの木村紀子さんが出場します。

――審査委員の一人としてチャイコフスキー・コンクールの意義についてどうお考えですか？

チャイコフスキー・コンクールは世界でいくつかの最も有名な水準の高い音楽コンクールの一つで、多くの国から非常に才能のある新進演奏家が参加します。このコンクールは現代のクラシック音楽全体、そしてその中の一つのすばらしい方向であるロシア音楽の熱いリハーサル室だと言うことができます。こういうコンクール自体が国際的な文化交流の拡大に貢献するのは疑いのないところです。

今回のコンクールも興味深いものになると思います。審査委員の一人として、コンクールにいい雰囲気をつくり出すように努力するつもりです。出場者はホール一杯の耳のこえた聴衆と審査員の前で自分の技量のすべてを示さなければなりませんし、作品一つ一つの独自性を表現できなければなりません。若い人々には大きな負担ですが、出場者の皆さんの成功を希望したいと思います。

なお、このほどビクター音楽産業から小野光子さんの最新録音盤『プーシキンの詩による歌曲集』（PRC―30285）が発売されました（定価二八〇〇円）。このLPには、19世紀ロシアの大詩人プーシキンの詩にグリンカ、ダルゴムイシスキー、ブリトゥン、プロコフィエフなどが作曲した歌曲18曲が収められています。



アレクサンドル・イワノフ氏のその後の生活

アレクサンドル・フラトキン⑦

今回はアレクサンドル・イワノフ氏とその家族の日常生活についての新シリーズ第7回目。前回のシリーズは一九七九年に一年間にわたって本誌に連載された。主人公アレクサンドル・イワノフ（愛称サーシャ）は38歳で、モスクワ工作機械工場の調整工。妻のアンナ（愛称アーニャ）は34歳で、地区診療所の看護婦。息子ペーチャは12歳で、10年制中学校6年生。娘カーチャは7歳で、昨年の9月に小学校に入学した。一家には犬のスチョーパがいる。

アーニャの仕事と勉強

モスクワの4月は暖かくなり始める月だ。日光も強くなり、昼も長くなる。まだ暗いうちに起きて、まだ暗い8時までに職場に行かなければならない12月とは、比べものにならない。12月には一日の大半を人工照明のもとで働き、暗い中を家に帰る。

アーニャは芝生がすでに緑色づいた辻公園のわきを通って診療所へ向かいながら、ふと、来年の4月はもうこの公園のわきを通らなくなるのだ、ということを思い出した。途中から地下鉄に乗って、新入生のように、大学の講義に通うのだ。

ソ連では、医科大学は最初の3年間だけは夜間部があるが、その後の3年半は昼間部しかないので――もちろん、それに耐え、医者になろうという決意が変わらなければの話だが――全力と、昼間の最も有効な時間を勉学に打ち込まなければならない。

サーシャとの会話が思い出される。「アーニャ」と、あるとき夕食を食べながらサーシャが言った。「きみが一日中働いたあと、大学の講義やセミナーに通って、さらに夜おそくまで教科書やノートに向かうのを、ぼくはこれ以上見てられないよ。たのむから、昼間部に移る来年からは、奨学金をもらって、夜勤や日曜出勤なんてことは考えないでくれ」

アーニャはそう言われるのに備えて、すでに自分の考えを何度もサーシャに伝えていた。もちろん、サーシャの言うことは正しい。彼一人の稼ぎで一家の生活は十分まかなえる。アーニャが全額を稼がないまでも、収入があればその分だけ生活がよくなることも事実だ。だが、それをサーシャに分かってもらえる自信はアーニャにはなかった。

彼女が昼間部へ移ってからも、少しでも働かなければならない本当の理由は、夫と話し合っているうちに初めて、おのずから明らかになった。

「私は働かずにはいられないの」小声だが確信をもってアーニャが言った。

サーシャは、アーニャが正しいことを理解した。意識的な生活の全期間を通じて、相思相愛の夫のもとでさえ、家事や2人の子どもの負担をかかえてさえ、自立していることに慣れて来た彼女は、一時的にせよ〝単なる主婦〟の状態に移ることはできなかった。彼女はすでに、慣れっこになった仕事の忙しさの外にいる自分、自分が人々にとって実際に必要な存在であり、人々に評価されているという自覚のない自分、診療所の仕事仲間がいない自分を想像することはできなかった。

アーニャが働いている普通の地区診療所がどんなものであるかを読者にもっとよく分かってもらうために、いくつかのデータを紹介しよう。

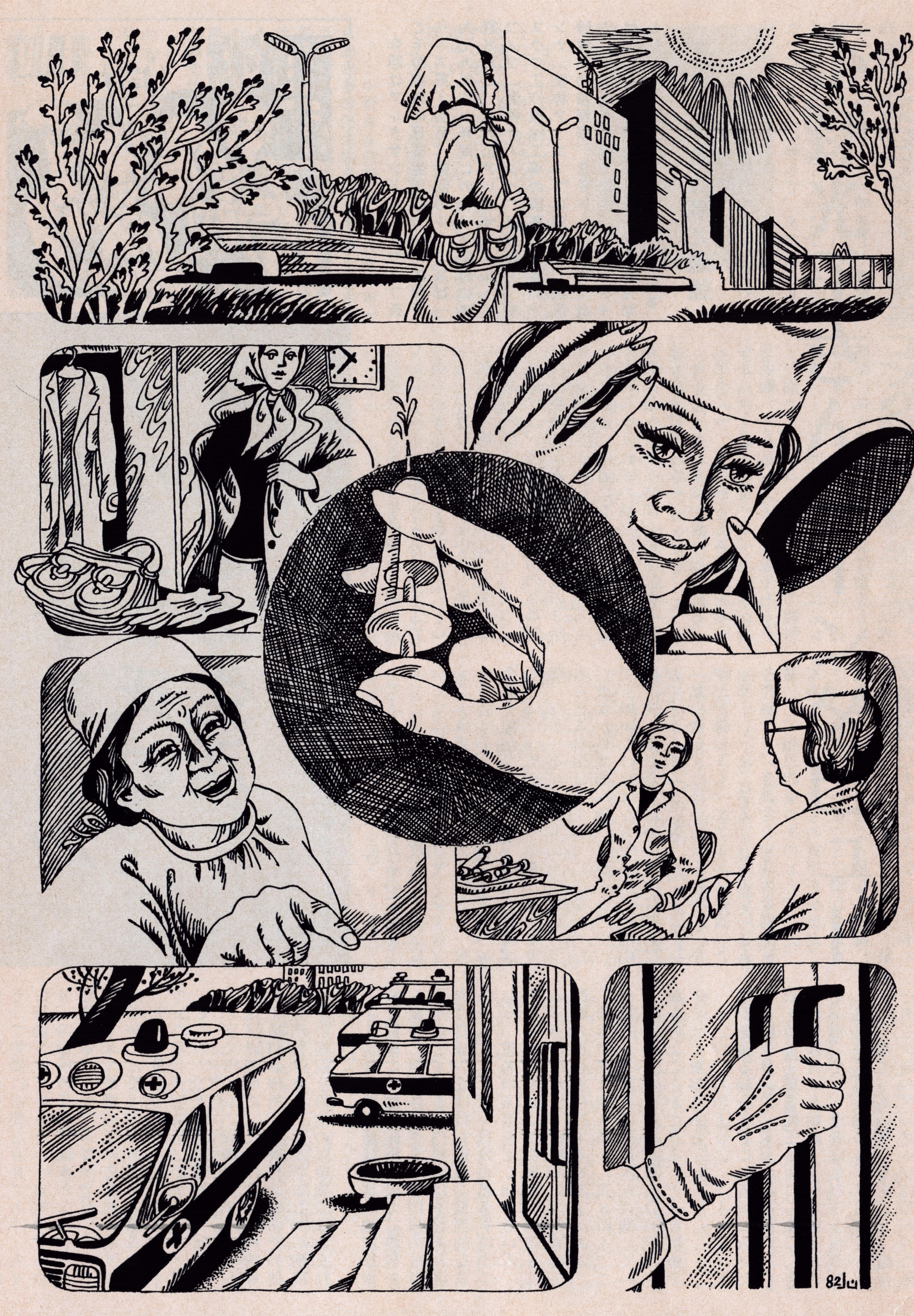
モスクワには30の区がある。それぞれの区に5―10の診療所がある。これが地区診療所だ。これには小児科診療所や歯科診療所、皮膚科診療所その他の専門科診療所、さまざまな科の病院、省庁の病院その他の医療施設は含まれない。

アーニャの診療所は、他の地区診療所と同様に、総合医療施設で、内科から眼科に至るさまざまな専門科の医師をかかえている。内科医はそれぞれ区内に自分の受け持ち地域（地理的な意味で）、すなわち自分の患者を持っており、患者の大半をよく知っている。それぞれの医師には看護婦が配属される。そのほかに、診療所には看護婦が医師の役目を代行する処置室がある。

診療時間は朝8時から夜8時までで、土曜日と日曜日は当直医が待機している。必要な場合には、患者は自宅に医師を呼ぶことができる。どんな医療サービスも無料である。

……いつものように、アーニャは仕事が始まる10分まえに処置室に入った。靴を履き替えて、入念に手を洗い、白衣を着て、髪を帽子の中にしまい、患者の受け付けを始めようかと廊下をのぞいた。だが、患者はまだいなかった。

処置室に雑役婦のリーザおばさんが入って来て、あいさつをすると、総合ビタミン剤のアンプルが12個入った箱

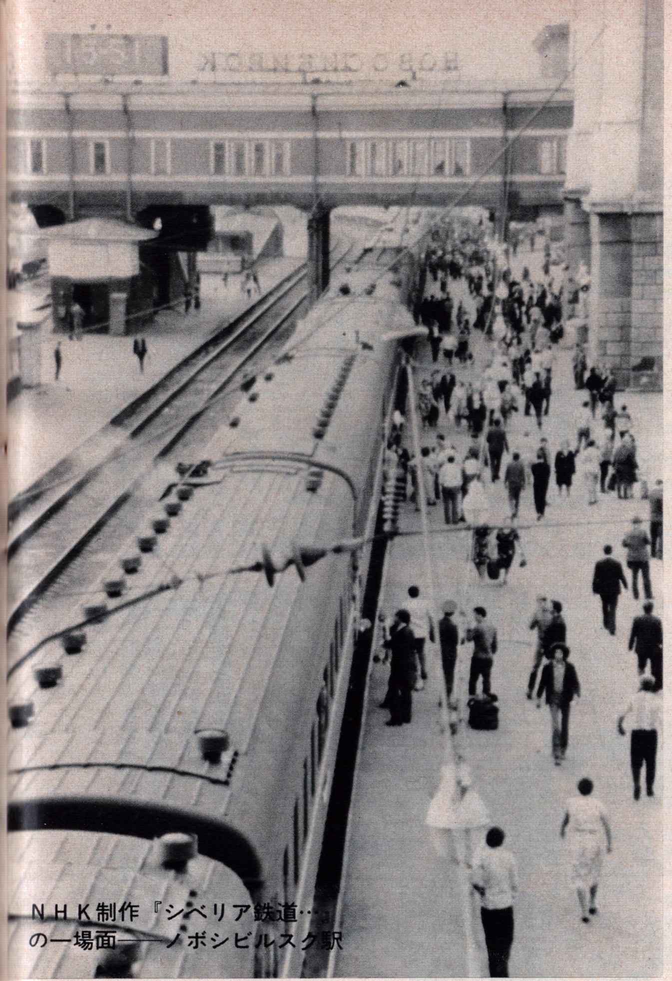


を差し出した。
「婦長がこれを打ってもらいなさいって」と彼女は言った。「春だものね。ビタミン欠乏症にならないように、お願いするわ」
　注射を打ってもらってからも、話し好きのリーザおばさんはなかなか立ち去ろうとしない。
「アーニャ、あなたは秋にやめるんですって？」
「しかたがないのよ、リーザおばさん」
「仕事はすっかりやめてしまうの？ それとも、どこかほかで？ 仕事をしながら学校に通う許可は出たの？」
「もちろん、働くわ」 アーニャは笑い出した。「ただし、勉強がうまく行った場合ね。そうじゃないと、大学は働くことを許可してくれないから」
「そうね、この区に1ヵ月まえに開設された新しい病院へ行くのがいちばんいいわ。看護婦は引っぱりだこだし、特に夜勤はね。あなたなら、どこでも大歓迎だわ。あら、もう済んだの？ 気がつかなかったわ」
「私も病院のことを考えたの。それとも、救急隊にしようかって」
「でもフルタイムで働いたら、時間がとれないじゃない？ パートタイムなら、ちょうど週に1回半の当直があるわ。これならあなたの負担にならないし、勉強のためにも家族のためにも時間が残るわよ」
「そうね」
「ああ」 リーザおばさんは溜め息をついた。「私たちは他人に教えるのは上手だけど、自分が学ぶには頭が足りない……どうして私は若いころ勉強しなかったんだろう？」
「戦争よ」
「戦争ねえ」 リーザおばさんは、自分が前期（8年制）中等教育しか修了しなかったことの口実をアーニャが見つけてくれたので、感謝していた。「戦争ねえ」と彼女はくり返した。「戦争が終わって、もう37年になるのね。確かに、その後は子どもが生まれて……でも、あなただって子どもが2人いるのに勉強している……」
　アーニャはそこで誠意を込めて、説得するようにリーザおばさんを弁護した。
「果たして比較できるかしら？ いまの生活は、戦後のあなたたちの生活と全然ちがうわ。たとえば、あなたはご主人と2人のお子さんとどこに住んでいたの？」
「ああ、思い出させないで」 リーザおばさんは重々しく溜め息をついた。「私たちのアパートは爆弾で焼けちゃってね。初めは2家族に1部屋が支給されたわ。もっとも、1年後には個室をもらったけど。でも、小さな部屋だったわ。ベッドとテーブルを置くだけで精一杯」
「私は個室が三つあるフラットに住んでいるわ」
「それはそうだけど。でも私は新聞で、いまや働く者の$\frac{3}{4}$が高等教育か中等教育を修了しているという記事を読んだわ。私はその中に入らないの」 リーザおばさんはふたたび溜め息をついた。
「その代わり、息子さんたちやお嫁さんたちがその中に入っているわ」
「そう言ってしまえばそれまでだけど」 リーザおばさんの目には悲しみの色が浮かんだ。「上の息子は技師で、その嫁はあなたと同じく、もうじき医者になる。下の息子は建設中等専門学校を卒業して、その嫁も建設関係の仕事をしている。みんな、やはり夜間学校で勉強したの。勉強しない理由があるかしら？ おカネを払う必要はないし、それどころか、試験勉強のために毎年1ヵ月、追加の有給休暇さえもらえる。交通費は学割が利くし、上級生になれば週に1日、勉強のために休むこともできる」
「私たち医学生は、夜間部は低学年にしかないの」
「そうでしょうとも」 リーザおばさんは慎重に言った。「医者になるためには勉強に全力を注がなければいけませんからね。人々の健康にかかわる仕事をするんですから」
「リーザおばさん、あなたをいますぐうちの学校の講師にしたいわ」 アーニャは笑い出した。「あなたならその場で私たちに、わが国では人口あたりの医者の数が世界でいちばん多いこと、わが国では世界の医者の総数の$\frac{1}{3}$、ヨーロッパの医者の半分以上が働いていることを講義できるわ」
　処置室のドアが開いた。
「よろしいですか？」
　静脈注射のために最初の患者が来たのだ。仕事が始まった。
　患者はほとんどひっきりなしに、次から次へとやって来た。話どころではなくなった。それでもこの日、アーニャはもう一つの会話をした。こんどの相手は交替の看護婦だった。
「アンナ」と、処置室の第2看護婦イリーナ・ワシリエブナは、あいさつもそこそこに、厳しい調子で切り出した。「あなたは、ここをやめるって話だけど？」
「ええ」
「もちろん、それはあなたの自由よ」イリーナ・ワシリエブナはアーニャを厳しく見つめた。「あなたはご存知、私がもうじき55歳になるってことを？ 私は年金の手続きをしているの」
「知らなかったわ。でも、なぜそのこと私が？」
「なぜですって？ いいこと、私が権利どおり年金生活に入って、仕事をやめたら、患者さんたちは一度に2人の新しい処置室看護婦に慣れなければならないのよ！」
　イリーナ・ワシリエブナはこの診療所でもう30年も働いている。だから患者たち、特に年輩の患者たちは、単に注射を打ったり、血圧を測ったり、吸い玉を当ててくれる看護婦としてだけでなく、要領を得た助言をしてくれる良き知り合いとして彼女を頼りにしている。
「でも、私は勉強のためにやめるのです」 アーニャは言いわけを始めた。
「分かっているわ。私も家に閉じ込もるつもりはないし、力がつづくかぎり働くわ。主任医師もそうして欲しいって頼んでいるし」
「年金の方は？」
「心配しないで。年金は全額支払われるし、賃金ももらえるわ。これは私たち看護婦の特典ですからね」
　アーニャの帰り道は、新しい区の病院のわきを通っていた。〈寄って、話してみようかしら？〉とアーニャは考えて、思い切ってドアの把手を引っぱった。

（さし絵　Ｌ・ナスイロフ）

ソ連の人々の心に通じる道

——NHK制作『シベリア鉄道の旅』関係者に聞く


NHK制作『シベリア鉄道…』の一場面——ノボシビルスク駅

NHK制作のTVドキュメンタリー番組『シベリア鉄道・九〇〇〇キロ・8日間の旅』は前編と後編がそれぞれ2月12日と19日に放送され、反響を呼んだ。放送後すぐに本誌にも読者から感想が寄せられた。

本誌のP・ロマノフ記者はNHKを訪ね、この番組を企画・制作した報道局外信部次長の漆間　汎氏、カメラマンの早川　昇氏、ディレクターの鈴木芳夫氏、石黒一郎氏の話を聞いた。

——『シベリア鉄道8日間の旅』の制作班を取材して欲しい、という読者からの手紙があったので伺ったのですが……

漆間氏　うれしいことに、この番組は大変好評で、大勢の人に見てもらえた。視聴者数は、前編の一回目の放送が二二〇〇万人、再放送が九〇〇万人、後編の一回目の放送が二二〇〇万人、再放送が八〇〇万人、合計六一〇〇万人だった。

この放送に対する関心の高さは、日本の新聞・雑誌、視聴者の反響の多さが何よりもよく物語っている。手紙や電話で再放送を求める声が数多く寄せられている。年配の人たちは戦後自分たちが見た記憶の中の光景と比較し、若い人たちはユニークなシベリア横断鉄道を、またそれを通してソ連の一部を発見している。

われわれの企画は成功したと言っていいだろう。もちろん、直接番組制作にあたった専門家集団、それにまず第一に、鉄道に詳しいカメラマンの早川さんの力によるところが大きい。

——この番組を通して何を一番描きたかったのか?

漆間氏　ずっと以前からシベリアを撮りたいと思っていた。シベリアがソ連でどんな位置を占めているのか、地理的関係だけでなく、ソ連の人たちの生活の中でのシベリアの位置というものを表わしたいと思った。同時にこの鉄道はただ単なる輸送手段ではない。この鉄道を旅することによって、ソ連の人々をよりよく理解できる。だから、この番組で一番何を表現したかったかと言えば、九〇〇〇kmの鉄の道を走る列車、広々した大地、シベリアの風景とシベリアを征服した人々、そのすべてだ、と答えたい。主要な登場人物としての列車が、この番組の主人公であるソ連の人々の性格を明らかにするのを助けている。

——撮影班は東京で練られた台本に従って作業したのか?

石黒氏　出発前に基本的プランは出来ていた。番組の制作準備と撮影作業に協力を惜しまなかったソ連国家テレビ・ラジオ委員会を通じてあらかじめ撮影の出来る場所の目安はついていた。乗客へのインタビューはもちろん、自然に生まれたものだ。実のところ、ソ連の人が、外国人記者の質問にこれほど率直に答えてくれるとは思っていなかった。


インタビューに答える早川氏（右）と石黒氏

漆間氏　鉄道を撮影するのはもちろん、簡単なことではなかった。それに、準備の段階でずい分資料を集めたのだが、どれも古いものばかりだった。日本はソ連のことを本当によく知らない。特にシベリアについては知られていない。バム鉄道の大建設についてもだ。

——『今日のソ連邦』に載った記事は参考になったろうか?

漆間氏　そう、参考になった。

石黒氏　具体例をあげよう。シベリア鉄道を行く〝ロシア号〟がV・I・レーニンの記念碑のそばを通過する時、機関士が汽笛をならす話は『今日のソ連邦』誌で読んだのだが、この瞬間をカメラに収められたのは幸運だった(番組をごらんになった方は後編のこのエピソードを思い出されるだろう)。

——乗客たちは8日間で目的地に着いたが、撮影班の皆さんは何日かかったか?

早川氏　いったいどのくらい車中で過ごしただろう……なにしろ、56日間の取材旅行を、まるまる全部撮影に費やしてしまった。途中何度も下車し、いろんな都市に滞在した。一日に一度しか通過しない列車とその土地の名所旧跡、風景を撮らなければならなかったし。例えば、ノボシビルスクには一週間滞在した。だが、イルクーツクでは残念だった。列車がイルクーツクを通るのは夜だけだったから、撮りたい景色をバックに、と思っても出来なかった。

——ソ連に滞在して個人的に受けた印象は?

早川氏　われわれ日本人にとって興味深いことがいろいろあった。例えば、ソ連の鉄道では女性が大勢働いている。駅での改札も女性がやっていたし、連続8昼夜勤務の車掌(一車両2人の交代勤務)も女性、ポイントの切換えも女性がやっていた。ノボシビルスクでは駅長さんも女の人だった!

石黒氏　一番おかしかったのはナホトカだった。ナホトカでの撮影は3日間を予定していた。だが、朝ナホトカに着いてみると、その日の夜行を逃すと次の列車まで一週間待たなければならないという。それでは仕方がないというので、急きょ2班に分かれて撮影を開始した。3日の予定を一日で撮り終え、その日のうちにナホトカを発った。

——列車の中で産気づいた乗客をカメラはとらえていたが……

早川氏　おそらく日本ではちょっと見られない光景だろう。乗客たちの様子、鉄道職員と救急医療班の対応の仕方をぜひカメラに収めたかった。女性を列車から運び出すところを撮りたいと思い、乗車口の所で待ち構えていたのだが、反対側から出てしまい、救急車に移されるところは撮れなかった。

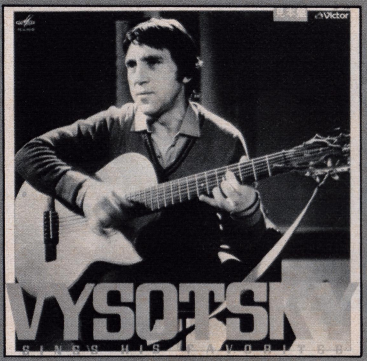
——何日間もソ連人の中で過ごされたが、ソ連人をどう思ったか?

鈴木氏　言葉が通じないので自由に話が出来なかった。だがソ連の人たちの日常を目の当たりに見た。列車の中で誕生日を祝ったり、歌って、語り合い、ゲームに興じ、子どもと遊ぶ人の姿があった。

早川氏　それにわれわれ日本人に対する友好的雰囲気をいつも感じた。日本に対する生の関心があった。日本のソ連に対する関心よりずっと強いものだった。

——今後の放送予定は?

早川氏　夏にもう一度やる。『シベリア鉄道』は日本放送出版協会から単行本としても出版される。



ビクター音楽産業からウィソツキーのアルバム

3月21日にビクター音楽産業から新しいレコード『いまだ日は落ちず・ウィソツキー』（VIP7308　2500円）が発売された。

ウラジーミル・ウィソツキーはモスクワ・タガンカ劇場の名優として活躍したが、シンガー・ソングライターとしても人気が高かった。惜しくも2年まえに42歳で急逝したが、葬儀には何万人ものファンが参列して、タガンカ広場を埋めつくした。

収録されているのは「いまだ日は落ちず」「黒い金」「輪廻」など18曲。いずれもウィソツキーの代表的なナンバーで、ロシアの魂とも言うべき感動的な歌をギターの弾き語りで聞かせてくれる。ソ連国内で発売された二つのアルバムから、重複を避け、最良の形で編集されたベスト盤となっており、詳細な訳詩が添付されている。

新しい試み——日ソ共同出版の絵本



ソビエト児童文学翻訳家　宮川　やすえ

このたびモスクワのプログレス社と東京の新読書社とで、〈ソビエトの子どもの本〉シリーズとして絵本が四冊共同出版された。

『いいってどんなこと？わるいってどんなこと？』マヤコフスキー作、キリロフ・ヴェ絵、松谷さやか訳

『子ねこのチュッパが、とりをねらわないわけ』チャルーシン文・絵、松谷さやか訳

『いきているぼうし』『シューリクのまほう』ノーソフ作、セミョーノフ絵、福井研介訳

の四冊である。

一九七九年九月モスクワで開かれた第二回国際図書展の時、プログレス社と新読書社との間で、日ソ共同の児童書を出版する話が打ち出された。そしてそのとき本を両社で選び、原本のロシア文のところに日本から送られた日本文の写真植字をモスクワで入れ、印刷、製本をして出来上がった本が日本に送られてきた。

マヤコフスキー作『いいってどんなこと？わるいってどんなこと』は三歳児ぐらいまでの幼児むきの本で、原文は詩。

ウラジーミル・ウラジーミロビチ・マヤコフスキー（一八九三—一九三〇）は、グルジアでロシア人林務官の家族に生まれたが、父の死後モスクワに移転した。革命の前より彼は、プロレタリア詩人として活躍していた。その頃の作品には『ズボンをはいた雲』（一九一五年）、『戦争と世界』（一九一六年）などがある。

一九一七年、革命が成就したその日から、彼は労働者階級の忠実な同盟者となった。

革命後のマヤコフスキーの芸術は、二つに分けることが出来る。

一つは革命の謳歌とその擁護、もうひとつは諷刺的な作品。詩人としてのマヤコフスキーは、文学に新しい道を開いた。詩の手法と様式を非常に広く豊富にしたからだ。彼の詩は情熱にあふれ、新しい国の建設を力強くうたいあげている。もちろん彼は大人のための詩を書いた詩人だが、児童のためにも詩を残している。

『いいってどんなこと？わるいってどんなこと？』は、ソビエトでは有名な幼児むきの詩で、これまで何人もの画家の挿し絵で何度も再版されている。ソビエトの子供ならほとんどの子が知っているといっても、いい過ぎではないであろう。

『子ねこのチュッパが、とりをねらわないわけ』の作者エブゲーニイ・イワノビチ・チャルーシン（一九〇一—一九六五年）は、一九二〇年にレニングラードの本のグラフィックデザイナーの若者達が集まっているグループに入った。

そこではレーベジェフ（『静かなお話』マルシャーク作、福音館）の指導のもとに、革命後、すばらしい挿し絵を残したワスネツォフ（『三びきのくま』トルストイ作、福音館）などが、新しく生まれかわった国の児童たちのために挿し絵を学んでいた。

エブゲーニイ・チャルーシンは、一生動物の絵をかきつづけた。私も彼の短編集『くまのりょうし』（文研出版、一九七二年）の中に『子ねこのチュッパ』を入れたが、彼のかく動物はみな生き生きとしていて、かわいらしく、一目で心のなかが暖かいものでいっぱいになる。

彼は動物作家ビアンキの作品にも沢山の挿し絵をかいたが、文と絵と両方かいた作品も数多く残っている。このほか日本で紹介されたものに、『おりの中の子供たち』（岩波書店）もある。

現在、彼の息子のニキータ・チャルーシンが父の血統を受けつぎ、動物の挿し絵をかきつづけている。

ニコライ・ニコラエビチ・ノーソフ（一九〇八—一九七六）は、その作品が外国にまで知られている有名な児童作家であるが、代表作は『ヴィーチャとその友達』。この作品は日本でもいろいろな訳者の訳で、何度も再版されている。ノーソフの作品はユーモアがたっぷりあって、読んでいくうちにふふふと笑ってしまう。







一九七二年、まだノーソフが健在であった頃、私と絵本出版社のデザイン長ユー・ポリワーノフ氏と、日本語の先生インナ・ルミャンツェワ女史と、ほるぷ出版の編集者宮崎ひろさんの四人で、モスクワにある彼の家をおとずれたことがある。彼はもうすっかり髪がなくなっていたが、とてもゆかいな性格の持ち主で、にこにこしているノーソフのとなりにすわって、ペロリと舌をだした私の写真がある。彼の作品がユーモラスなのも、彼のこの心のなかから生まれたのだなあと、その時思ったものだ。

彼は三巻の全集を出版しており、『ネズナイカ太陽の町へいく』その他、長編中編短編が数多くその中に含まれている。

今回出版された『いきているぼうし』も『シューリクのまほう』もその中に入っているが、イ・セミョーノフの挿し絵で、短編は絵本としても出版されている。この絵本も何度も再版されている。

ソビエトでは、作家と挿し絵画家とが組んで絵本を出版することが多い。マルシャークの作品にはレーベジェフの挿し絵のものが多いし、チュコフスキーの作品にはコナシェービチの挿し絵の本が多いというように。もちろん現在では、レーベジェフもコナシェービチもこの世に亡く、次の世代の画家の挿し絵にかわりつつあるが……

ノーソフの二冊の本の挿し絵を担当しているイワン・セミョーノフの絵は、アニメーションに似た、ゆかいな作風に特徴があり、彼は長い間「ベショールイエ・カルチンキ」（ゆかいな絵）という幼児むきの雑誌の編集者をしていた。

さて、作家と画家の紹介はこれ位にして、このたび出版された絵本四冊を見ると、まずおどろいたのは、印刷と紙がよいことだ。ひと昔前まではソビエトの絵本といえば、安いけれど紙がわるく、印刷も色がぶれているものときまったように思うひとが多かったものだ。しかしこの四冊の本の挿し絵は少しのぶれもない、見事な印刷で、製本もしっかり出来ている。

内容もそれぞれちがったジャンルのもので面白いが、なぜ何歳ぐらいと対象を示さなかったのだろうか？日本だとシリーズで本を出版する時には何歳むきと読者の対象をきめる。マヤコフスキーの『いいってどんなこと？わるいってどんなこと？』は3歳児でも理解出来るが『シューリクのまほう』の方は漢字も入って小学校一—二年の読みものになっている。

「内容もいいし、印刷、紙、製本もりっぱに出来ているのだから、レイアウトも、もう少し紙面にゆとりをもたせ、文字を少なくしたら？」と新読書社社長の伊集院氏にいうと、

「文字が多いのは、両親が子供に読んできかせればよいし、たとえば福音館の本も原本通りのレイアウトに全文訳を印刷してあるのだから、これでよい」と、自信をもって話された。

しかし次の本が出版される場合は、もう少し文字を少なくするか、ページをふやすか、せめてもっとよみやすい活字にするか、もうひと工夫されたら、もっとよい本になるのになあと思った。

それはともかくとして、子供のすきなこと、考えること、やることは、どこの国の子供でも同じこと。理解しあえるのだから、今後も、日本の作品でも、ソビエトの作品でもすぐれたものがあったら交換しあって、子供たちに読ませたいと思う。

まずお互いを知り理解することが、平和につながる道なのではないであろうか。

ここで紹介した〈ソビエトの子どもの本〉シリーズの絵本はA4変型判（21cm×26・6cm）、平均16ページ。4冊セットは箱入りで一六〇〇円。分売の場合は各冊四〇〇円。お近くの書店にない場合のお申し込み・お問い合わせは、左記へ。

新読書社（郵便番号113、東京都文京区本郷6—8—10、電話03—814—6791）

士別市を訪れて

ノーボスチ通信記者　V・グリニュク

2月6日から8日まで私は北海道を旅した。私が訪れた旭川、士別両市では私のいる間中零下25度の寒さが続き、降雪が深い雪だまりをつくっていた。それはわがロシアとよく似ていた。この旅行中、ソ日交流を深めたいという両国民の根底には人間的に共通のものがあるのだという思いが、しばしば頭に浮かんだが、それもひょっとすると、ここの自然がわが国の自然と酷似していたためかも知れない。

士別市で私は、北海道民と外国の人人との交流の拡大に、情熱を燃やしている人々を知った。地方紙の道北日報社の藪中寿治・編集部長は、忙しい中を昨年開館したばかりの士別市立博物館に案内してくれた。博物館には北海道の開拓と関連した展示品のほかに、北半球諸国関係の展示品があって、その中の美しく飾り付けられたソ連関係の陳列棚を見てとても嬉しかった。北海道の他の地区と同じように、士別市にも北方圏交流協会があった。札幌の北方圏センターが出した『北方圏時代』は、北海道とソ連との交流も取り上げており、とくにサハリンの石油の将来の対日供給が北海道の経済にとって重要な意義をもつことと、バイカル・アムール鉄道の開通とシベリア・極東地域の天然資源開発が北海道の経済の発展に与える影響について述べている。

対ソ友好を深めたいという士別市民の希望は、日ソ協会士別支部を設立しようという市民の動きにも現れている。2月6日夜、実業家の高島一雄氏は日ソ協会支部設立発起人の会合を開いて私を招待してくれた。約3時間続いたこの会合には、青年商工会議所士別支部の幹部や共産党の市議、地区労評支部長、建設会社社長ら17人が出席し、日ソ間の経済、文化交流の拡大の必要をこもごも語った。またソ連社会の生活におけるソ連共産党員の地位と役割、民族文化の発展、ソ連における教育、医療システム、日本と日本国民に対するソ連国民の態度についてたくさんの質問が出た。

日本青年商工会議所の代表団員としてソ連を何度か訪問した実業家の岡田晃氏は、訪ソの印象を語り、モスクワの友人たちをなつかしそうに思い出していた。

翌朝、私は北海道のこの一角で新しいよい知人を得たとの満足感を抱いて士別を離れた。士別の知人たちが日ソ両国民間の善隣を強めるうえで成功を収めることを希望したい。

札幌のハバロフスク展をバセーキナ副知事が視察



北海道日ソ友好文化会館で柴野理事長夫妻（中央）と記念撮影をするバセーキナ副知事（右から5人目）一行。左から2人目――ルドネフ札幌駐在ソ連総領事。

札幌市の北海道日ソ友好文化会館（柴野安三郎理事長）で1月30日から開かれている「ハバロフスク展」（同会館、北方圏センター、北海道新聞社の共催）を視察のため、ハバロフスク州のT・S・バセーキナ副知事が2月15日、同会館を訪れた。バセーキナ副知事は文化・スポーツ・保健等を担当する女性の副知事で、「ハバロフスク展」の全出品物の総括責任者として陣頭指揮をとった。それだけに、出品物が同会館の役職員や専門のデザイナーたちの手で立派に展示されているのを見て、感慨もひとしおの様子だった。

同日夕、百景園で開かれた柴野理事長主催の歓迎パーティーが、約50人の出席者はハバロフスクとゆかりのある人たちばかりのため、初めからなごやかな雰囲気が漂い、親しみのこもった催しとなった。

あいさつに立ったバセーキナ副知事は、「熱烈な歓迎を受けて、故国によいお土産を持って帰れます。ハバロフスクに対する札幌市民の高い関心を集めていただき、大変満足しています。北海道の人たちを友人として迎えるために、私たちはいつでも扉を開いています」と述べた。

バセキーナ副知事は翌日、寺田・北海道副知事、板垣・札幌市長、今井・札幌商工会議所会頭、東条・北方圏センター会長、鈴木・北海道新聞社常務、伊東・北海道大学スラブ研究センター長、山本・札幌テレビ放送社長などを表敬訪問し、親交を深めた。

「ハバロフスク展」は新潟、福井、兵庫など各県でも開催される予定。

西日本ロシア語友の会結成へ

福岡市　山口　浩



▲友の会結成準備会であいさつする戸辺・北九州大学教授

本年二月二一日午後、福岡市内のロシア料理レストラン「ツンドラ」で「西日本ロシア語友の会」の結成準備会が開かれました。これは、雑誌「現代ロシア語」の創刊以来の読者であった山内正樹、座生泰一の両氏が発起人となり、ナウカ株式会社福岡出張所の協力のもとで計画されたもので、当日は福岡県のほか、宮崎県、熊本県からの参加者も加えて二十名ものロシア語愛好者が一堂に会しました。また、ゲストとして東京からはロシア語通訳協会を代表して徳永晴美氏が出席してくれました。

集まった人たちの顔ぶれは大変多彩で、戦前のハルビンでロシア語を学んだ人、ロシア美術史の研究家、ソビエトの児童文学の翻訳を自費出版した高校の教師、大学のロシア語講師、教授、直接ロシア語を仕事には生かしていないが、ロシア語とロシア・ソビエト文学に魅せられた人たち、そしてＮＨＫテレビ・ラジオ・ロシア語講座などを通じて学習をはじめたばかりの学生たち、というように、職業、年齢、学習レベルを異にする人たちでした。このようにさまざまな人たちが、これからは一緒に仲よく何かを学んでいこうということで話し合いが進みました。

結論として、北九州大学教授戸辺又方氏その他のベテランをチューターとして、原書による名作読書会をやろう、トルストイ、ドストエフスキーなどの名場面を生のロシア語のカセットを使って耳からも鑑賞するような勉強会を定期的に組織していこうということになりました。初心者にも上級者にも一様に楽しく学べるように工夫して会を運営していこうという方向も打ち出されました。また、月に一度位のペースで会報も出そうという案も出ました。

西日本各地でコツコツとロシア語や文学を学んでいる皆さんの参加を期待しています。

友の会への連絡先は、〒八〇一、北九州市門司区長谷一ノ一四ノ二八、戸辺又方（電）〇七三一―三三二―〇六七四まで。

山形でロシア音楽の夕べ

山形市　坂部　かよ

山形市の坂部かよさんから編集部に、「ミュージック・サロン――ロシアのひびき、ロシアの心」というレコード・コンサートの美しいプログラムと一緒に、次のような手紙が寄せられましたのでご紹介します。

この度（２月11日）、山形市でささやかなロシア音楽のレコード・コンサート（日ソ協会山形支部後援）を催しました。司会の下竹一司氏は、アナウンサー歴10年程のＮＨＫ山形放送局のアナウンサー。ロシアに魅せられたのも同じ程の年数ということで、特にロシア音楽に造詣の深い方です。日ソ協会の会員として共に活動をしておりますうちに、「折角のよいレコードを披露していただく会を開きましょう」ということになり、私共年輩夫婦が準備の労をとるということで始まりました。

雪に閉ざされる真冬に、温かなボルシチを食べながらロシア音楽を聞く、という計画でした。ビートは山形ではなかなか手に入りません。それなら種を入手して栽培しようと、何とか種を探しましたのが、夏の盛りを過ぎた頃。私としては、ビートに執念をかけたわけです。

秋野菜のつもりで、農家に栽培を依頼しましたが、結局は蒔く時期が遅かったようで、成長不充分でした。でも、何とかコンサートでの34人分のボルシチは、とてもおいしく、美しくできました。ディルの葉も用意しました。

肝心のコンサート内容ですが、参加者一同、さすがはプロと、下竹氏の名解説に感心しながら、レコード鑑賞を楽しみました。

下竹氏は訪ソ旅行２回、私は１回で、共に日ソ協会で『今日のソ連邦』誌を愛読させていただいております。雪の山形で、楽しく感動に満ちたロシア音楽の夕べのひとときがもたれましたことを、ちょっとお知らせ申し上げたくなり、プログラム（デザインは私）をお送りいたしました。

参会者より、ぜひまた、会をもつようにとの希望も強かったので、２回、３回とこれからも続くかと存じます。

注目の振り付け師 ワレンチン・エリザリエフ

アルカジー・ブルジョゾフスキー
カメラ V・ドラチェフ



ワレンチン・エリザリエフは、レニングラード・バレエ学校在学中に苛酷な運命に見舞われた。卒業を間近に控えたある日のレッスンで大けがをして、ダンサーになるのを断念しなければならなかったのである。だが今ではバレエ仲間は、彼を幸せな男だと見ている。エリザリエフは26歳でソ連有数のバレエ団——ミンスク・オペラ・バレエ劇場の首席振り付け師になったからだ。すでにここで10シーズン働いてきたが、彼の新しい出し物はそのつどベロルシア文化界のビッグ・イベントになっている。エリザリエフ振り付けのバレエは、モスクワ、レニングラード、ワルシャワ、ブダペスト、ソフィア、ヘルシンキの公演でもファンの注目を集めた。現在恐らくエリザリエフはソ連バレエ界の最も才能豊かな一人といえよう。





ミンスク・オペラ・バレエ劇場首席振り付け師ワレンチン・エリザリエフ

左上　『スパルタクス』から

左下　ハチャトゥリャン作曲、エリザリエフ演出『スパルタクス』から。スパルタクス——ウラジーミル・コムコフ演。

ミンスク・オペラ・バレエ劇場のロビー



ロジオン・シチェドリン編曲によるビゼーの『カルメン組曲』が、バレエ振り付け師としての彼のデビュー作だった。すぐれたキューバの舞踊家アルベルト・アロンソが、ボリショイ劇場でマイヤ・プリセツカヤ主演の『カルメン組曲』を振り付けたあとだったから、エリザリエフが自分で演出するといっても、なかなか大変なことだったろう。しかしその少し前に全ソ・バレエ振り付けコンクールで入賞していたこの新人は、アロンソの名振り付けを真似ようとはしなかった。エリザリエフが演出したカルメンは、これまで見慣れたオペラの形象ともかなり違っていた。彼は、カルメンのジプシー的な性格を表わすのに今まで必要と考えられていたカルメンの気障りな動作を捨て去った。観客の前に現れるのは、運命の犠牲



レッスン中のエリザリエフ

者でも、愛におぼれる移り気の女（今までのカルメンはみなそうだった）でもない。選ぶ権利と感情の自由をあくまでも守り抜き、嘘と偽善を憎む誇り高い人間である。

蜂起したフランドル人民の伝説的英雄ティル・オイレンシュピーゲルの話からインスピレーションを受けたエブゲニー・グレボフが、同名のバレエ音楽を作曲した。人民の擁護者だったオイレンシュピーゲルは、現在の観客に身近な人物となった。オイレンシュピーゲルの形象は、外国の圧制に苦しむ民族の苦悩のシンボルとして、いまベロルシアの人々に、ドイツ・ファシストの占領下で死んだ数百万同胞の運命を思い起こさせている。

エリザリエフのバレエの主人公たちの活躍した時代はそれぞれ遠く離れてはいるが、精神的に似かよっている。エリザリエフは、恐らくそのことを頭に置いて、世界のバレエ作品の多くの登場人物の中から主人公を選んでいるのだろう。彼の作品の中のカルメン、オイレンシュピーゲル、スパルタクスは、自由の権利、つまり個性、精神、思想、感情の自由の権利を守り通した強い人間たちである。そして彼らの性格を浮き彫りにするのが、ダイナミックな振り付け、華やかな構成、場面の息づまるような展開といったエリザリエフの創作方法である。

「私が演出しているのは、現代をテーマにしたバレエだ」と、エリザリエフは言う。そのことば通りかどうかは、歴史物や文芸物、さらには神話的な物にさえ、現在の焦眉の問題が反映されている彼の作品を見れば分かる。

レニングラードのクラシッ


『スパルタクス』から。クラッスス――S・ペスチェヒン、フリギア――L・ブルジョゾフスカヤ。

ク・バレエの学校を卒業した彼は、学校の伝統を心から尊敬してはいるが、伝統をドグマ扱いしてはいない。古典を現代的に演出することが芸術では最も大事なことだと考えている。だから今シーズンはチャイコフスキーの『くるみ割り人形』を取り上げた。彼はバレエの基準にこだわらず、自分の考えの新しい表現形式を探求し、見つけている。ソ連の名バレリーナ、マイヤ・



ミンスク・オペラ・バレエ劇場の建物

プリセツカヤがテレビ公演『ファンタジー』（彼女が主要なパートの一つを踊った）の多くの振り付けを彼に頼んだのも、決して偶然ではない。

エリザリエフは語る。

「私は自分をバレエ界の古典派だと思っている。とは言っても、バレエの振り付け師は世界のバレエ界の興味ある新しい方法を考慮に入れて、自分の作品に取り入れなければならない、というのが私の考えだ。大事なのは、自分が芸術に何を求め、芸術で何を表現したいと思っているのか知ることだ。私が探しているテーマは、自分の世界観を反映し、世界の問題に対する私の姿勢を示すことができるようなテーマだ。バレエを単なる華やかなショーに終わらせたくない。バレエの中には哲学とポエジーがしっかりと共存していなければならない」



▲『天地創造』から



『白鳥の湖』の舞台▶



『ティル・オイレンシュピーゲル』より。踊るのはE・ミーニン。



А Б В

旅行者用ロシア語会話シリーズ(76)

第75課(続き)

新聞・雑誌、ラジオ、テレビ(前号から続く)

このテレビ放送は何時に始まりますか？	Когда́ начина́ется э́та телевизио́нная переда́ча? カグダー ナチナーエツァ エータ チェレヴィジオーンナヤ ペレダーチャ
日本のテレビはヨーロッパと走査線が違います。	Япо́нские телеви́зоры отлича́ются от европе́йских по числу́ стро́к развёртки. ヤポーンスキヤ チェレヴィーザルィ アトリチャーユツァ アット イェヴラペイスキフ パ チスルー ストローク ラズヴョールトキ
貴国のテレビ放送は何チャンネルありますか？	Ско́лько у вас програ́мм телеви́дения? スコーリカ ウ ヴァス プラグラーム チェレヴィージェニヤ
他のチャンネルに切り換えて下さい。	Переключи́те, пожа́луйста, телеви́зор на друго́й кана́л (на другу́ю програ́мму) ペレクリュチーチェ パジャールスタ チェレヴィーザル ナ ドルゴーイ カナール（ナ ドルグーユ プラグラーム）
画面がはっきりしません。直して下さい。	Изображе́ние нечёткое. Отрегули́руйте, пожа́луйста. イザブラジェーニヤ ニェチョートカヤ アトレグリールイチェ パジャールスタ
画面のコントラストが弱すぎます（強すぎます)。	Контра́стность недоста́точна (сли́шком ре́зкая). カントラースナスチ ニェダスタータチナ（スリーシカム レースカヤ）
…の調子を合わせて下さい。	Отрегули́руйте, пожа́луйста, . . . アトレグリールイチェ パジャールスタ …
音	звук ズヴーク
明るさ	я́ркость ヤールカスチ
カラー	цвет ツヴェト
テレビの第1チャンネルの放送は何時までですか？	До како́го ча́са переда́чи пе́рвой програ́ммы телеви́дения? ダ カコーワ チャーサ ペレダーチ ペールワイ プラグラームィ チェレヴィージェニヤ

第76課

訪問	**Визи́т** ウィジート
…さんに会いたいのですが。	Я хоте́л (хоте́ла) бы встре́титься с господи́ном (госпожо́й) . . . ヤー ハチェール（ハチェーラ）ブィ フストレーチツァ ス ガスパジーナム（ガスパジョーイ）…
ぜひお目にかかりたいのですが。	Мне о́чень хоте́лось бы встре́титься с ва́ми. ムニェ オーチェニ ハチェーラシ ブィ フストレーチツァ ス ヴァーミ
ひとつご相談したい件があるのですが。	Мне хоте́лось бы посове́товаться с ва́ми. ムニェ ハチェーラシ ブィ パサヴェータワッツァ ス ヴァーミ
ある事でお話ししたいのですが。	Мне хоте́лось бы поговори́ть с ва́ми по одному́ де́лу. ムニェ ハチェーラシ ブィ パガワリーチ ス ヴァーミ パ アドナムー ジェール
いつ伺ったらいいでしょうか？	Когда́ мо́жно вас навести́ть? カグダー モージナ ヴァス ナヴェスチーチ
いつごろがご都合よろしいでしょうか？	Како́е вре́мя для вас удо́бнее? カコーエ ヴレーミャ ドリャ ヴァス ウドーブニェエ
ちょっとおじゃましてもよろしいでしょうか？	Разреши́те к вам на мину́ту? ラズレシーチェ ク ヴァーム ナ ミヌートゥ
お仕事中おじゃましてすみません。	Извини́те, что отрыва́ю вас от рабо́ты. イズヴィニーチェ シト アトルィヴァーユ ヴァス アット ラボートィ
お待たせしてすみませんでした。	Извини́те, что заста́вил (заста́вила) вас ждать. イズヴィニーチェ シト ザスターヴィル（ザスターヴィラ）ヴァス ジダーチ
お約束の時間に間に合いませんで、すみませんでした。	Извини́те, что опозда́л (опозда́ла) к назна́ченному вре́мени. イズヴィニーチェ シト アパズダール（アパズダーラ）ク ナズナーチェンナムー ヴレーメニ
私は…の林ですが、おじゃましてすみません。	Я Хая́си из. . . , извини́те за беспоко́йство. ヤー ハヤーシ イズ… イズヴィニーチェ ザ ベスパコーイストワ
これが私の名刺です。どうぞよろしく。	Э́то моя́ визи́тная ка́рточка. Рад (ра́да) с ва́ми познако́миться. エータ マヤー ヴィジートナヤ カールタチカ ラッド（ラーダ）ス ヴァーミ パズナコーミツァ

（この課は次号に続く）

この会話シリーズでご紹介するロシア語の旅行者用単語や表現は，1979年にモスクワのルースキー・ヤズイク（ロシア語）出版所（著作権者）から単行本として発行されたS・ネベーロフ著の会話帳が底本になっています。この会話帳の購入ご希望の方は，ソ連図書専門店の「ナウカ」（郵便番号171東京都豊島区南池袋2－30－19，電話03－981－5261） または，「日ソ図書」（郵便番号112東京都文京区水道1－5－16，電話03－811－9190）にお問い合わせ下さい。

今日のソ連邦
一九八二年4月15日号
昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
編集　ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3−9−13・電話03−447−3536）



4月25日から5月5日〔11日間〕・3食付・全観光含・添乗員同行

ゴールデンウィーク ¥325,000ヨリ

雪どけの大地に 春をつげるメーデーパレード

〔新緑のソ連・東欧 特選5コース〕

- メーデーとソ連三大都市
- 長寿国コーカサス３国めぐり
- レーニンゆかりの地を訪ねて
- 二大都市とバルト海
- ドイツ民主共和国、チェコ、ハンガリー

もう、ゴールデンウィークの休日プランはお立てになりましたか？　ソフパックの特選ツアーとして、このゴールデンウィークの初日から終日までの11日間に、素晴しい北国の春をご覧いただけるよう、５コースを設定いたしました。

ソ連各地では、長い冬も終り、大地の生命が躍動する待望の春がやってきます。白樺林も緑の化粧を始めます。モスクワ、レニングラード、キエフの代表的な三大都市コースなど、特色ある多彩なコースにご案内します。メーデー祭典にわき、喜びあふれるソ連へ、どうぞ。

SOVPAK ソフパック　新しい発見と出会い　ソ連・東欧の旅

シルクロード８日間の旅

東西文明の十字路、はるかな時代への旅

4/23、4/30発　新潟発着
￥285,000（3食付）
ハバロフスク、タシケント、サマルカンド、ペンジケント、ブハラ

春のシルクロードでは、色彩が踊り始めます。原色鮮やかな民族衣裳や高くそびえるモスクが、青空のもとで輝いています。

MOSPAK モスパック　大シベリア横断ルート　ユーラシア大陸ひとり旅

㊎横浜発ヘルシンキ　片道7日間
￥141,000より。東京・新潟発もあり。

TROIKA　自由に日程が組める　８日間　トロイカツアー

東京・日曜発着。モスクワ・フリーは
￥310,000より。毎月2〜3本。

●旅行案内書をお送りします。住所、氏名、電話、希望コースをお書きのうえ、下記の「今日のソ連邦」第８号係へどうぞ。

運輸大臣登録一般旅行業49号　JATA・UFTAA
ЯСТБ 株式会社日ソツーリストビューロー

東京：〒105　東京都港区虎ノ門五丁目12番12号　神谷町ビル　☎03-432-6161(代)　大阪：〒550　大阪市西区阿波座一丁目12番20号　竹田ビル　☎06-531-7416(代)

定価　一五〇円
（購読料は会費に含まれる）